

上田市文化財調査報告書第117集

史跡信濃国分寺跡

平成 22(2010)～平成 24(2012) 年度
史跡信濃国分寺跡発掘調査報告書

2014. 3

上 田 市
上田市教育委員会

上田市文化財調査報告書第117集

史跡信濃国分寺跡

平成 22(2010)～平成 24(2012) 年度
史跡信濃国分寺跡発掘調査報告書

2014. 3

上　　田　　市

上田市教育委員会

序

史跡信濃国分寺跡は、古代信濃を代表する遺跡であるとともに、全国の国分寺跡のなかでも特に歴史的重要性の高い遺跡として広く認められています。

史跡指定は昭和5年(1930)に遡りますが、昭和38年から46年(1963～1971)にかけての発掘調査によって、僧寺跡と尼寺跡の伽藍の具体的構造とともに、それらが隣接して立地する特異性も明らかになりました。遺跡の重要性に対する認識を受けて、同43年(1968)に史跡指定範囲の拡大と公有地化が推進され、続いて行われた整備事業により史跡公園化されました。これは国分寺跡の本格整備としては、全国でも最も早い事例に属しています。史跡範囲は古代伽藍跡にとどまらず、八日堂縁日や蘇民将来講(国選択無形民俗文化財)でもつとに名高い現在の国分寺と、蚕室住居に代表される歴史的建物を残す門前の集落などをも含んでいます。このように、古代伽藍跡と、その法灯を伝えながら信仰の場として現在に息づいている寺院とが史跡内で併置していることも、信濃国分寺を際立たせている特徴です。

その一方で、史跡公園も開園から40年を数え、史跡の保存活用に対する考え方やそれを取り巻く社会状況も大きく変化してきている中で、信濃国分寺跡についても改めてその意義と現状を把握・分析するとともに、今後に向けてのあり方を検討すべき時期に来ていました

上田市では、史跡の保全に万全を図るとともに、郷土の歴史文化拠点として活かしていくことを目指し、平成14(2002)年度から、史跡信濃国分寺跡保存整備計画策定委員会(委員長 山中敏史 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 遺跡調査技術研究室長・当時)によって、再整備を含む史跡地全体の保存整備活用に関する指針を示すとともに、平成元年以降の史跡公有化事業で取得した範囲を主たる対象として、改めて史跡の構造解明のために、発掘調査に着手しました。

今回は、僧寺の南西域と尼寺北西域、尼寺回廊南東域を対象に、僧寺と尼寺の区画施設及び尼寺回廊について発掘調査による究明を図りました。残念ながら、築地塀等の区画施設は確認できませんでしたが、今後の究明のヒントとなる遺構が確認されました。

信濃国分寺跡の整備と調査は、全体から見れば、まだ緒に就いたところといえます。今回の調査にあたり、御指導をいただいた史跡信濃国分寺跡保存整備計画策定委員会の委員各位と、ご協力をいただいた地元住民、調査作業員の皆さんに心から御礼申し上げ、序のことばといたします。

平成26年3月

上田市教育委員会教育長

小山 壽一

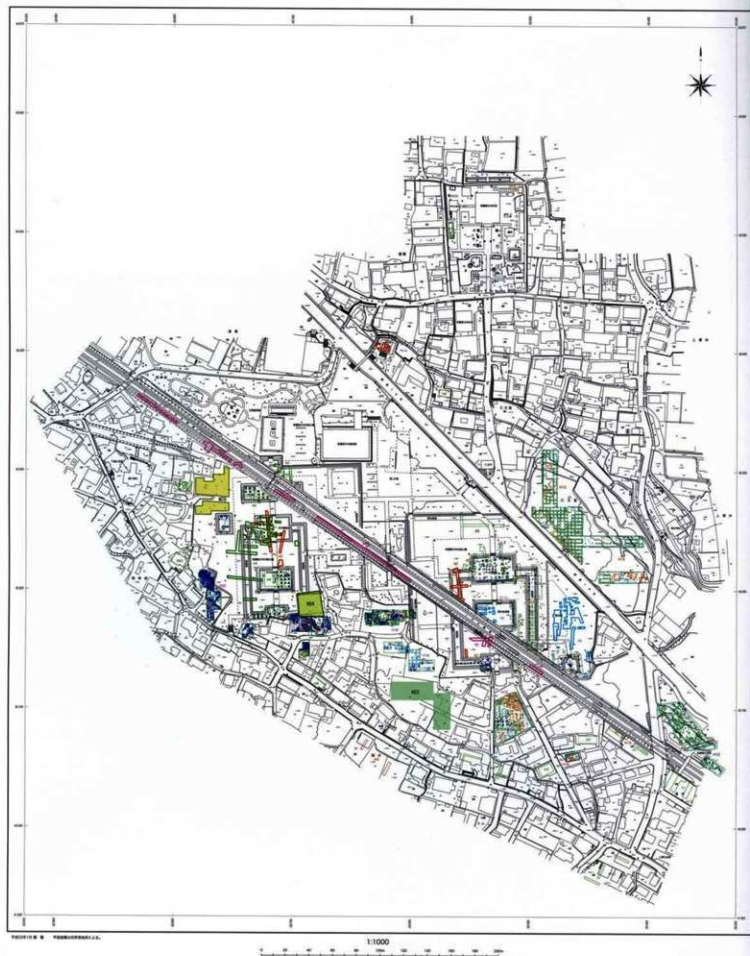
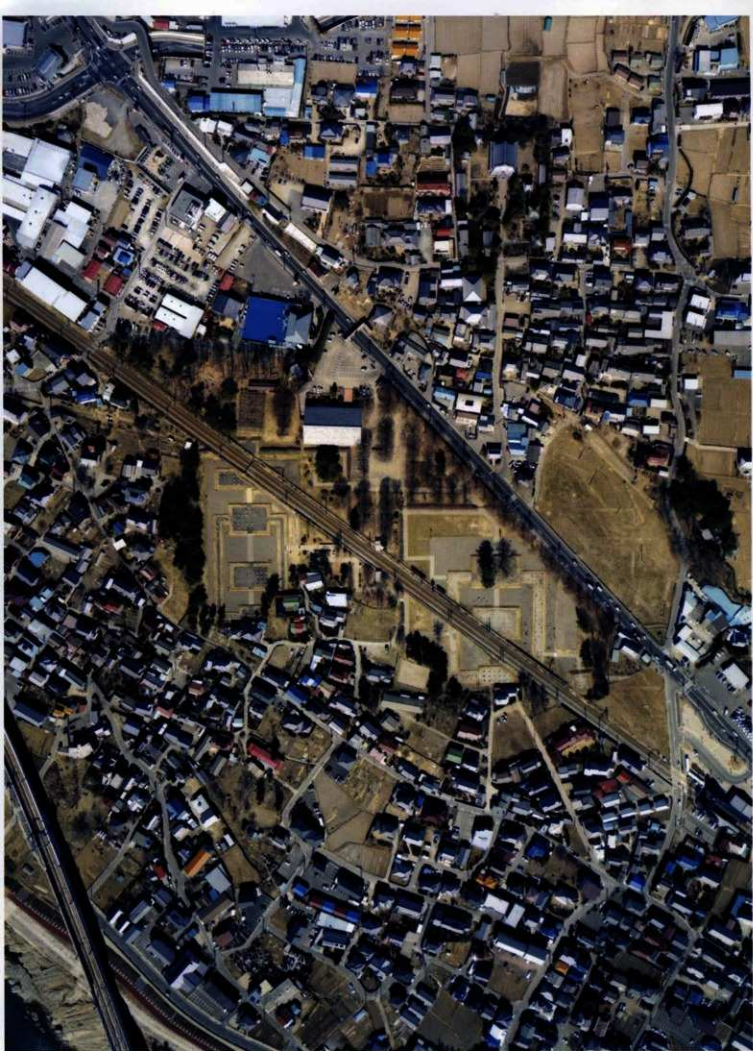


圖1 信濃國分寺跡発掘調査履歴図



PL.1 信濃国分寺跡航空写真(平成17年3月)



PL.2 H22 尼寺北西域調査区全景 (東 手前は尼寺講堂跡、右はしなの鉄道線路)



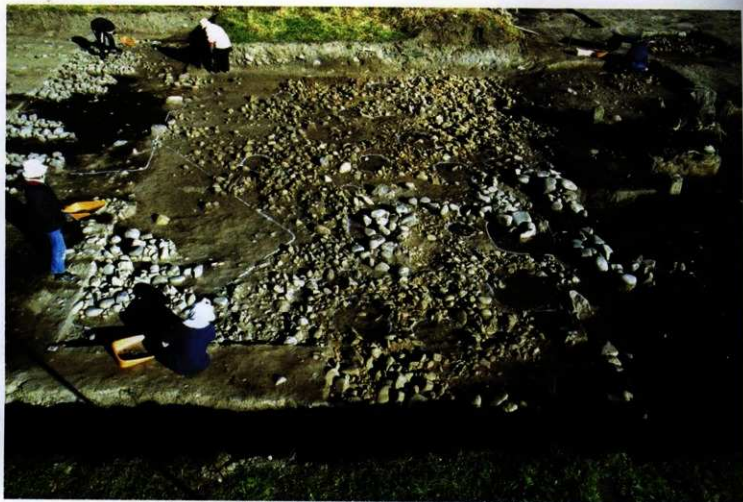
PL.3 H22 尼寺北西域調査区全景 (真上 写真上が西)



PL.4 H22 尼寺北西城北調査区全景 (真上 写真上が北)



PL.5 H22 尼寺北西南調査区全景 (真上 写真上が北)



PL.6 H22 尼寺北西城 北調査区全景 (南 写真右の東側が高くなっている。)



PL.7 H22 尼寺北西城 北調査区全景 (北 ビット列が検出される。)



PL.8 H22 尼寺北西城 北調査区 (東 礫層を抜いてビットが検出される。)



PL.9 H22 尼寺北西城 北調査区 SB-03 竈 (西 礫層を抜いて竪穴建物が作られる。左と前の礫列は近世の暗渠排水)



PL.10 H23 僧寺南西域調査区全景 (真上 写真上が東 左上に僧寺回廊跡)



PL.11 H23 僧寺南西域調査区全景 (南 写真右僧寺跡、左に尼寺跡)



PL.12 H23 僧寺南西域東調査区全景 (真上 写真上が東)



PL.13 H23 僧寺南西域西調査区全景 (真上 写真上が南)



PL.14 H23 僧寺南西城 東調査区土層 (西 地山をわずかに掘り砂礫層が検出される)



PL.15 H23 僧寺南西城調査区 SD-02 全景 (北西)



PL.16 H23 僧寺南西域 (西 写真左上に僧寺跡)



PL.17 H23 僧寺南西域調査 (東)



PL.18 H24 尼寺伽藍及び調査区全景 (真上 写真上が西)



PL.19 H24 寺回廊南東隅調査区全景 (真上 写真上が西 写真右に回廊跡)



PL.20 H25 尼寺回廊南東隅調査区瓦集中区全景 (真上 写真上が西)



PL.21 H25 尼寺回廊南東隅調査区瓦集中区 (北)



PL.22 H24 尼寺回廊南東隅調査区瓦集中区下溝跡セクション(南)



PL.23 H24 尼寺回廊南東隅調査区(南) 手前の礫列は暗渠排水 礫集中は近代住宅の基礎栗石)



PL.26 H23 僧寺南東
城溝跡 SD-02 出土瓦



PL.27 H23 僧寺南東
城溝跡 SD-02 出土瓦
塔



PL.28 H23 尼寺 SK-01 出土瓦



PL.29 H23 尼寺 SD-01 出土瓦



PL.30 H23 尼寺 SD-01 出土瓦

例 言

- 1 本書は、長野県上田市大字国分に所在する史跡信濃国分寺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、国庫補助事業記念物保存修理事業及び長野県補助文化財保護事業により、上田市が実施した。調査及び調査に係る事務は、上田市教育委員会事務局文化振興課が行った。
- 3 現地調査は、平成 22 (2010) 年 9 月 15 日から 12 月 3 日及び平成 23 (2011) 年 10 月 3 日から 12 月 14 日ならびに平成 24 (2012) 年 10 月 23 日から 12 月 26 日にかけて実施し、整理・報告書作成作業は、平成 26 (2014) 年 3 月までの間に断続的に実施した。
- 4 基準・水準点設置、メッシュ (グリッド) 設置に係る各種測量、空中写真測量及び空中写真撮影は、株式会社写真測量研究所及び株式会社共栄測量設計社に委託して実施した。また、遺構断面等の補足実測作業は、豊場奈那江・大井敬子・山本万里が行った。
- 5 整理・報告書作成作業は、豊場奈那江、大井敬子、山本万里が行った。
- 6 本書に使用した写真は、主に中沢徳士が撮影し、航空写真は委託業者が撮影したものを使用した。また、瓦の写真と巻頭カラー写真の瓦写真は、小川忠博が撮影したものを使用した。
- 7 本書の執筆は、中沢が行った。なお、第一章第 1 節及び第二章については、史跡信濃国分寺跡保存整備基本計画書 (平成 17 年 3 月上田市教育委員会) のものを転載・加筆した。
- 8 本調査に係る資料はすべて上田市教育委員会の責任下に、上田市立信濃国分寺資料館に保管している。
- 9 本調査にあたり、多くの方々の御協力をいただいた。芳名を期して感謝する。(順不同・敬称略)

史跡信濃国分寺跡保存整備計画策定委員会委員

山中敏史 (元独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺跡調査技術研究室長・委員長)、佐藤信 (東京大学大学院人文社会系研究科教授)、川上元 (上田市文化財保護審議会委員)

地域諸団体

神川地区自治会連合会、上沢自治会、国分自治会、下堀自治会、宗教法人国分寺

作業員

豊場奈那江、秋山八栄子、新井邦雄、井出富美恵、内山仁志、大井敬子、川上京子、川上恒生、坂口通子、作原弘悦、関昭二、関大子、高橋和裕、竹内和好、田中八枝子、内藤文武、中村真理子、中村洋子、半田光男、保屋野友延、丸田由紀子、村松秋恵、山本万里

凡 例

遺構

- 1 遺構の略号は次のとおりで、続く番号は、本調査地内で任意に付したものである。
堅穴建物…SB-、溝…SD-、土坑…SK-、集石…SX-、ピット…P-、堅穴建物のピット…p
- 2 実測図については、国家座標の北を頁の上とし、例外は方位を示した。
- 3 縮尺は、原則として原図 1/10 と 1/20 に 1/3 縮小をかけて 1/30、1/60 とした。
- 4 レベルの標記はすべて海拔高 (単位: m) である。
- 5 網点は焼土を示す。
- 6 遺構観察表の長さの単位は m で、主軸方位は国家座標の北からの角度で示した。
- 7 土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の『新版標準土色帖』1990 を用いて判別した。
- 8 遺構写真の縮尺は任意である。

遺物

- 1 土器・石器・鉄器実測図は、原図 1/1 に 1/3 縮小をかけて 1/3 とし、瓦実測図は原図 1/1 で、瓦当面は 1/4 その他は 1/6 縮小とした。
- 2 遺物観察票の「胎」は胎土を、「焼」は焼成を、「色」は色調を示し、色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色彩票監修の『新版標準土色帖』1990 を用いて判別した。法量の単位はすべて cm である。
- 3 土器・石器・鉄器写真の縮尺は任意とし、瓦写真はおおむね 1/4 縮尺とした。

調査の体制

調査は、上田市教育委員会事務局文化振興課が事務局となって実施した。その体制は次のとおりである。

教 育 長 小山壽一

教 育 次 長 小市邦夫(平成 24 年 3 月 31 日退任)、武井繁樹(平成 24 年 4 月 1 日着任)

文化振興課長 中部道男(平成 23 年 3 月 31 日退任)、土屋信之(平成 23 年 4 月 1 日着任)

文化財保護係長 尾見智志(平成 23 年 3 月 31 日退任)、久保田敦子(平成 23 年 4 月 1 日着任)

文化財保護係 中沢徳士、和根崎剛、小林伝(平成 25 年 3 月 31 日退任)

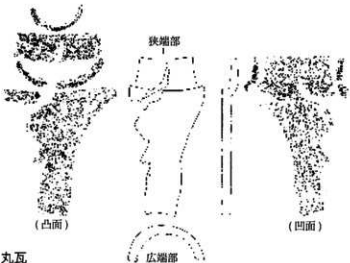
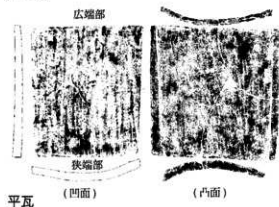
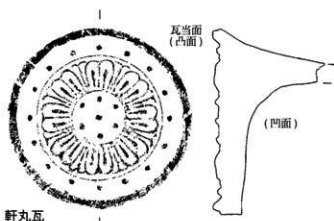
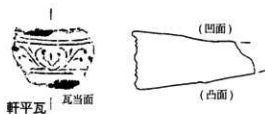
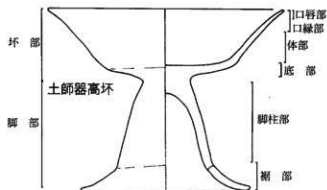
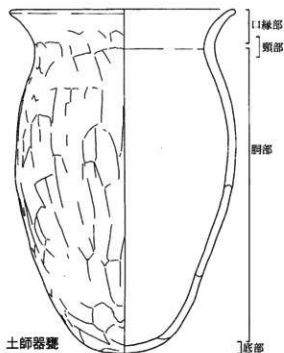
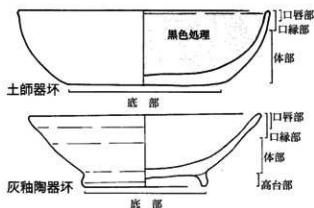
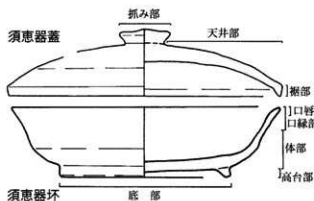


図2 遺物図表記凡例

目 次

本文目次

序	
巻頭カラー図版	
例言/凡例/調査の体制	
目次	
第一章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
1 信濃国分寺・国分尼寺の歴史	1
2 研究史と保存運動	2
3 史跡指定と発掘調査の経過	3
4 環境整備事業	4
5 平成時代の信濃国分寺	5
第2節 調査の方法	5
第3節 調査の経過と調査日誌(抄)	7
第二章 遺跡の環境	11
第1節 自然的環境	11
第2節 歴史的環境	13
第三章 調査の結果	17
第1節 平成22～24年度調査の概要	17
1 平成22年度尼寺北西区画の調査	17
2 平成23年度僧寺南西城の調査	18
3 平成24年度尼寺回廊南東域の調査	18
第2節 検出された遺構	19
1 平成22年度(2010)調査遺構	20
2 平成23年度(2011)調査遺構	31
3 平成24年度(2012)調査遺構	47
第3節 出土遺物	55
1 平成22年度(2010)出土遺物	55
2 平成23年度(2011)出土遺物	56
3 平成24年度(2012)出土遺物	60
第4節 出土瓦	62
1 平成22年度(2010)出土瓦	62
2 平成23年度(2011)出土瓦	64
3 平成24年度(2012)出土瓦	64
第5節 その他出土遺物	82
1 瓦塔(平成24年度出土)	82
2 古銭(平成24年度出土)	82
第6節 出土遺物観察表	83
写真図版	99
報告書抄録/奥付	108

図版目次

図1 信濃国分寺跡発掘調査履歴図	
図2 遺物図表記凡例	
図3 史跡信濃国分寺跡発掘調査メッシュ配置図	
図4 上田市の最高・最低気温、平均気温の年変化、太陽高度の年変化グラフ	6
図5 上田盆地の地形区分(上)及び地形断面図(下)	11
図6 平成22年度調査区及び実測図面簡略	12
図7 平成22年度調査実測図(縮小)	20
図8 平成22年度調査区実測図1 (1/60)	21
図9 平成22年度調査区実測図2 (1/60)	22
図10 平成22年度調査区実測図3 (1/60)	23
図11 平成22年度調査区実測図4 (1/60)	24
	25

図12	平成22年度調査区実測図5 (1/60)		26
図13	平成22年度調査区実測図6 (1/60)		27
図14	平成22年度調査区実測図7 (1/60)		28
図15	平成22年度調査区実測図8 (1/60)		29
図16	平成22年度調査区実測図9 (1/60)		30
図17	平成23年度調査実測図 (縮小)		31
図18	平成23年度調査区及び実測図面割		32
図19	平成23年度調査区実測図1 (1/60)		33
図20	平成23年度調査区実測図1セクション図 (1/60)		34
図21	平成23年度調査区実測図2 (1/60)		35
図22	平成23年度調査区実測図2セクション図 (1/60)		36
図23	平成23年度調査区実測図3 (1/60)		37
図24	平成23年度調査区実測図3セクション図 (1/60)		38
図25	平成23年度調査区実測図4 (1/60)		39
図26	平成23年度調査区実測図4セクション図 (1/60)		40
図27	平成23年度調査区実測図5 (1/60)		41
図28	平成23年度調査区実測図5セクション図 (1/60)		42
図29	平成23年度調査区実測図6 (1/60)		43
図30	平成23年度調査区実測図6セクション図 (1/60)		44
図31	平成23年度調査区実測図7 (1/60)		45
図32	平成23年度調査区実測図7セクション図 (1/60)		46
図33	平成24年度調査区及び実測図面割		47
図34	平成24年度調査区実測図1 (1/60)		48
図35	平成24年度調査区実測図2 (1/60)		49
図36	平成24年度調査区実測図2-1瓦出土状況 (1/60)		50
図37	平成24年度調査区実測図3 (1/60)		51
図38	平成24年度調査区実測図4 (1/60)		52
図39	平成24年度調査区実測図5 (1/60)		53
図40	平成24年度調査区実測図6 (1/60)		54
図41	平成22年度出土遺物実測図1 (1/3)		55
図42	平成22年度出土遺物実測図2 (1/3)		56
図43	平成23年度出土遺物実測図1 (1/3)		56
図44	平成23年度出土遺物実測図2 (1/3)		57
図45	平成23年度出土遺物実測図3 (1/3)		58
図46	平成23年度出土遺物実測図4 (1/3)		59
図47	平成24年度出土遺物実測図1 (1/3)		60
図48	平成24年度出土遺物実測図2 (1/3)		61
図49	平成22年度出土瓦実測図1		62
図50	平成22年度出土瓦実測図2		63
図51	平成23年度出土瓦実測図		64
図52	平成24年度出土瓦実測図1		64
図53	平成24年度出土瓦実測図2		65
図54	平成24年度出土瓦実測図3		66
図55	平成24年度出土瓦実測図4		67
図56	平成24年度出土瓦実測図5		68
図57	平成24年度出土瓦実測図6		69
図58	平成24年度出土瓦実測図7		70
図59	平成24年度出土瓦実測図8		71
図60	平成24年度出土瓦実測図9		72
図61	平成24年度出土瓦実測図10		73
図62	平成24年度出土瓦実測図11		74
図63	平成24年度出土瓦実測図12		75
図64	平成24年度出土瓦実測図13		76
図65	平成24年度出土瓦実測図14		77
図66	平成24年度出土瓦実測図15		78
図67	平成24年度出土瓦実測図16		79
図68	平成24年度出土瓦実測図17		80

図67	平成24年度出土瓦実測図16		79
図68	平成24年度出土瓦実測図17		80
図69	平成24年度出土瓦実測図18		81
図70	平成24年度出土瓦実測図19		82
図71	その他出土遺物実測図		82

写真図版目次

巻頭カラー

PL.1	信濃国分寺跡航空写真(平成17年3月)	
PL.2	H22 尼寺北西城調査区全景(東 手前は尼寺講堂跡、右はしなの鉄道線路)	
PL.3	H22 尼寺北西城調査区全景(真上 写真上が西)	
PL.4	H22 尼寺北西城北調査区全景(真上 写真上が北)	
PL.5	H22 尼寺北西城南調査区全景(真上 写真上が北)	
PL.6	H22 尼寺北西城 北調査区全景(南 写真右の東側が高くなっている。)	
PL.7	H22 尼寺北西城 北調査区全景(北 ビット列が検出される。)	
PL.8	H22 尼寺北西城 北調査区(東 礎層を抜いてビットが検出される。)	
PL.9	H22 尼寺北西城 北調査区(SB-03)西 礎層を抜いて竪穴建物で作られる。左と前の礎層は近世の暗渠排水)	
PL.10	H23 僧寺南西城調査区全景(真上 写真上が東 左上に僧寺回廊跡)	
PL.11	H23 僧寺南西城調査区全景(南 写真右僧寺跡、左に尼寺跡)	
PL.12	H23 僧寺南西城調査区全景(真上 写真上が東)	
PL.13	H23 僧寺南西城調査区全景(真上 写真上が南)	
PL.14	H23 僧寺南西城 東調査区土層(西 地山をわずかに掘り砂礎層が検出される)	
PL.15	H23 僧寺南西城調査区SD-02全景(北西)	
PL.16	H23 僧寺南西城 (西 写真左上に僧寺跡)	
PL.17	H23 僧寺南西城調査(東)	
PL.18	H24尼寺伽藍及び調査区全景(真上 写真上が西)	
PL.19	H24 寺回廊南東隅調査区全景(真上 写真上が西 写真右に回廊跡)	
PL.20	H25 尼寺回廊南東隅調査区瓦集中区全景(真上 写真上が西)	
PL.21	H25 尼寺回廊南東隅調査区瓦集中区(北)	
PL.22	H24 尼寺回廊南東隅調査区瓦集中区下調査区(南)	
PL.23	H24 尼寺回廊南東隅調査区(南 手前の礎層は暗渠排水 礎集中は近代住宅の基礎石)	
PL.24	H24 尼寺回廊南東隅調査区全景(北 写真右手前に尼寺食堂跡 右中央に尼寺中門跡)	
PL.25	H24 尼寺回廊南東隅調査区(南 写真左に尼寺伽藍跡)	
PL.26	H23僧寺南東城溝跡SD-02出土瓦	
PL.27	H23僧寺南東城溝跡SD-02出土瓦塔	
PL.28	H23 尼寺SK-01出土瓦	
PL.29	H23 尼寺SD-01出土瓦	
PL.30	H23 尼寺SD-01出土瓦	

本文写真

PL.29	史跡信濃国分寺跡航空写真		1
PL.32	国分寺本堂(長野県宝)		2
PL.33	国分寺三重塔(重文)		2
PL.34	H22,9,15通路に鉄板を敷く		8
PL.35	H22,9,21表土剥ぎと排水搬出		8
PL.36	H22,10,1トレンチ・グリッド掘り		8
PL.37	H22,11,10北調査区礎検出状況		8
PL.38	H23,10,5表示剥ぎ		9
PL.39	H23,10,13表土剥ぎと遺構検出		9
PL.40	H23,12,1保護砂搬入		9
PL.41	H23,12,2保護砂敷と養生シート張り		9
PL.42	H24,10,25表示剥ぎ		10
PL.43	H24,11,8遺構検出		10
PL.44	H24,12,5遺構検出・実測ほか		10
PL.45	H24,12,11保護砂敷		10
PL.46	常人道跡群下町山遺跡航空写真		13
PL.47	生島足島神社本殿		14

PL.46 常入遺跡群下町田遺跡航空写真		13
PL.47 生島足島神社本殿		14
PL.48 中禪寺薬師堂(嚴勝光院領堀田荘の中心的施設か)		15
PL.49 史跡上田城跡櫓門及び南北櫓		15
PL.50 明治29年開業大屋駅舎		16

写真図版

写真図版1 平成22年度出土瓦1		99
写真図版2 平成23年度出土瓦2		100
写真図版3 平成24年度出土瓦1		100
写真図版4 平成24年度出土瓦2		101
写真図版5 平成24年度出土瓦3		102
写真図版6 平成24年度出土瓦4		103
写真図版7 平成24年度出土瓦5		104
写真図版8 平成24年度出土瓦6		105
写真図版9 平成24年度出土瓦7		106
写真図版10 平成24年度出土瓦8		107
写真図版11 平成24年度出土瓦塔片		107

表目次

表1 信濃国分寺跡出土遺物観察表1		83
表2 信濃国分寺跡出土遺物観察表2		84
表3 信濃国分寺跡出土遺物観察表3		84
表4 信濃国分寺跡出土遺物観察表4		85
表5 信濃国分寺跡出土遺物観察表5		86
表6 信濃国分寺跡出土遺物観察表6		87
表7 信濃国分寺跡出土遺物観察表7		88
表8 信濃国分寺跡出土遺物観察表8		89
表9 信濃国分寺跡出土瓦観察表1		90
表10 信濃国分寺跡出土瓦観察表2		91
表11 信濃国分寺跡出土瓦観察表3		92
表12 信濃国分寺跡出土瓦観察表4		93
表13 信濃国分寺跡出土瓦観察表5		94
表14 信濃国分寺跡出土瓦観察表6		95
表15 信濃国分寺跡出土瓦観察表7		96
表16 信濃国分寺跡出土瓦観察表8		97

第一章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

1 信濃国分寺・国分尼寺の歴史

(1) 創建

天平13年(741)、聖武天皇により国分寺建立の詔が下され、地方ごとに官立寺院を置いた隋や唐の制度に倣ったとみられる僧寺、尼寺の建立が全国に命じられた。仏法の守護による国家安泰を祈願して、各国に金字の金光明最勝王經一部を安置した七重塔1基を造立し、僧寺を「金光明四天王護国寺」、尼寺を「法華滅罪之寺」とすることなどを命じている。国分寺の僧寺には僧侶20人が置かれ、封戸50戸と水田10町が支給された。また、尼寺には10人の尼が置かれ、水田10町を支給された。僧や尼は毎月8日に最勝王經を転読することなど、定められた規則に従って生活することが義務づけられていた。

天平19年(747)には郡司の協力を命じ、墾田を追加寄進するなど、国分寺の造営を督励する詔が発せられている。このことは逆に、各地の国分寺造営が期待したようにはかどらなかったことを示している。天平勝宝4年(752)に総国分寺である東大寺の大仏開眼供養が執り行われ、総国分尼寺の法華寺も建立されたが、天平勝宝8年(756)に聖武天皇が死去するまでに完成した国分寺はわずかであったとみられる。天平宝字3年(759)になっても国分寺造営を督促する記事が「続日本紀」にみられるが、770年前後に至ってようやく大半の国の国分寺が完成したと考えられている。

信濃国分寺がいつ完成したのかを伝える史料は残されておらず、建立に関わる詳細や、その後の活動についてもほとんどわかっていない。所在についても現国分寺の近くが有力視されていたものの、ながらく明確にはならないままであった。

(2) 衰退と再興

律令制度が崩壊すると諸国の国分寺も次第に衰退に向かう。信濃国分寺でも、尼寺跡近傍で発掘された10世紀後半頃の竪穴住居跡に国分寺の平瓦が用いられており、このころには国分寺の建物の一部が失われていたことを示すものと思われる。一方、「将門記」には、「以二月廿九日追着於信濃国少懸郡国分寺之辺 便帶千阿川彼此合戦 間無有勝負」という記事があり、承平8年(938)に平将門と平貞盛の軍勢が信濃国分寺周辺で戦ったという。さらに信濃国分寺の寺伝ではその兵火のため伽藍を焼失したというが、この記事は「将門記」などの史料には見えず、発掘調査でも確認されていない。いずれにせよ、当時には寺院の衰退が進んでいたことを物語っているものと考えられる。



PL.31 史跡信濃国分寺跡航空写真

11 世紀に関しては、堅穴住居における国分寺瓦の用例や、僧寺回廊跡での墓地としての利用を示すなど、国分寺の衰亡を示す骨壺の出土など、示唆する発見もさらに多くなる。

一方、信濃国分寺の寺伝では建久 8 年（1197）に源頼朝が善光寺参詣の帰途、衰退した国分寺の再興を命じ、堂塔を修復したと伝える。現在の国分寺境内は、古代の伽藍中心から北に 300 m ほど離れた一段高い段丘上にあり、本堂の薬師堂付近からは平安時代の瓦が発見されている。また、現存する室町時代建立の三重塔も寺伝では源頼朝が発願して建立したとされており、平安末から鎌倉時代の初期にかけての時期に信濃国分寺が現在地に移転・再興された可能性が高い。

(3) 国分寺の現在

現在の信濃国分寺は天台宗に属する。薬師如来を安置する本堂（PL.30）、あるいは寺全体を八日堂とも呼ばれるが、これは毎月 8 日の最勝王経転読という天平創建以来の伝統によるもので、このように法灯が受け継がれていることは歴史的文化的にもきわめて価値が高い。

国分寺の檀家は上堀・下堀・国分・山口・岩門地区がほとんどで、戦前は 80 軒ほどだったが、戦後はかなり増加している。また、他寺の檀家ながら信徒に含まれる人々が 50 軒ほどある。正月の修正会では元旦から 8 日まで金光明経や薬師経の転読が行われたが、現在は元旦から 3 日までとなっている。

国分寺で行われる行事としては、施餓鬼会、灌仏会、大般若経会などがあるが、八日堂縁日が何といっても有名である。1 月 7 日の宵祭りから 8 日にかけて蘇民将来符の頒布のほか、福だるま市も開かれ、県内だけでなく関東地方からも多くの参詣者でにぎわう。蘇民将来符の頒布については、寺に加えて伝統を守る蘇民講の存在が大きく、これに関する習俗は国の無形民俗文化財に選択されている。また蘇民将来符そのものは市の有形民俗文化財に指定されている。国分寺ではこのほか大黒堂の縁日もあり、現在では 3 月 8 日に行われている。

境内には本堂（長野県宝・万延元年（1860））、三重塔（PL.31 国重要文化財・室町時代）、石造多宝塔（市指定・鎌倉時代）などの指定文化財や、鐘楼、客殿などの堂宇が建ち並んでいる。

2 研究史と保存運動

(1) 信濃国分寺の研究史

史跡信濃国分寺跡の所在地は、上田市大字国分字仁王堂と字明神前にわたっている。現在の国分寺と同じ北側の段丘上に古代の伽藍地もあったと考えるのがかつては一般的だったが、大正 11 年（1922）刊行の「小県郡誌」で著者の小山真夫氏が「仁王堂跡」という場所に残る礎石群に着目し、この付近に古代国分寺伽藍があったとの推定をはじめて明らかにした。そこに参考として掲載された重田定一氏の調査記録（大正 3 年）によれば、多数の礎石が残るこの場所を金堂跡ではないかと考察している。

このような研究調査の成果により、昭和 5 年（1930）には小字仁王堂の礎石群を中心とする 4,178 平方メートル



PL.32 国分寺本堂（長野県宝）



PL.33 国分寺三重塔（重文）

が文部省指定史跡となった。

昭和6年(1931)には、藤沢直枝氏による「信濃国分寺之研究」が刊行された。同氏は現地の精密な実測や調査を踏まえて、(1)「仁王門跡」は金堂跡と推定されること、(2)この北方に講堂跡と想定される場所があること、(3)南方の鉄道通過地点に中門跡と考えられる場所があること、(4)金堂跡の南西方100mに塔跡とみられる場所があり、南東方にも同様の場所があつて東西2塔の可能性があること、などを推定している。

なお、小山氏が藤沢氏も尼寺については丸子町内の古瓦出土地に比定していた。しかしその後、昭和19年(1944)に国分地区に保存されていた古文書の調査が行われた結果、江戸時代初期の土地台帳に「にぢ之だう」の地名がみられることなどがわかった。このため地元では僧寺跡の西方に尼寺跡が存在すると推定する見方が有力となっていた。

(2) 信濃国分寺跡保存に至る経緯

信濃国分寺跡が所在する大字国分はもと小県郡神川村に属していたが、昭和31年(1956)9月に神川村が上田市に合併したため、上田市の一部となった。昭和30年代も中頃になると、国道18号線に沿ったこの地域にも開発の波が及んで、工場や住宅建設の兆しが現れてきた。貴重な遺構が破壊されるのを防ぐため、早急に本格的な学術調査を実施して、地中の国分寺遺構の実態を解明する必要性が生じた。上田市では僧寺跡と推定されていた2町四方を中心とする範囲の実測図を作成するとともに、国や県に対して学術調査の働きかけを行った。このような運動の結果、昭和37年(1962)には文化庁補助による調査が予算化されて調査会も発足し、翌38年(1963)3月より信濃国分寺の第1次緊急発掘調査がようやく実施の運びとなった。

その一方で、地権者をはじめとする地元住民からは反発の声が上がり、ついには信濃国分寺跡緊急発掘および史跡指定反対同盟会を設立するに至った。しかし、その後の折衝もさることながら調査が進展して大きな成果を収めるにつれ、文化財の重要性に対する住民の意識も急速に醸成されていった。八日堂復興会等では遺跡の総合的保存を求める声も高まり、金堂跡を国分寺の法人所有地として買収するなどの動きとなって現れてきた。そして、昭和41年度(1966)には市の教育文化都市建設新5ヶ年計画の中で史跡公園の整備を目指すこととなった。

3 史跡指定と発掘調査の経過

(1) 史跡指定と指定区域の拡大

上述のように、信濃国分寺跡の史跡指定は昭和5年(1930)に行われたが、これは土地の高まりや大きな礎石群などが存在する字仁王堂の一角を僧寺跡と想定した結果であった。一方、当時は尼寺跡の所在については諸説あつていずれも決め手に欠け、のちの発掘調査を待たねばならなかった。

昭和38年3月からの第1次調査を皮切りに、昭和41、42年と調査が続行され、さらに昭和46年に至るまで数度にわたる史跡整備に伴う発掘調査が並行して行われ、僧寺・尼寺の伽藍の全容と、これに伴う多くの資料を検出することができた。このため、昭和43年(1968)3月には現国分寺を含む寺域のほぼ全域、129,339.7平方メートルに史跡指定区域が拡大された。その範囲は、北は現国分寺、東は国分神社、南は当時の推定東山道、西は下堀の堀川神社までである。なお、この時点で史跡の指定理由も「僧寺跡と尼寺跡の伽藍が近接して発見され、しかも両遺構の保存状態が比較的良好であり、古代の寺院跡研究に欠くことのできない重要な遺跡」とされた。

(2) 史跡公園化までの発掘調査

昭和30～40年代に実施された発掘調査の経過は以下の通りである。

第一次発掘調査：昭和5年の指定時には金堂跡と推定されていた土壇を調査した結果、これは僧寺講堂跡の基壇であることが解明された。その南方には金堂跡の基壇も発見され、いずれも雨落溝に見事な敷石列がある

ことが確認された。軒丸瓦、軒平瓦や全国的にも珍しい素文の鬼瓦を含む大量の瓦をはじめ、鉄釘や須恵器、土師器なども発見された。

第二次発掘調査：僧寺跡の伽藍地が確認された。また、この西方の字明神前において尼寺跡が確認された。これは地元に伝わる古文書の記載を実証するために実施した調査の結果で、尼寺金堂跡の雨落溝も三方で確認された。さらには、多量の瓦類・鉄釘・古銭や円面硯なども発見され、大きな成果をあげた。

第三次発掘調査：中門と講堂跡を結ぶ僧寺の回廊跡が発見された。また、信濃国分寺の補修用の瓦を焼いた瓦窯跡が尼寺跡の北方で2基発見された。一方、尼寺跡では金堂跡の再確認と講堂跡の調査が行われた。さらに尼寺東門跡や四至の調査も行われた。

昭和43年(1968)から46年(1971)までの調査は史跡保存環境整備の事前調査として実施された。範囲確認はほぼ完了していたため、過去3回の発掘調査で確認できなかった各遺構の内部調査と未調査の建物の検出が中心となった。

第四次発掘調査：僧寺講堂の内部と北側雨落溝の確認などが行われ、講堂跡の解明がなされた。

第五次発掘調査：尼寺跡において、金堂跡の内部や講堂跡、中門跡、回廊跡、尼坊跡、北門跡などの詳細調査が実施された。

第六次発掘調査：僧寺金堂跡内部の規模が明らかになったほか、塔跡、僧坊跡が確認された。

第七次発掘調査：僧寺中門跡と回廊跡、金堂南西角の雨落溝のほか、尼寺跡の尼坊、経蔵などの遺構を確認した。

4 環境整備事業

(1) 事業の概要

上田市では、一連の発掘調査で確認した寺域のうち約55000平方メートルを公有化し、昭和43年から47年(1968～72)にかけて整備を行った上で、一帯を史跡公園として公開した。これは全国の国分寺史跡でも初めての事例であった。また、昭和55年(1980)には信濃国分寺資料館を開館し、国分寺跡を中心とする考古資料を収蔵展示している。以下では、この史跡保存環境整備事業の概要を述べる。

対象となる土地が広大な面積にわたることから、史跡指定範囲の全てを文化庁補助事業で買い上げ・整備することは困難であったため、事業地は僧寺と尼寺の寺域にかかる範囲に限定された。そこで、残る周辺の史跡公園予定地については都市計画公園用地として決定し、建設省(当時)の補助事業として実施することとなった。用地買収、整備事業ともに文化庁と建設省とで計画地が線引きされており、各々の国庫補助を得ながら上田市が実施するという形がとられた。

このように事業は史跡整備としての部分と一般都市公園としての部分からなるが、両者を一体の史跡公園として利用公開することがもとより前提であった。都市計画決定に基づく事業認定の性格は史跡保存を中心とする公園整備という趣旨であったため、建設省の補助事業の内容についても文化庁の認定する基本設計に基づいて補助するよう、省庁間の調整が図られた。

設計ではまず、地下遺構の保護を万全にすることを第一に、僧寺と尼寺の両寺域にかかる範囲は他の平地より区分し高くすること、各伽藍地は遺構埋戻しの上で基壇を盛土によって復元整備し、これらの整備遺構を歩きながら回遊見学できるようにすること、これ以外の公園用地には駐車場・便所・広場・休憩所等の便民施設を配置できることなどが基本方針として決定された。

敷地は東南から北西に平行して走る国鉄信越本線(当時)と国道18号線とによって分断されている。両者の間には水田、鉄道線路より南は畑と桑園に利用されていた。国鉄に平行して旧上田丸子電鉄の廃線跡と廃駅が残り、この東方には南北に敷地を縦断する市道があったが、後者については整備計画の中で路線変更された。敷地境界の南と西側は村落と新興宅地に取り囲まれ、僧寺・尼寺ともに伽藍の南端はそれらの民地に入り込んでいた。

公園敷地は、埋蔵物保存を第一に考慮しながらその中で歴史的イメージを作り出す区域（僧寺遺構、尼寺遺構、瓦窯跡）と、史跡見学者その他市民の休息利用にあてる区域、の2地区に区分される。僧寺と尼寺の各寺域については全面に盛土を行い、周囲より高くすることで範囲の明示と地下遺構保護が図られた。

5 平成時代の信濃国分寺

信濃国分寺伽藍跡の中心部分 55,275.45 平方メートルは、昭和 45 年 (1970) の史跡公園整備事業により公有化と公園整備がはかられ、昭和 55 年 (1980) には信濃国分寺資料館が開館し、一定の整備ははかられた。しかし、僧寺南大門想定地から中門跡にかけての僧寺跡エントランス部分が住宅地となっていたほか、国道 18 号線北東の僧寺北東域や尼寺の南東域など、伽藍跡の大きな範囲が民有地であり住宅地となっていた。

その後、経済成長とともに史跡指定地及びその周辺における各種の開発事業や住宅の建て替えなどが盛んとなり、信濃国分寺跡の保存計画について再検討を必要とされてきた。

平成に入ると史跡指定地周辺でも再び開発の波が押し寄せ、史跡の保護に影響する事態が危惧された。このため、平成元年から文化庁・県教委の補助を受けて史跡の計画的公有化を開始し、これまでに 16,368 平方メートルを追加購入、公有化面積は 71,643 平方メートルとなっている。現行の公有化計画総面積は 80,762 平方メートルで、残る 9,118 平方メートルを順次公有化の予定である。公有化計画地のうち、国道 18 号線より北側については平成 5 年度までに公有化が完了しており、残る未買収地の大半はしなの鉄道より南側の僧寺跡および尼寺跡の南辺付近に位置している。

上田市教育委員会事務局では、昭和 60 年代に計画された僧寺北東域約 10,000 平方メートルの自動車展示場建設計画を機に、保存管理と公有化計画の再検討に着手した。平成 3 年 (1991) には文化庁・長野県教育委員会事務局と協議のうえ、保存管理の指針となるゾーニングを作成し、住民説明会も実施して、以降の保存管理と公有化の指針としてきた。

史跡公園用地の一定の公有化の進捗と、史跡公園も開園から 30 有余年を数え、史跡の保存活用に対する考え方やそれを取り巻く社会状況も大きく変化してきている中で、信濃国分寺跡についても改めてその意義と現状を把握・分析するとともに、今後に向けてのあり方を検討すべき時期に来ていることも事実であった。特に課題となる点を列挙すれば、

- ・史跡保存管理に関する全体計画の不在
 - ・公有化進展にともなう計画的調査・整備推進の必要性
 - ・旧整備範囲の老朽化にともなう更新整備の必要性
 - ・最新の調査研究成果、保存整備活用における新しい考え方の反映
 - ・住民参加とまちづくりの視点の導入
- などである。

上田市では、信濃国分寺史跡の保全に万全を図るとともに、郷土の歴史文化拠点として活かしていくことを目指し、再整備を含む史跡地全体の保存整備活用に関する指針＝基本計画を策定した。

今回の発掘調査は、今後の整備に向けて、その基礎的な資料を収集することを目的として実施したものである。

第2節 調査の方法

1. 遺跡名と略記号

今回の調査では、平成 22 年度に尼寺北西隅、23 年度に僧寺南西隅、24 年度に尼寺回廊南東隅を調査している。遺跡の略号として「国分尼寺」と「国分僧寺」を付した。現地調査では、調査区域を第3図のとおり国家座標に基づくメッシュによって位置を設定し、各種の記録や遺物の注記等に用いた。

2. 調査区の設定 (第2図参照)

調査区域は、平成22年度は尼寺北西隅における区画施設(築地塀)を、23年度は僧寺南東隅における区画施設を、24年度は尼寺回廊の南東隅の確認と未知の遺構の確認を目的として調査区域を設定した。

3. グリッドの設定 (第3図参照)

今回の調査においては、改めて国家座標に則ったメッシュを切り、1単位の大きさが45×45 mの大グリッドを設定し、その中を縦横各15分割した3×3 mの小グリッドを設定した。大メッシュ交点には記号を与え、座標値X=43,200.00、Y=-18,651.00をA01a01として、北から南方向にA、B、C、D…、東から西方向に01、02、03、04…という順に進むものとした。また、小メッシュにも北から南方向にa、b、c、d…、東から西方向に01、02、03、04…という記号を与え、大メッシュ・小メッシュの組み合わせでグリッドを設定した。例えば、基準点から南に180 m、東に210 mの地点はE05Fa11と表される。各種の現地平面測量には、このメッシュ番号が用いられている。また、グリッド番号は、北東の交点のメッシュ番号を用い、遺物の取り上げに用いた。

4. 遺構測量

遺構の平面測量は、前述のメッシュを基準に1/20縮尺で行った。また、現地調査終了時には、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量も行っている。断面図や土層図は手取りによるものである。

5. 遺構の掘り上げ

現地調査における表土の除去は、主に重機によって行い、その後遺構検出作業、遺構掘り上げ作業はすべて人力で行った。

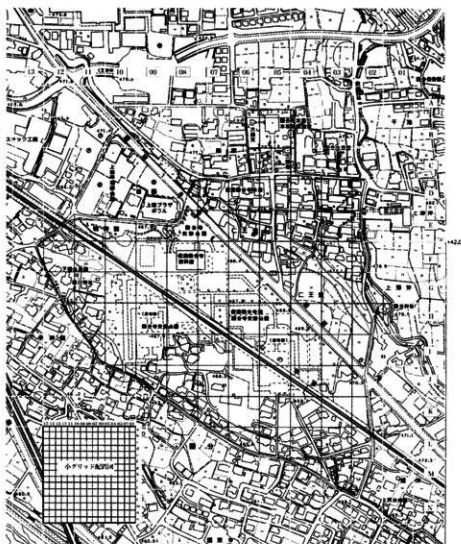


図3 史跡信濃国分寺跡発掘調査メッシュ配置図

第3節 調査の経過と調査日誌（抄）

1 平成22年度調査の概要

推定されている尼寺築地塙の北西隅において、区画施設の確認を目的に調査を実施した。調査に先立ち、史跡公園造成時に余った苗木をとりあえず植えて、密植していた樹木の伐採を実施した。また調査区は、史跡公園の西の入口にあたっているため、通路を確保した上で北と南の調査区を設定した。

調査の中では、北調査区の東半部で、表土を剥いだ段階で硬化面が広がり、尼寺遺構に関わるものかと慎重に調査を進めたが、下層から瓶や空缶など昭和40年代の遺物が出土し、公園造成時にローラー等で締めたものと判断された。北調査区では、その中央において南北方向の段差、東検出面が西検出面より0.5mほど高くなっており、西側下段には拳大の礫が広がっていた。この礫面を抜くように、これも南北方向にビットがならび、区画施設的な様相を呈していた。この段差とビット列は、従前の区画想定ラインから12mほど東になっている。ところが、この段差とビット列は南調査区においては途端なくなっている。南調査区では、造成時のものとは明らかに異なる硬化面が広がっており、あるいは尼寺廃絶後の堅穴住居等により礫面を除いた可能性もある。今後の調査では、今回の調査区のさらに南側において、区画的な様相がみられるか、追求する必要がある。

2 平成23年度調査の概要

平成16年度に確認された僧寺南大門跡、平成18年度に確認された僧寺西門跡、それぞれに取り付くであろう築地塙等の区画施設の確認を目的として僧寺南西隅において確認調査を実施した。

南大門の西側に続くであろう区画施設については、平面的には確認できなかったが、幅約4.0m、厚さ0.2mに地山を掘り込んで、拳大の礫と砂質土を敷いた地行のような形跡があった。これが、築地塙等の下部構造の名残かどうかは判然としなかった。僧寺西門南側の調査区では、ほぼ全面に礫が広がっていた。22年度調査のような礫層を抜いたビット列は確認されず、調査区の壁際にトレンチを入れ、区画施設の追求をしたが、築地塙の痕跡はやはり確認できない。

区画施設以外の遺構としては、両調査区をまたぐように、北から南に通る溝跡が検出された。溝跡は、断面がV字形の人為的な水路で、出土遺物から古墳時代後期のものである。あるいは、国分寺造営に先立つ水抜き施設化とも思われる。この他、国分寺造営前の堅穴建物跡が5件、ビット等が検出されている。

3 平成24年度調査の概要

尼寺回廊については、昭44年(1969)に西回廊の発掘調査が実施されている。根固め栗石の検出から、南北長は82.5mで25間、東西は中門を含めて54.8mの単廊式であると判断された。しかし、この調査では、東回廊へのアプローチがなく、東回廊について改めて確認する必要があった。なお、平成19年(2007)には、尼寺中門東側の発掘調査を実施したが、回廊に直接つながる遺構や、回廊の雨落ち溝等も検出されなかった。

今回、尼寺回廊南東隅の確認を目的として発掘調査を実施したが、結果として回廊の明確な痕跡は確認できなかった。調査区域には、基礎となる栗石や暗渠排水のための集石が至る所で検出されたが、いずれも近現代の住宅のものであったり、畑地のものであり、コンクリート片等が混入していた。古代の堅穴建物跡が4件検出されているが、時期はいずれも国分寺建立前、弥生～古墳時代のものである。

尼寺跡に結びつくかもしれない成果とすると、回廊想定ライン上に幅約1m、長さ約3mにわたって帯状に出土した瓦群である。この瓦群は、回廊等建物が倒壊して形成されたものではなく、割れて廃棄されるものがかたまて出土した様相を呈している。また、この瓦列の下には幅約1m、深さ約0.3mの半円状の浅い溝跡が検出されている。この溝が回廊や尼寺遺構に結びつくものかどうかは判然としないが、瓦列及び溝の主軸方位が尼寺の主軸方位とほぼ一致している。今後は、瓦列と溝跡を追求するため、現在回廊跡として整備されている箇所も含めて確認調査を実施する必要がある。

4 平成22年度調査日誌(抄)

9/15 現地調査着手。尼寺築地塀の北西隅の想定ラインをまたいで調査区域を設定する。調査区への重機の搬入から遺構の盛土表示を保護するため、通路に鉄板を敷く。その後、重機により調査区の表土を剥ぎはじめる。

9/21 作業員による遺構検出、掘り上げ作業を開始する。事前に調査区内の樹木を業者により伐採したが、遺構保護のため根を残しており、その根が広く深く張り、抜根に多くの労力を費やす。また、北調査区の中央に南北方向の段差があり、東側が高く西側が低い。比高差は0.4~0.5mある。

10/1 遺構検出作業はひととおり完了するが、不明瞭なところが多いため、グリッドやトレンチで精査する。北調査区西側に何条もの川原石による暗渠排水溝が検出される。

10/4 北側の調査区の東半部に硬化面が広がっているため、ここをグリッドで掘り下げる。

10/12 北側調査区東半部の硬化面をグリッドで掘り下げたところ、硬化面下からコーラ瓶のかげら等が出土し、この硬化面が史跡公園造成時のものと判明する。

10/19 調査区の検出面や層序に不明な点が多く、両調査区に東西方向のトレンチをいれて確認に努める。

10/26 北調査区西半部のグリッド掘り下げを進めたところ、川原石の礫が一面に広がり、特に東側の段上との境に密集している。また、この礫の中に柱穴があり、南北方向に段と平行して並んでいる。

11/16 遺構実測とグリッド掘り下げを行う。

11/19 空中写真測量のための撮影を実施する。

11/22 セクション等の遺構実測と遺構埋め戻し。養生のための保護砂と透水シートを施す。

11/24 作業員の現場撤収作業。機材を国分寺資料館や埋文整理室に引き揚げる。引き続き重機により排出土の埋め戻しを行う。

12/3 重機による調査区埋め戻し終了。

以上で現地作業はすべて終了し、以降、埋蔵文化財整理室において出土遺物の洗浄、注記、接合、実測図の整理等を行い、平成23年3月28日本年度の事業を終了する。



PL.34 H22,9,15 通路に鉄板を敷く



PL.35 H22,9,21 表土剥ぎと排土搬出



PL.36 H22,10,1 トレンチ・グリッド掘り



PL.37 H22,11,10 北調査区礫検出状況

5 平成23年度調査日誌(抄)

- 10/3 現地調査着手。僧寺南大門跡西側。西門南側の築地塀の南西隅の想定ラインをまたいで調査区域を設定する。調査区へ重機を搬出し、表土を剥ぎはじめ。
- 10/11 表土剥ぎを続ける一方、作業員による遺構検出を開始する。
- 10/13 表土剥ぎ、作業員による遺構検出とともに委託業者によるメッシュ杭打ちを開始する。
- 10/18 西側調査区(西門南側)をグリッドで掘り下げたところ、礫の集中が見られる。上田市立塩田中学校の職場体験教室で2名の生徒が作業に参加する。
- 10/26 表土剥ぎや遺構検出の排土に多く含まれる礫を、重機の網バケットで選別し、埋め戻し時に備える。
- 10/28 西調査区の検出作業がほぼ終了する。西門から続くであろう築地塀等の区画施設は、セクションにも平面的にも確認されない。
- 11/1 東調査区(南大門西側)の遺構検出を続けていたところ、北から南に通る溝跡が検出される。溝跡は、北側で僧寺の軸線とは30°西に振れ、南側で軸線と一致する。
- 11/7 調査区の壁際にトレンチを入れ、区画施設の追求をする。西門南側のセクションはやはり確認できない。南大門西側では幅約4.0m、厚さ0.2mに地山を掘り込んで、拳大の礫と砂質土を敷いた地行のような形跡があるが、平面的には確認されない。
- 11/14 検出作業はほぼ終了し、遺構の性格を確認するためにサブトレンチや半截をはじめ。
- 11/21 セクション等の実測をはじめ。
- 12/1 調査区の埋め戻しのため、遺構保護の洗い砂を搬入し、埋め戻しをはじめ。
- 12/2 洗い砂による養生が済んだ範囲から、重機による排土の埋め戻しを開始する。
- 12/5 洗い砂による養生終了。作業員の現場撤収作業。機材を国分寺資料館や埋文整理室に引き揚げる。引き続く重機により排土の埋め戻しを行う。
- 12/14 重機による調査区埋め戻し終了。
- 以上で現地作業はすべて終了し、以降、埋蔵文化財整理室において出土遺物の洗浄、注記、接合、実測図の整理等を行い、平成24年3月28日本年度の事業を終了する。



PL38 H23,10,5 表示剥ぎ



PL39 H23,10,13 表土剥ぎと遺構検出



PL40 H23,12,1 保護砂搬入



PL41 H23,12,2 保護砂敷と養生シート張り

6 平成24年度調査日誌(抄)

10/23 尼寺東回廊南東部の現地調査着手。表土を剥ぎはじめる。

10/25 重機による表土剥ぎ終了。

11/5 機材搬入し、作業員による遺構検出を開始する。

11/9 おおむねの遺構検出を終了し、個別の遺構検出を開始する。栗石や石列等が検出されるが、性格は不明である。

11/13 グリッドで掘り下げる。以前に建っていた住宅の導排水路や水回りの捨てコンなどが多く、これらの攪乱を除去する。

11/19 表土剥ぎや遺構検出の排土が溜まったため、重機により整理する。

11/28 回廊の延長上にあるグリッドを掘り下げる。回廊跡に結びつく遺構は確認されないが、瓦片が延長線上にそって集中して検出されはじめる。

11/29 回廊の下部構造がないか、回廊延長上に直行するトレンチを入れるが確認されない。一方、調査区北側の礫集中の下部には、幅1mの溝が北に30°振れて存在することが確認される。この溝と礫集中は、瓦片の集中を切っている。

12/5 遺構実測とともに、空中写真測量に備えて遺構清掃を行う。

12/6 空中写真測量の撮影を行う。

12/7 回廊延長線上に出土した瓦片の集中を実測しながら取り上げる。完存する瓦はなく、集中して廃棄したものかと思われる。また、無紋の鬼瓦片も出土する。

12/11 瓦片の集中を実測しながら取り上げたところ、その下部に溝跡が検出され、部分的に掘り上げる。また、洗い砂を搬入し、埋め戻し養生の作業を開始する。

12/20 洗い砂とシートの養生が完了し、重機による排土の埋め戻しを開始する。

12/26 埋め戻し・転圧完了する。

以上で現地作業はすべて終了し、以降、埋蔵文化財整理室において出土遺物の洗浄、注記、接合、実測図の整理等を行い、平成24年3月28日日本年度の事業を終了する。

平成25年度、遺物の整理作業と実測図の整理、報告書作成作業を実施して、平成26年3月28日、すべての調査事業を終了する。



PL.42 H24,10,25 表示剥ぎ



PL.43 H24,11,8 遺構検出



PL.44 H24,12,5 遺構検出・実測ほか



PL.45 H24,12,11 保護砂敷

第二章 遺跡の環境

第1節 自然的環境

1 上田の気候

長野県は本州中央部に位置し、周囲を山に囲まれている。このため上田の気候には内陸性の特徴がみられる。夏には日中の気温は東京よりも高温になることが多いが、乾燥しており、夕方から明け方までは気温が下がるためのぎやすい。冬期間には長野県内でも県北部に比べて上田・佐久は降水量が少なく、太平洋側気象区の特徴を示している。

上田市の年間平均気温は12.1℃で、県下では飯田地方に次いで暖かい。気温の年較差は25.8℃で札幌の数値に近く、寒暖の差が大きい。市内でも場所による気温の差が大きい。市街地が最低、最高気温ともに最も高い。年平均湿度は66%で、東京などと並んで全国でも最も低い類に入る。

上田では平均年間降水量が878.7mmと1,000mmに達せず、全国的に見ても雨の少ない土地である。これは海からの湿った空気が周囲の高山に遮られて雨や雪を降らせ、上田上空に達するまでに乾燥した空気になってしまうためである。降雨は年間を通じて少ないのが特徴である。市内では山に近い地域ほど雨が多いが、平地では塩田平に比べて千曲川右岸の降水量が少ない傾向がある。

冬季は西南西と東の風が多く、夏には南東の風が卓越風である。年間を通じて北および南からの風が大変に少なく、東や西の風が多い特徴がある。これは地形の影響によるもので、南と北に山が連なり、千曲川に沿った東西方向に風が吹き抜けるためである。

日照時間が長いのも上田の特徴で、年間2000時間以上というのは長野県下のみならず、全国的にも高い数値である。快晴日数の平均は年80日前後に達する。

2 上田の地形と地質

上田は盆地状の地形で、周囲を独鈞山・大林山・太郎山といった標高1200~1300m級の山々に囲まれている。千曲川は市内で標高465mから417mまで流れ下り、この右岸に中心市街地が広がっている。また、左岸側では、海拔450~500mほどの塩田平が水田地帯を形成している。塩田平には寡雨に備えた灌漑用の溜池が多く見られる。

上田市を東西に流れる千曲川は奥秩父の甲武信ヶ岳付近を水源とし、長野県土の北半を貫いて新潟県に入ると信濃川と名を変え、日本海に注ぐ全長367kmの日本一の大河である。上田市内でこれに注ぐ主な支流としては、右岸から神川・矢出沢川などがあり、左岸からは塩田平を流れる産川水系が浦野川に合流している。千曲川の市内中心部での川原は幅400~600mにわたって広がる。

上田地域の地層は海成層の上に湖成層があって、さらに約1万年前頃からは湿水性や扇状地の堆積物が形成した地層がある。これに火山に由来する貫入層や堆積物が加わり、市内でも地域によって多様な地質が分布している。古い時代の地層は山地に見られ、太郎山などに産する緑色凝灰岩は古くから礎石などの建材として利用されてきた。上田でとりわけ特徴的なのは千曲川流域に発達している階段状の地形で、これには河岸段丘の段丘崖と断層で形成された断層崖とがある。また、扇状地地形は山を下った急流が緩斜面に出る山際に形成され、大小さまざまな見られる。

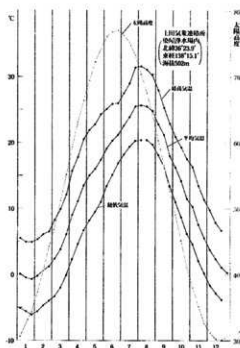


図4 上田市の最高・最低気温、平均気温の年変化、太陽高度の年変化グラフ

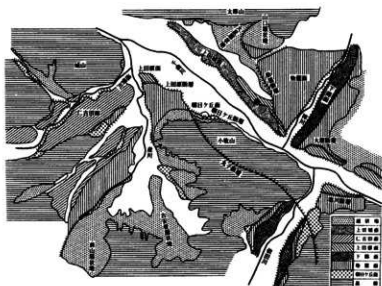


図5 上田盆地の地形区分(上)及び地形断面図(下)

盆地内の地層や地形は、おもに第四期(170 万年前まで)に形成された。厚く堆積した湖成層のほか、川や谷の底を埋めて堆積した染屋層が広く分布しているが、このうち千曲川に沿った地域が断層によって落ち込み、段丘状の崖地形が形成されている。

3 信濃国分寺跡周辺の地形と地質

信濃国分寺跡は上田市東部の千曲川右岸に位置しており、北から神川が千曲川に合流する点の西方にあたる。地形的には染屋層と千曲川が形成した河岸段丘の段丘面に広がっている。

染屋層全体の厚さは約 40-50 m あり、主に礫岩層からなる。この堆積物からできている平坦な地形を染屋面(第1段丘面)と呼ぶ。この台地上では地下水が得にくいので、古来集落は台地の周縁に形成され、中央部は灌漑水田として利用されてきた。染屋面周

囲の断層崖には樹木が育ち、豊かな緑地を形成している。千曲川右岸ではこの染屋面の下方に上田原面が広がる。これは染屋面の一部が落ち込んで生まれた小規模な湖に堆積した湖成層でできている。

上田原面から国分付近で3-4 mの段差をもって低く位置するのが上田城面(第2段丘面)である。これは火山活動による泥流の堆積物で、縄文時代草創期頃に形成されたとみられる。千曲川との比高は15-17 mにも及ぶ。現国分寺はこの上田城面に所在し、このほか多くの古代遺跡がこの面上に分布している。

信濃国分寺跡の付近では、上田城面と千曲川との間にさらに第3段丘面があり、古代国分寺伽藍はこの面上に所在している。神川の左岸では狭い幅しかないが、国分寺跡付近では最大300 mほどまで拡大し、西は下堀地区の西方で終わる。河床からの比高は2-3 mほどである。

これより南は千曲川の氾濫原であるが、治水工事の結果生まれた土地が農地として利用され、堤防沿いの北国街道沿道には集落が点在する。

上田市域は山に囲まれるが、面積的には低地や台地・段丘の占める割合が高く、表層地質では堆積物が大半である。染屋面には灰色台地土と台地褐色森林土が分布する。上田城面の表層も灰色台地土が主だが、これより千曲川沿いには灰色化低地水田土が分布する。

4 上田の植生

植物区系の上では、上田は太平洋区系と日本海区系の境目に当たり、またフォッサマグナ亜区系と中部山岳区系にも重なっている。このように多様な植物分布が見られるのが上田の植生の特徴である。市内の平地は標高500 m前後に位置し、垂直分布では丘陵帯から低山帯へと移る付近に相当する。山地にはアカマツが多いが、里山ではコナラやクヌギ林が多く見られる。千曲川の段丘沿いにはケヤキ林が帯状に続いて特徴的な景観を呈している。このケヤキ林は遷移を経て安定した自然林で、ここでは古来から段丘の景観を形作っていたものと考えられている。

上田市内には文化財に指定されているものを含めて名木が少なくないが、信濃国分寺資料館には「カバンのフジ」と呼ばれる木がある。明治期に南佐久郡の農家からカバンに入れて持ち帰られた苗を上田の第十九銀行に植えたもので、昭和51年に現在地に移植された。5月中旬過ぎに見事な花を咲かせることで知られる。

第2節 歴史的環境

1 先史～縄文時代

上田盆地周辺に人の居住が始まったのは、およそ2万年前頃と考えられている。この時代の遺跡は菅平高原や和田峠周辺などの高地に集中して分布するが、塩田平などの平坦地でも人の活動を示唆するような遺物の発見が徐々にみられるようになってきている。

縄文時代になると、山裾の扇状地が主要な生活の場となっており、このほか千曲川をはじめとする河岸段丘の緑辺部も盛んに利用されている。これに対して河岸段丘の内部や氾濫原の沖積地には縄文人の活動痕跡は見られない。千曲川右岸の一带は、築屋面上にも上田城面にも縄文遺跡はわずかに発見されておらず、左岸側やその他の流域とはやや異なる様相を示している。

2 弥生時代

千曲川流域では、弥生時代の中期後半から長野地方や佐久地方などで大規模な集落が営まれるようになった。上田地方ではこれより遅れ、弥生時代の後期後半から終末期にかけて集落遺跡が出現し、全城に分布する。このような時期差の理由は現時点で必ずしも明らかでないが、降水量の少ない当地方でも灌漑技術による稲作が可能になったことなどが想像されている。上田の弥生時代における集落の立地は、河岸段丘上や自然堤防など冠水しにくく、水田に適した低湿地を近くに伴う場所がおもに選ばれている。塩田平の産川流域などが最も利用されており、千曲川右岸でも上田城面に遺跡が分布している。集落は数軒を単位とする小規模なものがほとんどだが、居住域以外を含めた全体像が明らかになった例はまだなく、実態には不明な点も多い。

千曲川右岸の段丘上に位置する弥生遺跡としては、国分寺周辺遺跡群や常入遺跡群などが市街地の東方にある。常入遺跡群に含まれる下町田遺跡は弥生時代後期後半から古墳時代初期にかけての集落遺跡で、90軒の密集した竪穴住居と大量の遺物が出土している。また、上田原遺跡における周溝墓のように地域の有力者の存在を窺わせる発見などから、上田小県地方がこのころ一つの勢力圏を形成しつつあったと想像する見方もある。

国分寺周辺では、史跡の東方に隣接するしなの鉄道信濃国分寺駅の開業に伴う発掘調査で、中期初頭、中期中に属する土器と、中期中葉の住居址が確認されている。

3 古墳時代

4世紀後半の大蔵京古墳に始まる上田地方の古墳は、5世紀後半まで方墳のままで、他の千曲川流域のような前方後円墳への変化が大きく遅れる。このこ



PL.46 常入遺跡群下町田遺跡航空写真

とは当地方が中央政権の支配下に置かれるのが他に比べて遅かったことを物語ると考えられている。古墳時代前期の集落は小規模なものが多いが、後期には建物が集中して建てられ、大規模なムラが出現する。その代表的な例が国分寺周辺遺跡群で、ここでは方形の溝の一部が発見され、居館の濠である可能性があることから注目を集めている。東信地方で唯一の前方後円墳である二子塚古墳は黄金沢川扇状地の扇尖部に位置しており、6世紀前半から中頃の築造と考えられている。

上田にある古墳ではこのほかに、帆立貝式の王子塚、円墳の吉田原、神川流域の新屋古墳群、他田塚古墳や塚穴原一号墳をはじめとする下之郷古墳群などが代表的な例として市の史跡に指定されている。

「科野国造」は古事記の神武天皇条が初見であるが、中央集権的支配体制のもとに国県制が整備されたのは7世紀の前半頃とみられる。当時の国造の本拠地には諸説あるが、生島足島神社の存在などから小県郡にそれを求める説もある。国造は大和平野の中心に勢力を持っていた多氏の系統と考えられており、そこから他田氏や金刺氏などに分かれたものとみられる。



4 律令期

大宝律令のもとで信濃国にも国衙が設置され、中央から国司が派遣された。この信濃国府がどこに所在したかは今もって明らかになっていないが、「和名類聚鈔」には筑摩郡に在りと記されている。しかし、国府と国分寺は近接して置かれるのが通例であることから、当初小県郡に置かれた国府が9世紀頃に筑摩郡に移ったと考えるのが現在の通説となっている。上田における国府の所在地としては、条里的遺構が今も残る神科台地と、常田の信州大学繊維学部敷地周辺に推定されている。

信濃国分寺跡が立地する千曲川右岸に存在する奈良・平安期の代表的遺跡としては、染屋台上の大規模集落である宮平遺跡や、上田城面の殿田遺跡、国分尼寺跡の西側に隣接する明神前遺跡などがある。国分寺周辺遺跡群も平安時代までの遺構を含んでおり、掘立柱建物跡などが確認されている。また、染屋面の台地上には上記のように条里的水田の跡が

広範囲にわたって見られる。東山道の経路については諸説あつて、発掘調査でも道路遺構そのものは確認されていない。初期の東山道は伊那郡から直線的に佐久方面へと抜けていたようだが、官道として整備されてのちは筑摩郡を経由するようになり、この時点で上田地方を通過するようになった。詳細な位置は不明ながら、信濃国分寺跡に近い千曲川沿いを東に向かって上野国へ抜けていたことは確かで、当時の上田盆地は信濃国の政治・経済・軍事などの重要な中心としての地位を占めていた。

5 中世

律令制度が崩壊に向かうと、上田小県地方でも開発領主の寄進により貴族や寺社が経営する荘園が数多く成立した。「吾妻鏡」には12世紀末の信濃国における荘園の名を記した書付が収められているが、これによれば当地方には八条院領常田庄や最勝光院領塩田庄など6つの荘園と3ヶ所の牧の名が見られる。この時代には地元に

所領を持つ地方武士達が勢力の増大を目指して都に向かったが、木曾義仲が敗北して源氏の世となると、武士達は鎌倉御家人を指向するようになった。このような武士としては、海野氏、柿津氏、泉氏、浦野氏などが代表的である。一方、それまで有力者だった塩田氏などは義仲に与したために所領を失う結果になったかとみられる。鎌倉時代の塩田平では幕府の重臣である島津氏、その後は北条氏が地頭職をつとめ、北条義政がここに遁世してからは塩田北条氏が三代60年間にわたって仏教文化を花開かせた。今日でも安楽寺三重塔をはじめと



PL.48 中禅寺薬師堂(最勝光院領塩田荘の中心的施設か)

する数多くの歴史的建造物、史跡が残されている。なお、国分寺郷は荘園化されることはなく、終始公領であった。

鎌倉幕府が滅亡して信濃から北条氏の勢力が消滅すると、当地方も地方領主による争乱の時代に入る。荘園の消滅と並行して守護と国人領主の対立が激化するなか、塩田城を本拠とする村上氏が支配を拡げたが、天文20年に甲斐の武田勢によって攻略された。

地土の真田氏は同じ頃に武田に仕えるようになり、次第に頭角を顯わしていったが、武田滅亡後の戦乱を主家を次々と変えることで巧みに切り抜けたことで知られる。天正11年(1583)には上田城の築城を開始し、間もなく小県郡一門を支配下に収めた。また、現在の市街地の骨格をなす城下町も形成された。真田が上杉に臣属したために徳川から攻められ、関ヶ原合戦でも昌幸・信繁父子が西軍に加わったために上田城は徳川勢の攻撃にさらされたが、よくそれをしのいだ。東軍勝利の後には、真田信之が沼田・小県を合わせた9万5千石を領して上田城主となり、領域支配を確固たるものにした。

6 近世

徳川幕府の時代には、城主が真田氏から仙石氏、松平氏と代わる中、城下は物資の集散地として栄えた。現在見る上田城はおもに仙石氏の時代に修築されたもので、城下町の整備もこの時期、寛永頃までには概ね完成したようである。上田は城下町であると同時に北国街道の宿駅を兼ねており、流通の拠点であった。様々な産業が育ち、特に上田紬は養蚕とともに大きな発展をみせた。



PL.49 史跡上田城跡櫓門及び南北櫓

国分は城下からはやや離れた

村方であるが、北国街道にもほど近く、国分寺は庶民の信仰を集めて賑わった様子が江戸中期頃に描かれた「八日堂縁日図」からも知られる。室町時代に成立したと考えられる蘇民将来信仰も門前の村人がつくる講中によって組織化されるようになった。「信濃国分寺勧進帳」は、現存する本堂を江戸時代末期に再建するにあたって集められた寄進の内容を書き上げたものだが、藩主松平氏をはじめ、城下の有力商人たちの名が見える一方で、信濃一門から上州、江戸までの庶民の名前もあって、信濃国分寺に対する信仰の広がりを知ることができる。ちなみに本堂は文政12年(1829)に発願され、30余年を経た万延元年(1860)に竣工している。長野の善光寺本堂に通じる様式を持ち、東信地方では最大の近世仏堂建築である。

7 近代

上田小県地方は、廃藩置県によって明治4年(1871)には上田県となり、のち長野県に統一された。上田の城下町は、明治22年(1889)に市町村制が施行されて上田町となった。大正8年(1919)には市制を施行、同10年(1921)には城下村を編入し、蚕都として栄えた。昭和期には、29年(1954)の塩尻村、川辺村に始まって周囲の町村をたびたび編入しながら48年(1973)には人口10万を擁する都市となった。

なお、国分は昭和31年(1956)に上田市に合併するまで小県郡神川村の字で、とくに明治末期から大正時代にかけはここでも養蚕が盛んに行われるようになった。また、上田からは数多くの著名人を輩出しているが、農民美術を興した山本鼎は国分に近い集落の出身である。

現在のしなの鉄道、旧信越本線は明治18年(1885)に高崎から横川まで、同21年(1888)に直江津から軽井沢までが開通し、同26年(1893)に碓氷峠を越える難工事が完成したことにより全通した。上田駅は明治



PL.50 明治29年開業大屋駅舎

21年(1888)8月に直江津線の仮終点として開業し、同年12月に軽井沢まで延長された。一方、上田から軽井沢までの間には田中・小諸の2駅しかなかったため、地元の利便と養蚕・製糸業発展のため大屋駅開設の請願が出され、明治29年(1896)1月に新駅が実現した。さらに大正7年(1918)には大屋と丸子を結ぶ丸子鉄道が開業するが、同14年(1925)にはこれが大屋から上田東まで延伸された。その後、昭和16年(1941)に上田電鉄と合併して上田丸子電鉄となったが、昭和44年(1969)に廃止された。大屋から国分付近まで丸子線は信越本線と並走し、ちょうど史跡信濃国分寺の場所には八日堂駅があった。この廃線跡を利用して昭和46年(1971)には大屋-上田間の信越本線が複線化されている。

信越本線は北陸(長野)新幹線の開業に伴って平成9年(1997)に横川-軽井沢間が廃線となり、同時に軽井沢-篠ノ井間が第3セクターのしなの鉄道として引き継がれた。平成14年(2002)には上田市が信濃国分寺駅を新設、開業している。

*なお、史跡信濃国分寺跡周辺の発掘調査の履歴等については、「国分寺周辺遺跡群」(2002年3月 上田市教育委員会)に詳細にまとめられている。

第三章 調査の結果

第1節 平成22～24年度調査の概要

1 平成22年度尼寺北西区画の調査

平成22(2010)年は、尼寺の築地塀想定ラインの北西隅を確認調査を実施した。尼寺築地塀については昭和42(1967)年の第3次調査で東限について、

金堂中心点から東へ74メートル(約244尺)の地点に南北9メートル×東西8メートルの石敷面が見られた。これを当初の東門土壇の根固めと考えることができた。またこの石敷面に沿って、60センチ幅の礫列が南北に18メートルにわたり延びていた。(中略)したがって、先の石敷面と礫列の両方とも、尼寺の構築に簡潔があるとすれば、新旧2時期を推定することもできるが、一応東限を画する施設と考えられた。と報告されているが、トレンチを入れた箇所の図はない。

北限については昭和44(1969)年の調査で、

昭和44年の調査ではとくに北門跡の究明につとめた。すなわち金堂・講堂・尼房跡も明らかになったので、これらの中心を結ぶ延長線上に北門のあることが想定されたのである。しかし北門の位置に想定される地点が信越本線(現しの鉄道)および丸子電鉄(廃線)の両軌道の敷地にあたっているため、やむを得ず信越本線の軌道敷の北側に計3本の南北方向の平行したトレンチを設定した。東側のトレンチでは何らそれらしいものはなく、中のトレンチでは、尼寺南北を通した中軸線から東約5メートルの地点を境にして、東にはまったく石敷の形跡がなく、西寄りに用水路に沿って約60センチ幅に南北に続く径15センチ前後あるいはそれより小さめの川原石を敷きつめたごとき状態が発見されたが、それが南限については、鉄道敷地にはばまれて究めることはできなかった。

また西側のトレンチは、金堂・講堂の中心を延長した中軸線の東側にあって、鉄道敷北端から約7メートルにわたって径15センチ前後の川原石およびそれより小さめのものが敷きつめたごとくあって、この状態は真中のトレンチの西寄りの部分の状態とまったく同じであった。ただし真中のトレンチとこのトレンチ間に約2メートル幅の水路が南北に通っているため、その間の状態は知ることができないが、西側トレンチと真中トレンチの西寄りの敷石は連続していたものと推察された。ここでは敷石の南限は鉄道敷地にはばまれて極めることはできなかったが、北は鉄道敷北端から約8メートルで、敷石が終わっていることがわかった。

ことにこのトレンチ内で中軸線から1.9メートル、石敷北端から1.4メートルの地点に長径40センチ、短径30センチの川原石が面を水平にして据えてあったので、トレンチを西方に広げたとこ、やはり中軸線の西に、さきに見出した平石とまったく同大の川原平石が対称的位置にあることを発見した。両者の距離3.8メートルで、北門の中央間として適切な距離である。この両石の北側1.4メートル幅の石敷の北端が東西に一直線であるので、この線を基壇の北縁とし、さきの両石は北門中央間の北側の礎石の真下の根石と推定された。また真中トレンチ内発見の石敷の東端が、中軸線から5メートルあるので、あるいは北門脇間を3.2メートルとすることが可能である。

と記述し、四至の結論として、

以上から北門は間口10.2メートル(約33.66尺)、奥行6.4メートル(約21.12尺)基壇は正面10.2+2.8すなわち13メートル(約42.4尺)と推定され、側面は6.2+2.8すなわち9メートルと推定される。

また北門の中心は金堂中心から97.2メートルとなる。

つぎに、南縁については、今次の中門の位置の確定と、その南方の自然地形の上から見て、必ずしも金堂の中心が南北中軸線の中心でなく、中心から北縁までの距離よりもやや狭くなっていることも考えられた。すなわち、南大門の位置が、もし石崖付近とすると、金堂中心からおよそ60メートル内外である。

北は金堂の中心から97.2メートル、南は地形の関係で、金堂の中心から約60メートル内外であり、150メートル(80間)ないし157メートルぐらいに考えられる。東は金堂の中心から74メートルぐらいで東門跡と見なされる遺跡があるので、150メートルと考えられる。したがって80間四方、あるいは南北はこれよりもやや長く100間ともみられるが、一応80間四方と考えたい。

としている。これらの推定と結論をもとに、現在の史跡公園整備が実現しているのであるが、当時の予算や日程、技術的な限界もあり、確定的な遺構の確認や国家座標等への落とし込みがなく、現実どこを掘ったのかが不明となってしまう。また、整備の段階で、発掘調査によって確認された僧寺と尼寺の中軸方位のズレが僧寺を基準に平行に造成されていたり、推定されたはずの尼寺の北門や東門の表示がないことが、この困難をいっそう大きくしている。

こうした経過もふまえ、平成18(2006)年から20(2008)年には尼寺南限の区画施設の確認調査を実施してきたわけであるが、確認には至っておらず、今回北西隅の区画について確認を試みたものである。結論とすれば、今回調査した北調査において、南北方向の段差、すなわち東の尼寺側が高く、西側が低い地形の変換と、これに沿うピット列の検出は次の段階への足がかりとなる成果であった。平成の僧寺・尼寺の区画施設の確認調査では、築地塀の基礎や版築などはまったく確認されていない。また、築地塀に伴うべき溝跡も、平成18(2006)年の尼寺東側の調査を除いては確認されていない。このことは、南大門などの門の両袖はともかく、他の部分の区画施設は、簡便な板塀等で溝も掘られていない可能性がある。特に、昭和の発掘調査において、築地塀に関する想定や記述はあるものの、区画溝の記述がないことは、逆説的にこのことを裏付けるものかもしれない。

2 平成23年度僧寺南西域の調査

僧寺南大門跡は、平成14年度調査区の西端に八脚門の形態で累石が検出されている。調査区の設定で、西に続く袖塀と築地塀の確認は出来なかった。一方、東側では袖塀・築地塀が検出されるべき調査範囲は確保できていたが、これらの構造物の遺構は検出できなかった。また、平成18年の調査では、僧寺の西門跡が掘立柱の四脚門として確認された。この調査では、門跡の両脇に調査するスペースが確保できず、袖塀や連続する区画施設の確認は出来なかった。

平成23年度は、これらの成果を踏まえ、僧寺南西隅の区画施設について確認調査を実施した。調査区は、南大門跡から西に40m弱、西門跡から南に80m弱の近接した箇所である。結果として、南大門につながる区画施設として明確な遺構は確認できなかったが、地山に20cm程度の掘り込みをし、砂と礫を入れた幅200cmの土層とその南に隣接して深さ30cm、幅40cmの落ち込みが確認されている。場合によれば、これが築地塀の基礎構造とその外側の溝跡とも考えられるが、築地塀の基礎とすると幅が狭すぎることが難点である。また、平面的に確認することが出来なかったため、改めて近接する部分で確認調査を実施する必要がある。また、残念ながら西門につながる区画施設は、今回も確認できなかった。

この他の遺構とすれば、東調査区(南大門西側)で北から南に通る溝跡がある。溝跡は、北側で僧寺の軸線とは30°西に振れ、南側で軸線と一致する。出土遺物から、古墳時代後期の信濃国分寺造営前の遺構と思われる。信濃国分寺は、千曲川の段丘上に立地するが、僧寺でいえば南大門跡周辺が微高地となり、中門や西門跡あたりがやや低地となるため、南大門跡でも大規模な暗渠排水施設が見られた。この溝跡もあるいは国分寺の地行に際して水を抜くための施設であった可能性もある。

3 平成24年度尼寺回廊南東域の調査

尼寺回廊跡の調査は、昭和44年に行なっている。その際の記述では、

東廻廊は、溝その他の新しい施設のため破壊されているものと認められたので、西半分においてこれを行なった。既に僧寺においては、回廊が中門から派出して講堂に続くことが明らかにされたので、尼寺においてもこのような配置を考え、まず金堂の西の方および金堂と講堂との中間の西の方にトレンチを設けて調査した。

その結果、金堂跡の中心から約 20 メートル離れて、やや土の固まっている地層が南北に長くのびていることを明らかにし、その追究につとめた。そして、中門の西および講堂の西についても調査を進め、ことに講堂の西では、ほとんど全面的な発掘を行ない、その接続の関係を屈折の部分の探索につとめた。

このようにして西半部の地域で明らかにされた点は、やはり中門から派出し講堂に続く単廊の構造をもっていることで、僧寺と同じ形式であるが、ただ僧寺は複廊であり、構造の上に相違がある。南廻廊の部分で見ると、中門とはほぼ同じ高さであり、礎石をまじえたやや堅くしまった床面をもっている。根固め栗石群も 30 センチ前後の石塊で構成されている。

西回廊では、南寄りの地域がほとんど栗石群もなく攪乱されていることがわかったが、北に進むにしたがい、基壇の両縁の一部を構成するとみなされる石塊も存し、また堅い床面の一部も認められた。ことに 1 ケ所では厚さ 10 センチぐらいの焼土が広がっており、壁土の痕跡でないかとも考えられた。北寄りでは、根固め栗石と認められるものも見られ、ことに移動していたが、長さ 60 センチ、幅 67 センチ、厚さ 40 センチぐらいの面の平らな自然石も存し、あるいは礎石の一つでないかともみられた。

北廻廊では、根固め栗石も 3 カ所ぐらい明らかにされた。すなわち、この部分には自然石塊がかなり散乱していたが、その中に 30 センチ前後の石をほぼ丸く密にさせ、内部にやわらかい土が充填していた外径約 1 メートルぐらいの痕跡があった。またこの廻廊の基壇の北縁を示すものと思われる 25 センチぐらいの石塊の東西並列線の一部も検出された。ことに西北部の隅角にあたる部分には、長さ 35 センチ、幅 25 センチぐらいのかなり大きい石が据えられていた。

このように検出された遺構の上から総取すると、廻廊は単廊で、縁に地覆石・羽白目石等の化粧はなく、自然石塊を配した程度のものごとくであり、幅は約 7.4 メートル(約 24.4 尺)と考えられた。基壇の床面は礎石をまじえて堅くつき固められたしまりのあるものである。建物は縁からおよそ 1.75 メートルぐらい内側にあり、柱間はいずれも約 3.3 メートル(10.85 尺)ぐらいと考えられる。建物の南北の長さは 82.5 メートル(約 271 尺)で 25 間である。東西の幅は、北廻廊でみると、講堂の南北中軸線から廻廊の西縁まで 27.3 メートル(約 90 尺)と考えられるので、全幅 54.8 メートル(約 180 尺)に算せられる。講堂に続くところで 2 間、中門に続くところで 4 間ある。また講堂と接続との関係については、講堂の中央に続いている。すなわち講堂の奥行の中央の柱列が廻廊の中心にあたる。したがって講堂の基壇から南に 7.6 メートルぐらいの出っ張りがある。

とされており、回廊の東側についてはまったく調査されていない。平成 24 年度は、この調査されていない東回廊の南側で遺構の確認に努めた。平成 19 年に中門の東側で一部回廊跡と推定されている箇所を調査を実施したが、この際に前述の昭和の調査のような遺構は確認されていない。

結果からいえば、今回も回廊跡と確定される遺構は確認できなかったが、そのライン上に瓦片の集中が帯状に見られ、その下から溝跡が検出された。この瓦片の集中は、溝に廃棄されたもののようであり、回廊が倒壊する際に、葺かれた瓦が倒れ込んだものではない。しかし、この溝が僧寺の中軸線より東に若干振れていることは看過できない点である。昭和の発掘調査では、僧寺・尼寺の中軸線に 2°のずれ、すなわち「僧寺は南北中軸線が磁北に対して 3 度 12 分東に触れているに対し、尼寺は同じく磁北に対して 5 度 13 分東に触れており、約 2 度のずれがある。」としている点で、今回検出された溝は、その指摘に一致することである。

この溝跡の南の延長については、今回と平成 19 年度に調査でも認められないことから、この先で短く終わるか、東西いずれかに屈折するものと思われる。また、溝の幅が約 1 cm あり、回廊の雨落ちとしては広すぎることや、断面形状が自然なアールを呈していることは、尼寺建立とは直接関係はなく、むしろ尼寺の廃絶過程で形成されたものとも考えられる。尼寺回廊跡についても他の伽藍跡と同様に不明な点が多い。過去の調査の再検証も含めた調査が必要な時期にきている。

第2節 検出された遺構

1 平成22年度尼寺北西区画の調査

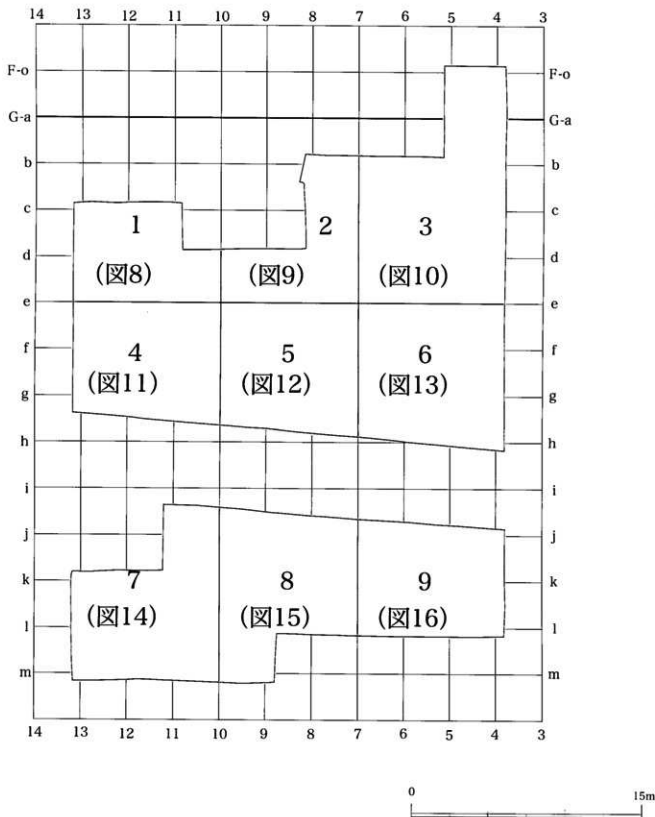


図6 平成22年度調査区及び実測図面画割

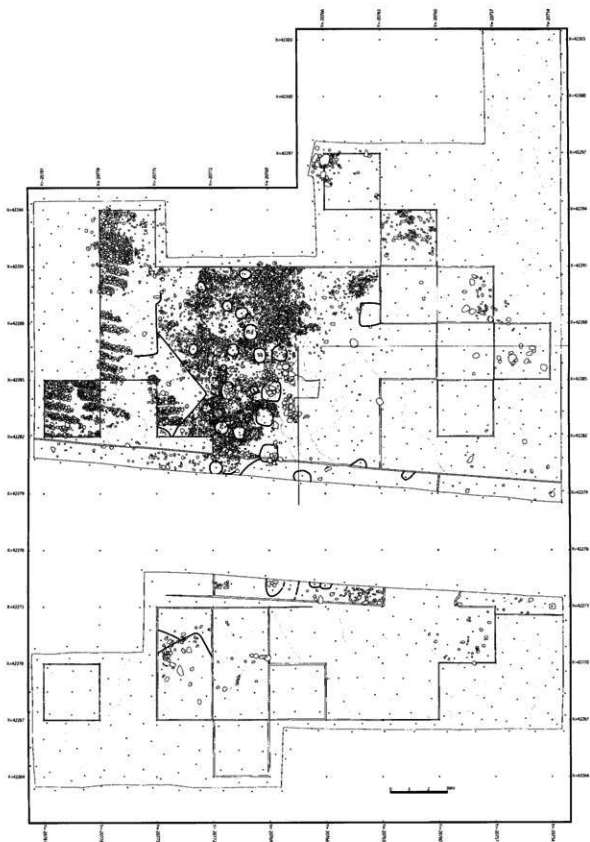


図7 平成22年度調査実測図（縮小）

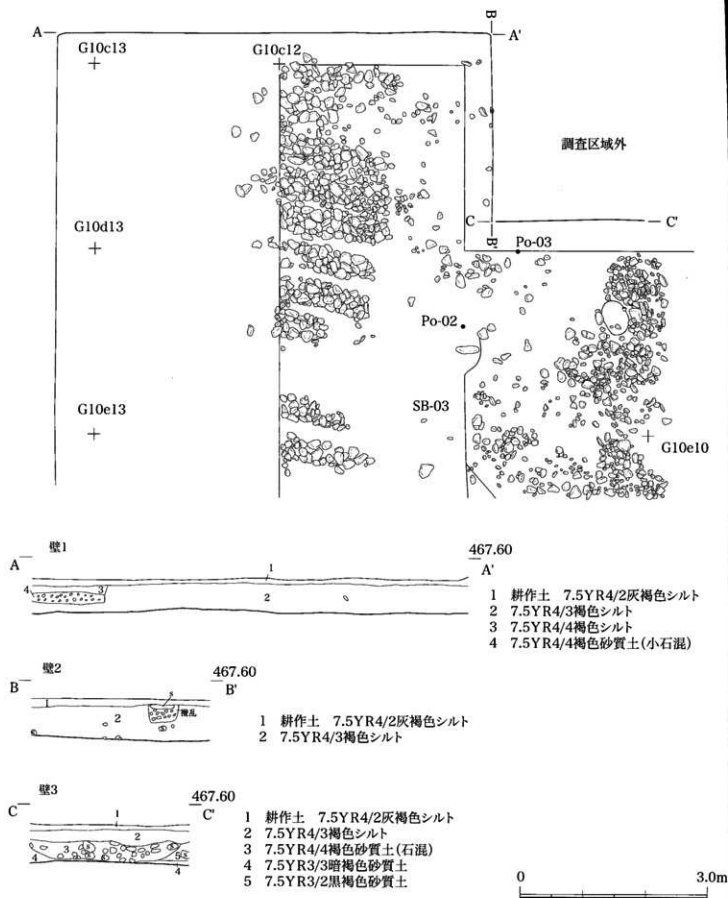


図8 平成22年度調査区実測図1 (1/60)

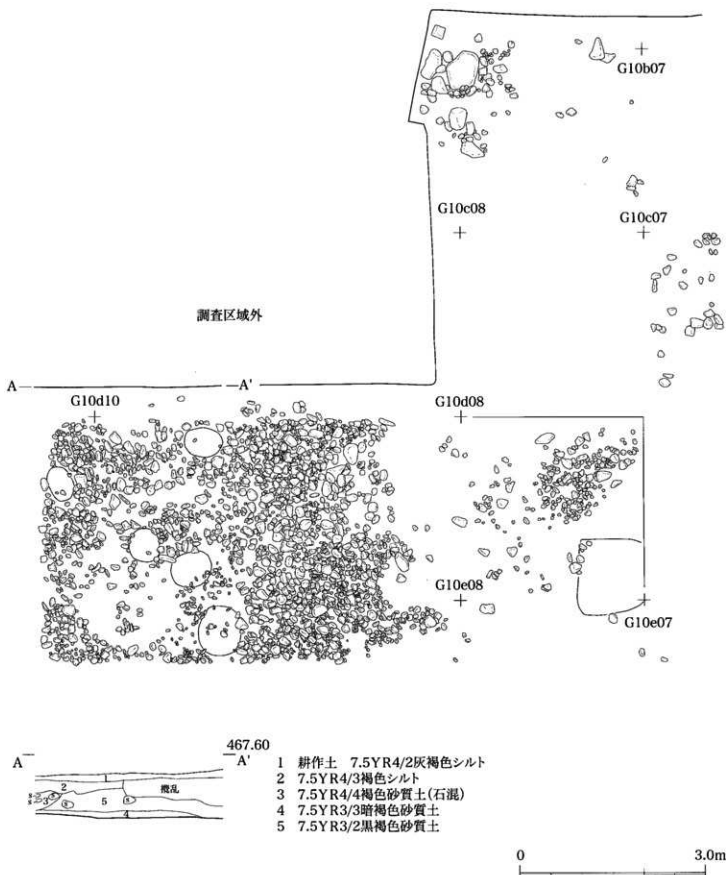


図9 平成22年度調査区実測図2 (1/60)

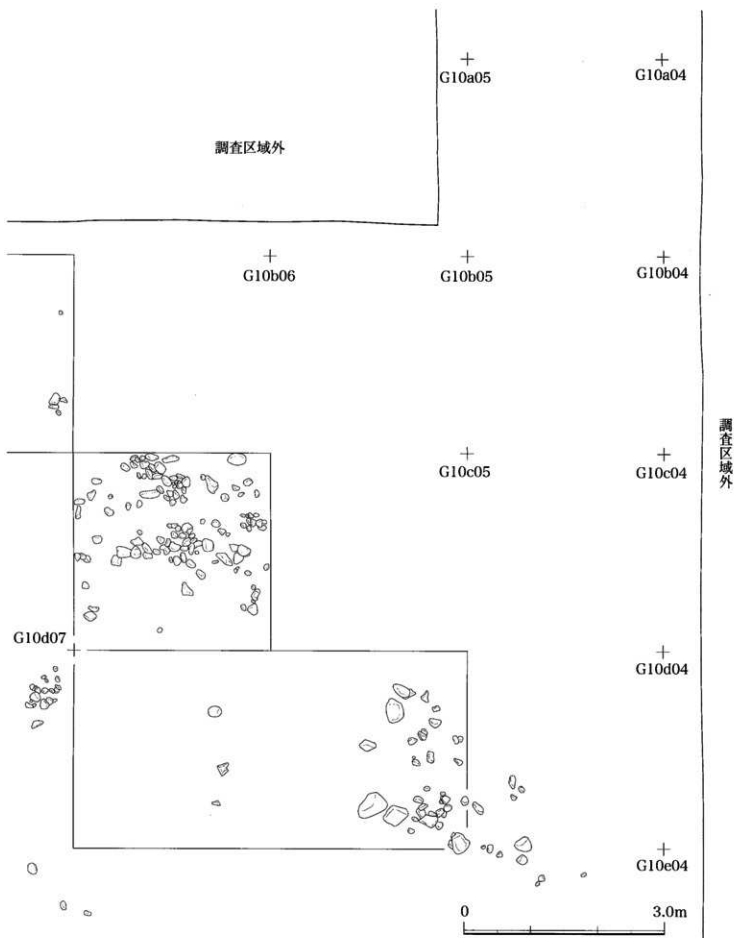


図 10 平成 22 年度調査区実測図 3 (1/60)

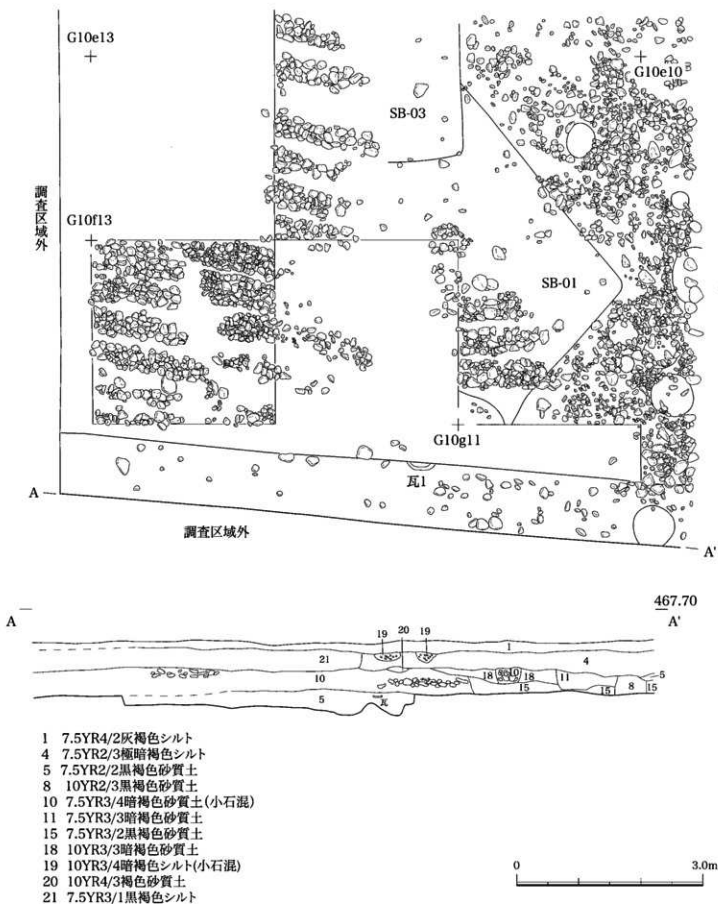


図 11 平成 2 2 年度調査区実測図 4 (1/60)

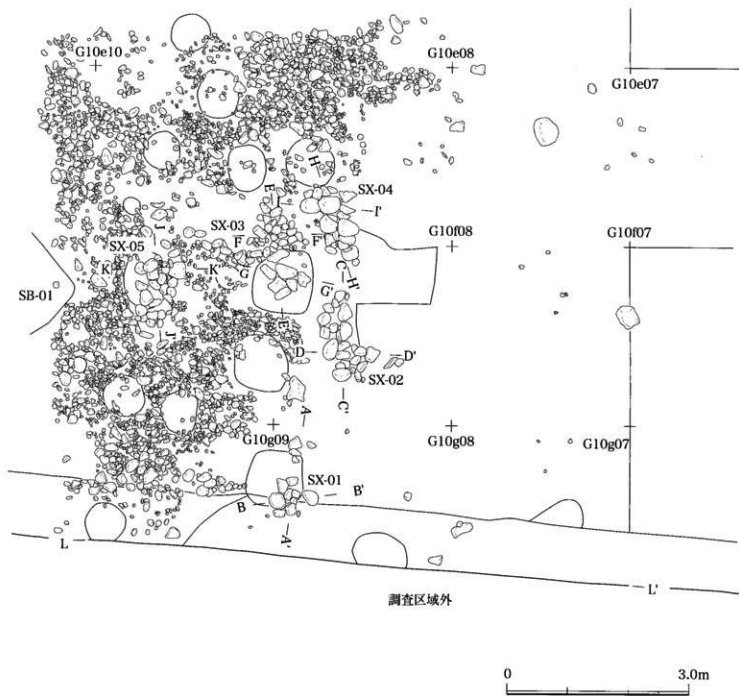
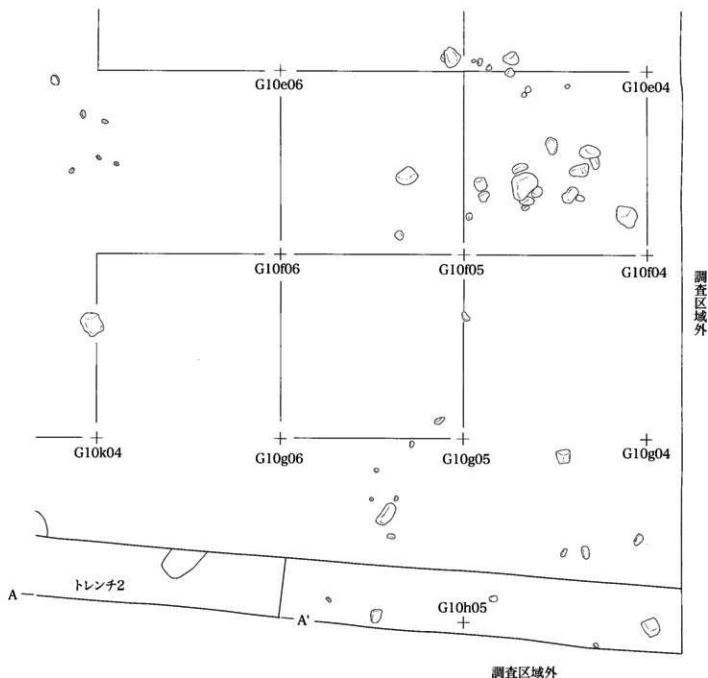
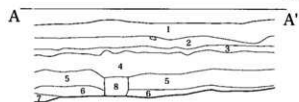


図 12 平成 22 年度調査区実測図 5 (1/60)



トレンチ2 467.70



- 1 7.5YR4/2灰褐色シルト
- 2 7.5YR4/3褐色シルト
- 3 7.5YR3/3暗褐色シルト
- 4 7.5YR2/3極暗褐色シルト
- 5 7.5YR2/2黒褐色砂質土
- 6 10YR3/4暗褐色砂質土
- 7 10YR4/4褐色砂質土
- 8 10YR2/3黒褐色砂質土

0 3.0m

図 13 平成 22 年度調査区実測図 6 (1/60)

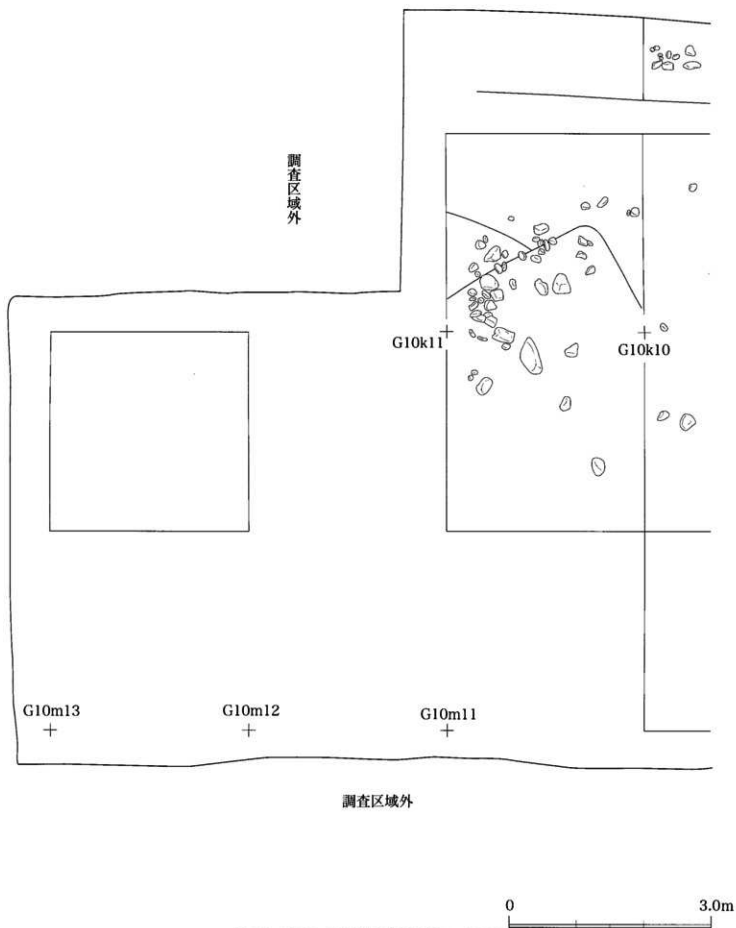


図 14 平成 22 年度調査区実測図 7 (1/60)

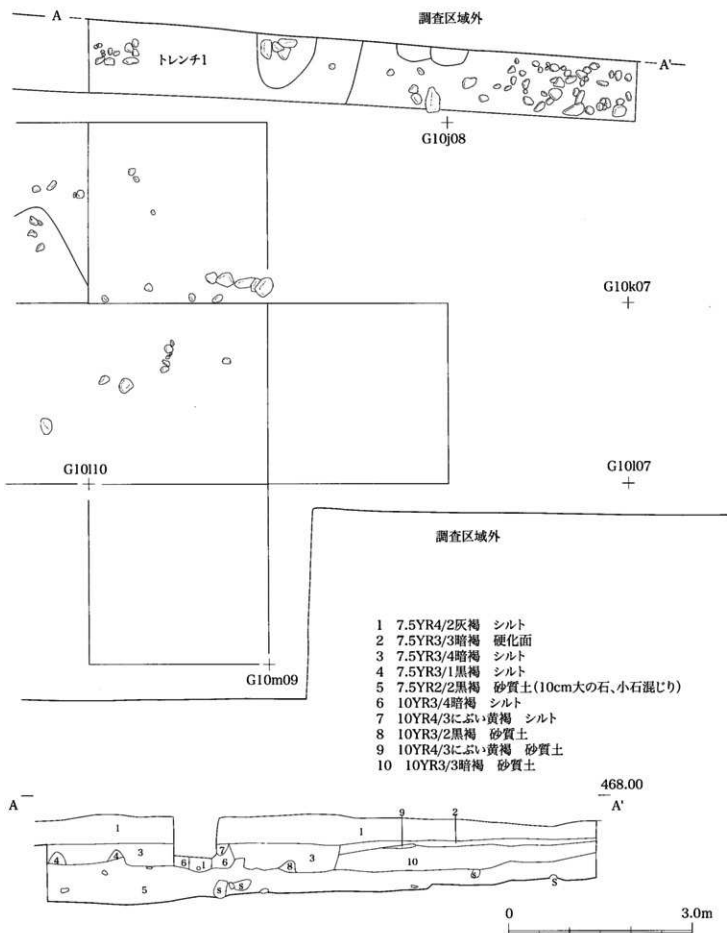


図15 平成22年度調査区実測図8 (1/60)

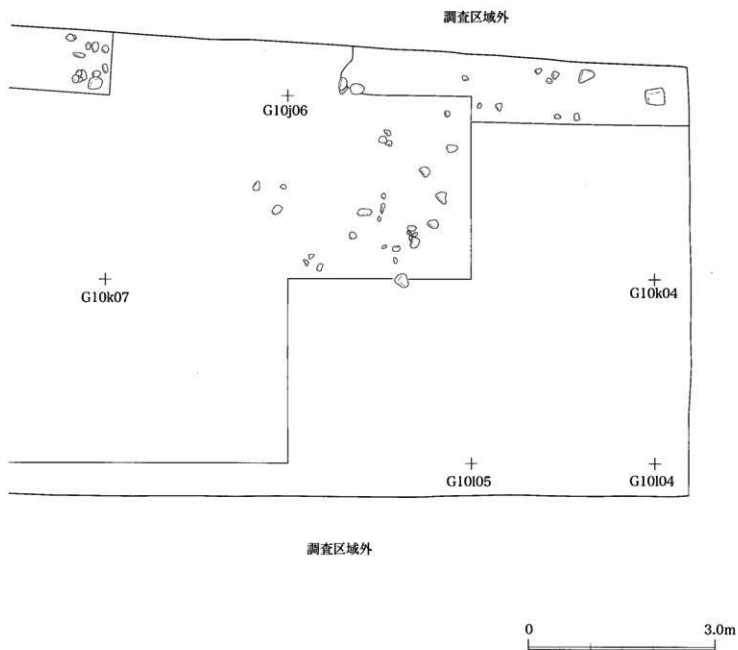


図 16 平成 22 年度調査区実測図 9 (1/60)

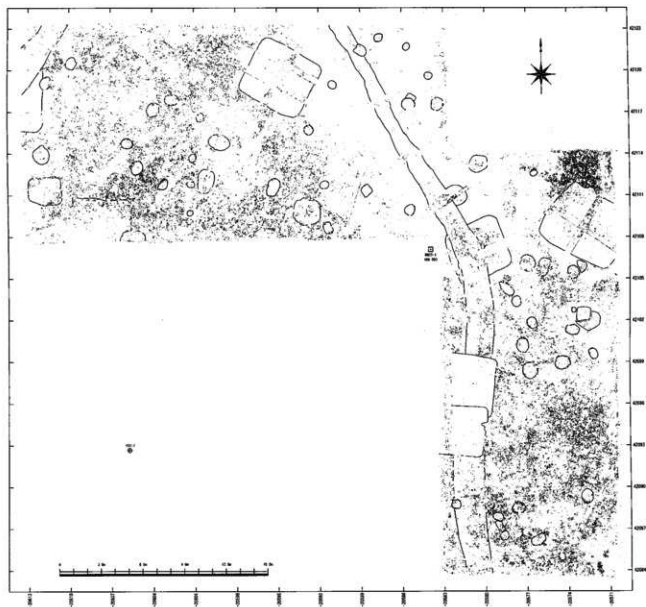


図 17 平成23年度調査実測図 (縮小)

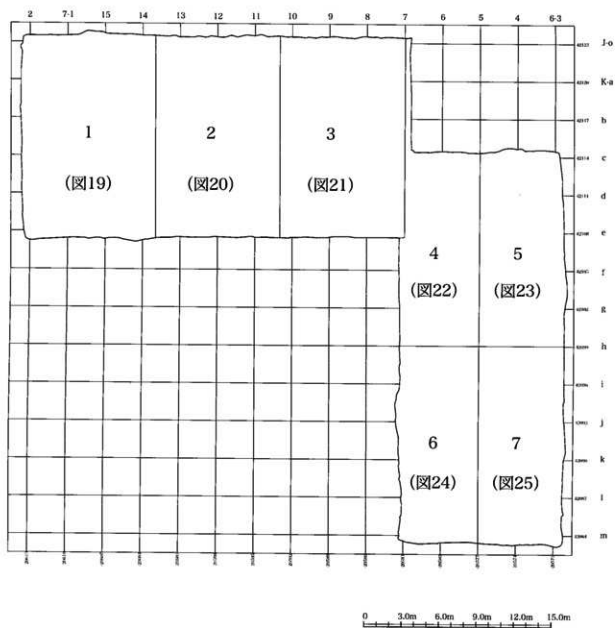


図18 平成23年度調査区及び実測図面図割

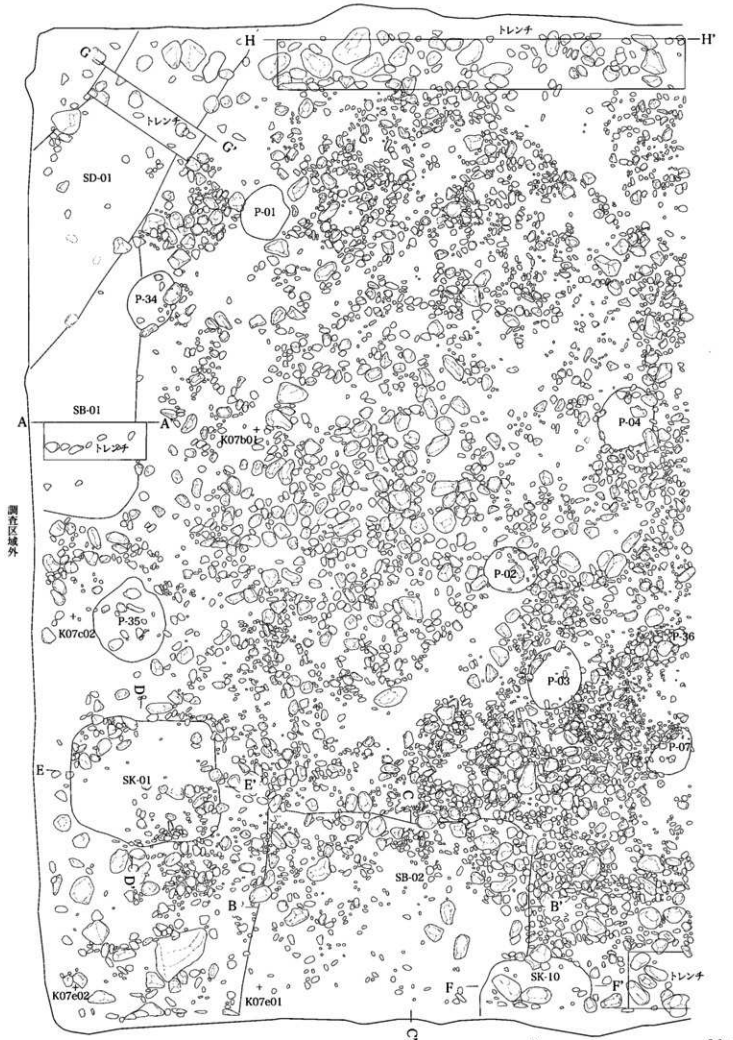


図 19 平成 23 年度調査区実測図 1 (1/60)

SB-01

468.20

A— A' 1 7.5YR2/2黒褐色砂質土

SB-02

468.30

B— B' C— S C' 468.30

SK-01-1

468.30

D— D'

SK-01-2

468.30

E— E'

- 1 7.5YR3/2黒褐色シルト
2 7.5YR3/3暗褐色砂質土(小石から10cm大の石混じり)

SK-10

468.30

F— F'

SD-01

468.30

G— G'

- 1 10YR3/2黒褐色砂質土
2 10YR2/3黒褐色砂質土
3 7.5YR2/3極暗褐色砂質土

7.5YR3/2黒褐色砂質土(大小石混じり)

北壁

H— H' 469.00

- 1 耕作土
2 7.5YR3/1 黒褐色シルト
3 7.5YR3/3 暗褐色(礫層)砂質土
4 7.5YR2/2 黒褐色砂質土
5 7.5YR3/3 暗褐色シルト
6 7.5YR2/2 黒褐色シルト
7 7.5YR3/4 暗褐色砂質土
8 7.5YR4/3 褐色シルト
9 5YR4/3 によい赤褐色
10 7.5YR2/2 黒褐色シルト
11 7.5YR2/3 極暗褐色砂質土(大、小石混じり)
12 粘土

0 3.0m

図20 平成23年度調査区実測図1セクション図(1/60)

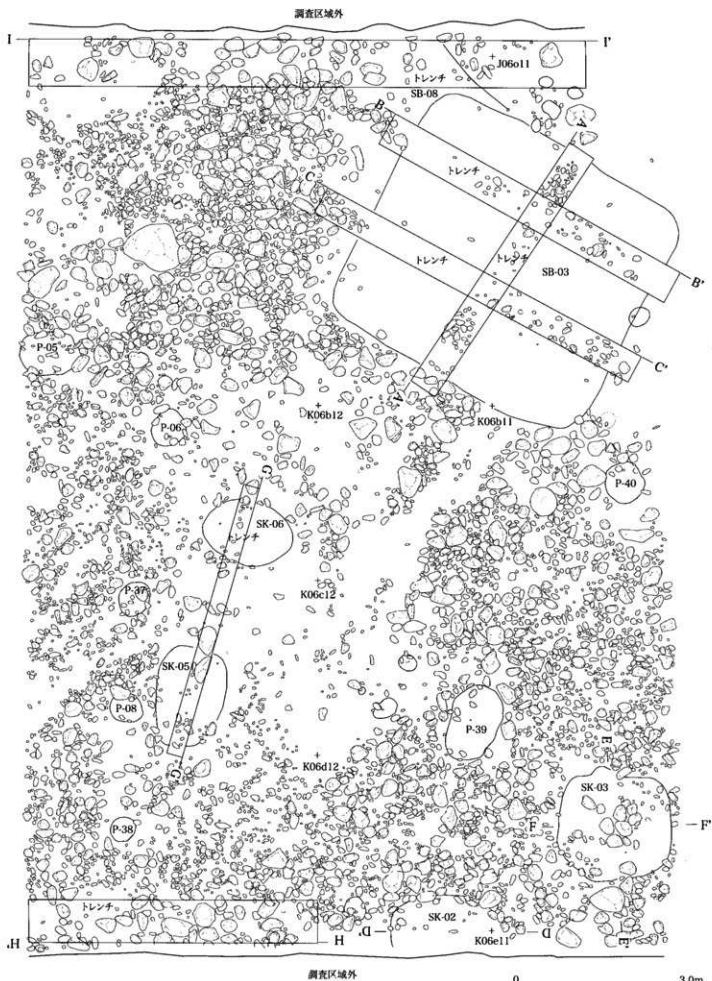


図21 平成23年度調査区実測図2 (1/60)

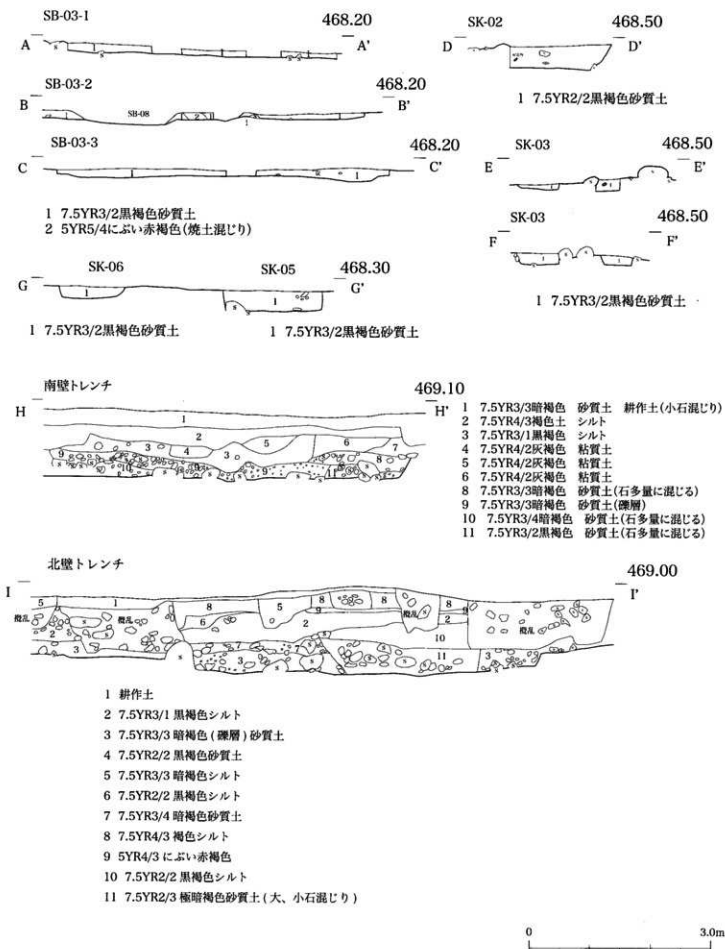
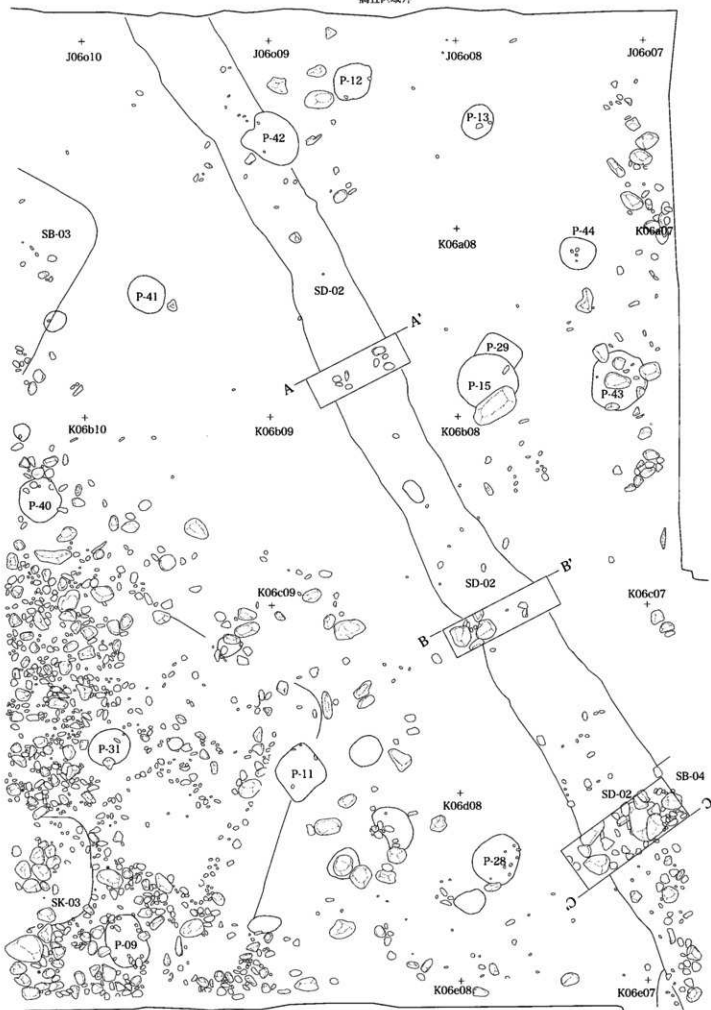


図22 平成23年度調査区実測図2セクション図(1/60)



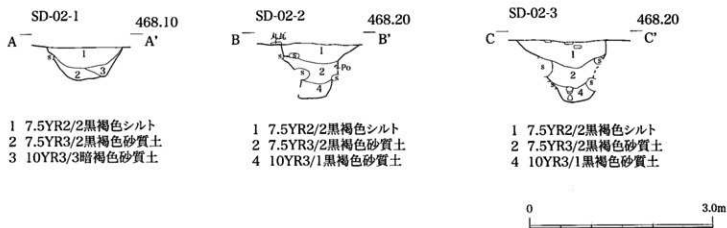


図 24 平成 23 年度調査区実測図 3 セクション図 (1/60)

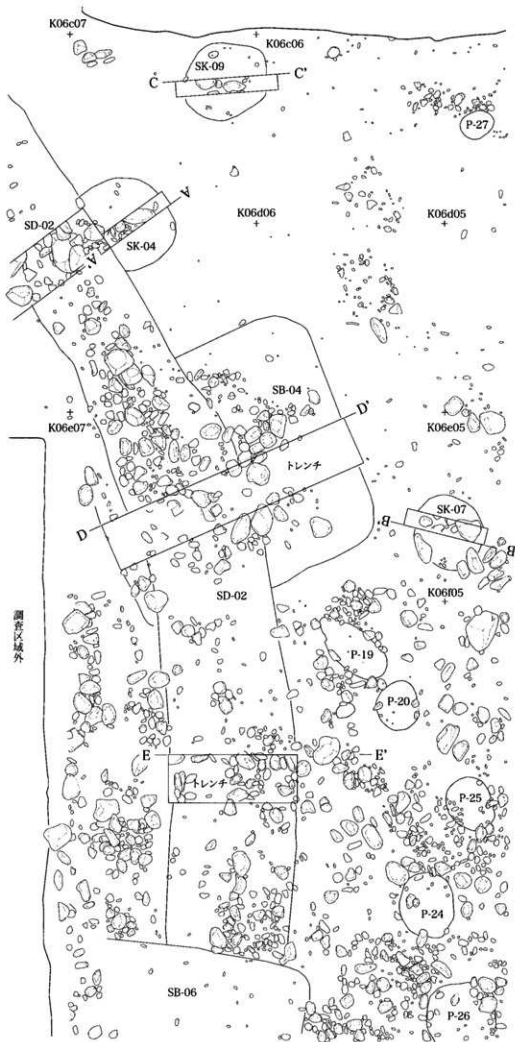
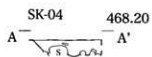
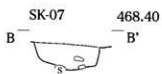


図 25 平成 23 年度調査区実測図 4 (1/60)



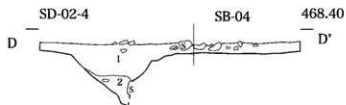
10YR3/3暗褐色砂質土



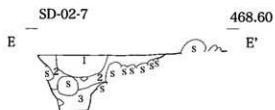
7.5YR3/2黒褐色砂質土



5YR3/1 黒褐色砂質土



1 7.5YR2/2黒褐色シルト
2 7.5YR3/2黒褐色砂質土



1 7.5YR2/2黒褐色シルト
2 7.5YR3/2黒褐色砂質土
3 10YR3/1黒褐色砂質土



図 26 平成 23 年度調査区実測図 4 セクション図 (1/60)

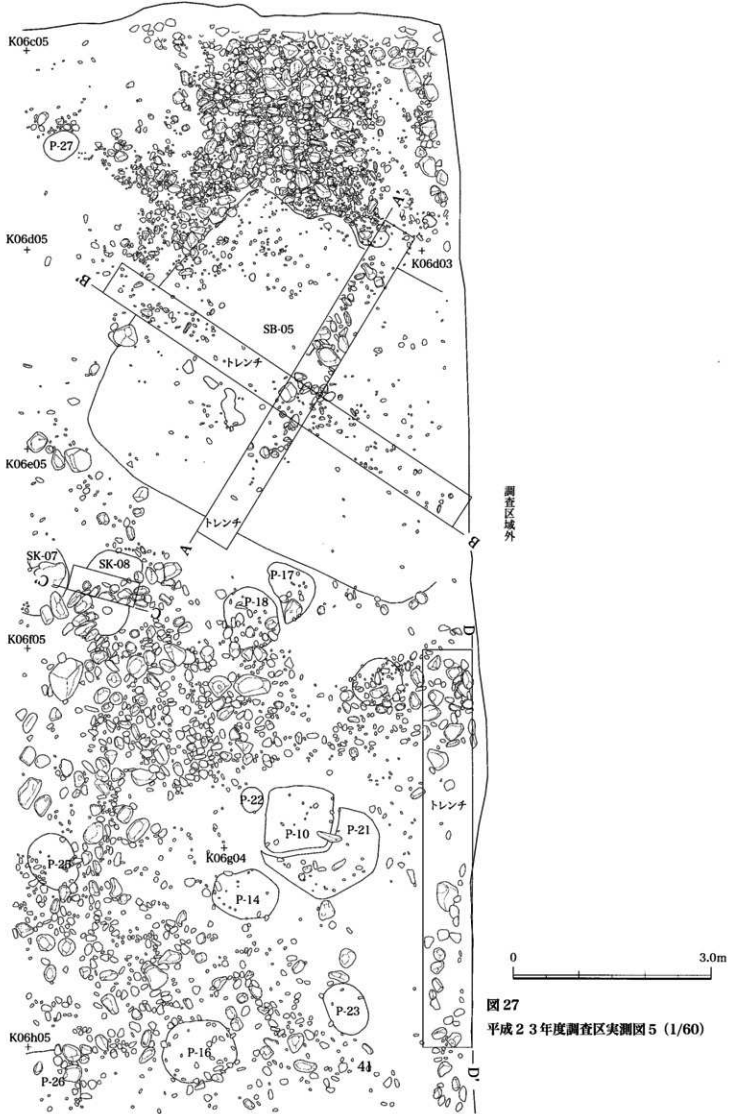
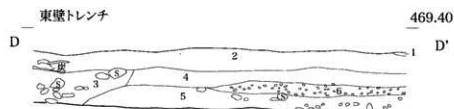


図 27

平成 23 年度調査区実測図 5 (1/60)



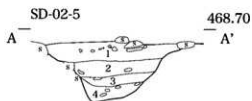
- 1 さいい石 砂利混ざり
- 2 7.5YR2/2 黒褐色シルト 耕作土
- 3 7.5YR3/1 黒褐色砂質土 20-25 cmの石含む
- 4 5YR2/2 黒褐色砂質土
- 5 5YR3/4 暗赤褐色砂質土 10-20 cmの石含む
- 6 5YR3/2 暗赤褐色砂質土 3-5 cmの小石多く含む



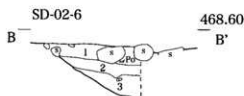
図 28 平成 23 年度調査区実測図 5-セクション図 (1/60)



図29 平成23年度調査区実測図6 (1/60)



- 1 7.5YR黒褐色シルト
- 2 7.5YR黒褐色砂質土
- 3 7.5YR2/3極暗褐色砂質土
- 4 10YR3/1黒褐色砂質土



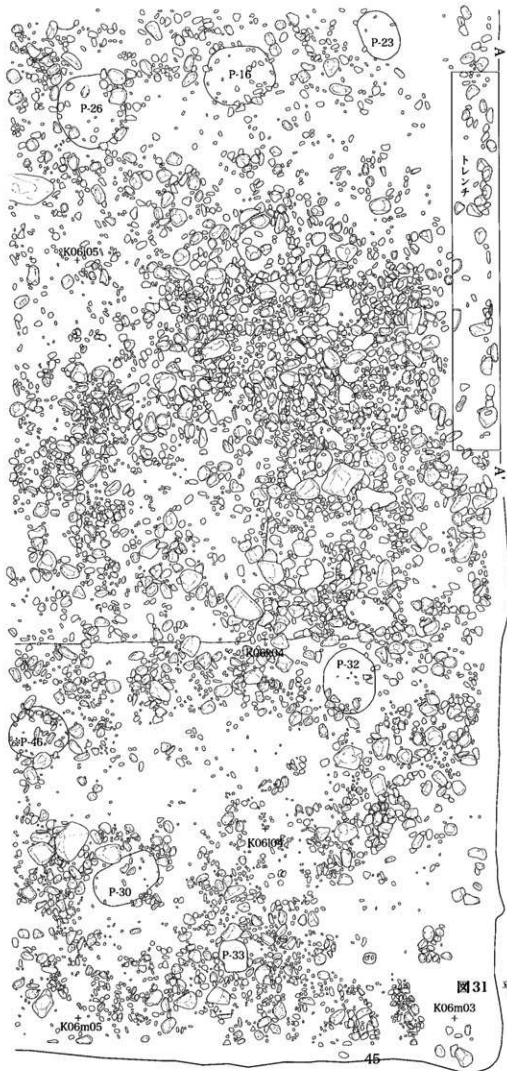
- 1 7.5YR2/2黒褐色シルト
- 2 7.5YR3/2黒褐色砂質土
- 3 10YR3/1黒褐色砂質土



- 1 7.5YR2/2黒褐色 シルト(SB-07の覆土)
- 2 7.5YR3/1黒褐色 シルト
- 3 7.5YR3/3暗赤褐色 砂質土 石多量に混じる
- 4 7.5YR3/4暗赤褐色 砂質土 大小の石混じる
- 5 7.5YR2/2黒褐色 砂質土
- 6 5YR3/4暗赤褐色 砂質土 大小の石混じる
- 7 5YR3/4暗赤褐色 シルト 礫層
- 8 7.5YR3/3暗褐色 砂質土 礫層
- 9 7.5YR3/4暗褐色 砂質土 大小の石混じる



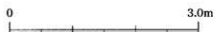
図30 平成23年度調査区実測図6セクション図 (1/60)



調査区域外

図31 平成23年度調査区実測図7 (1/60)

K06m03



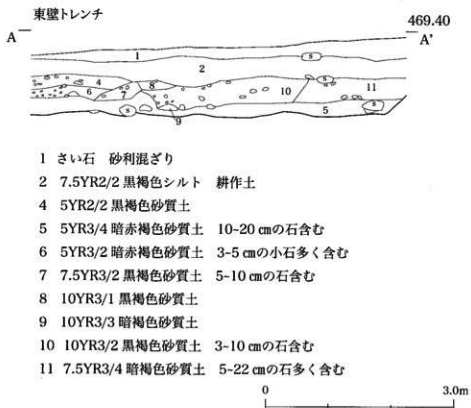


図 32 平成 23 年度調査区実測図 7 セクション図 (1/60)

3 平成24年度(2012)調査遺構

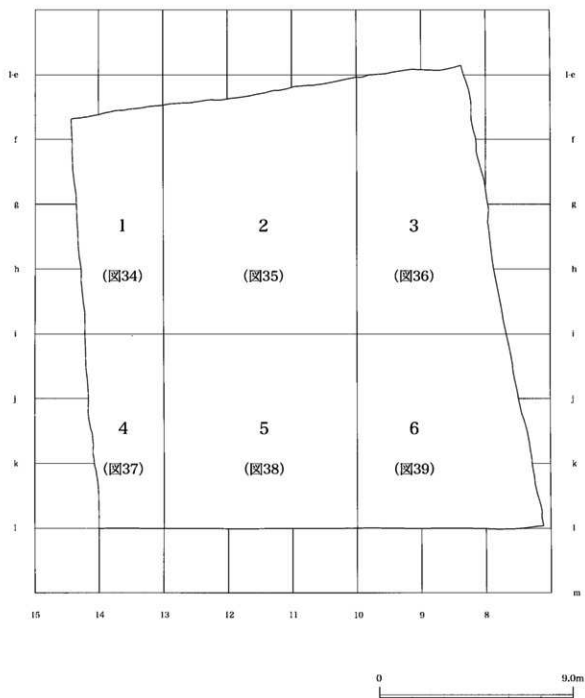


図33 平成24年度調査区及び実測図画面割

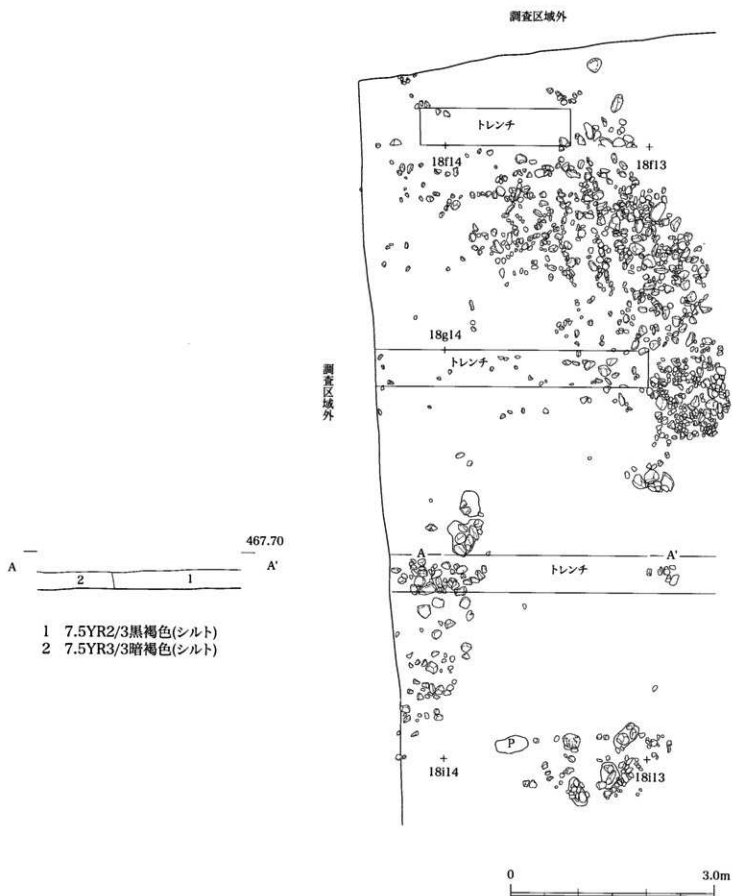


図 34 平成 24 年度調査区実測図 1 (1/60)

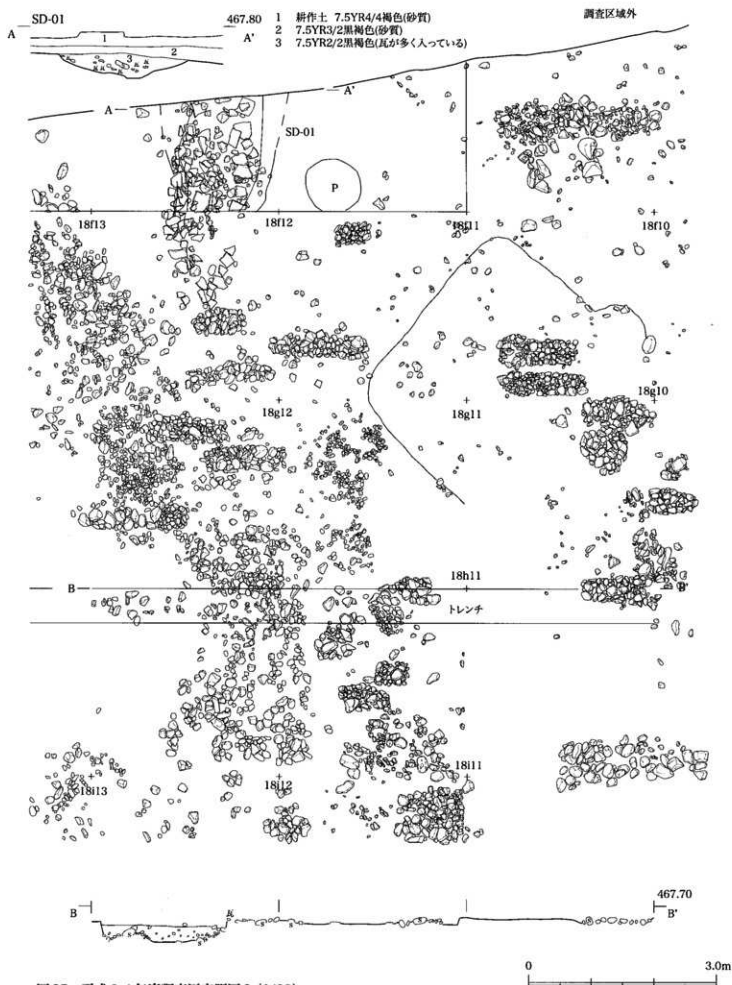


図35 平成24年度調査区実測図2 (1/60)

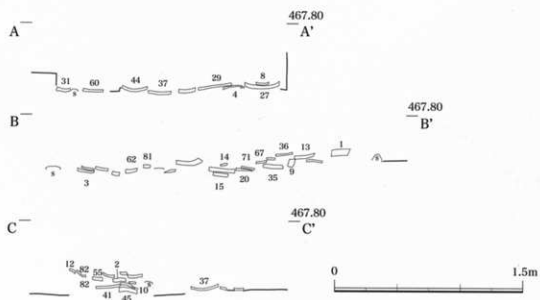
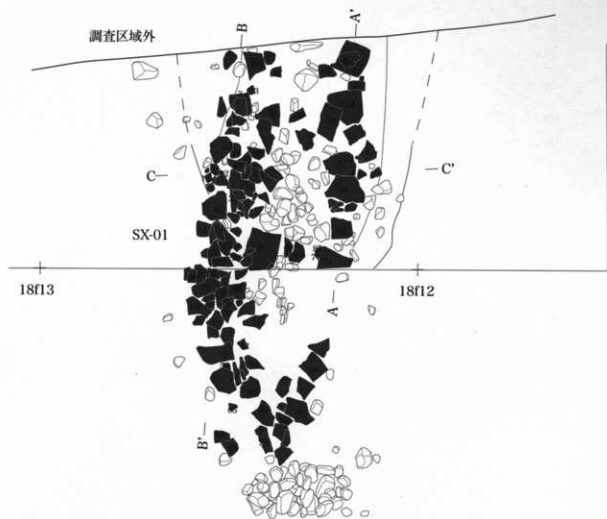


図 36 平成 24 年度調査区実測図 2-1 瓦出土状況 (1/60)



図 37 平成 24 年度調査区実測図 3 (1/60)

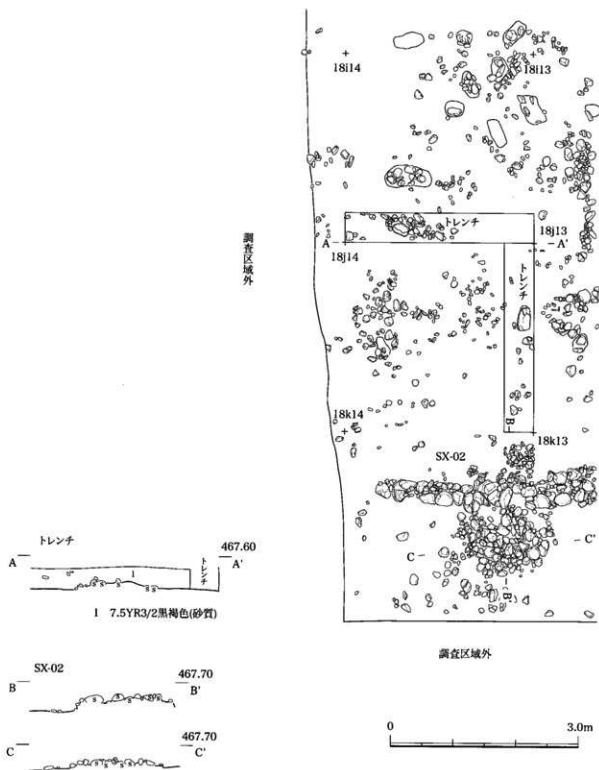


図 38 平成 24 年度調査区実測図 4 (1/60)

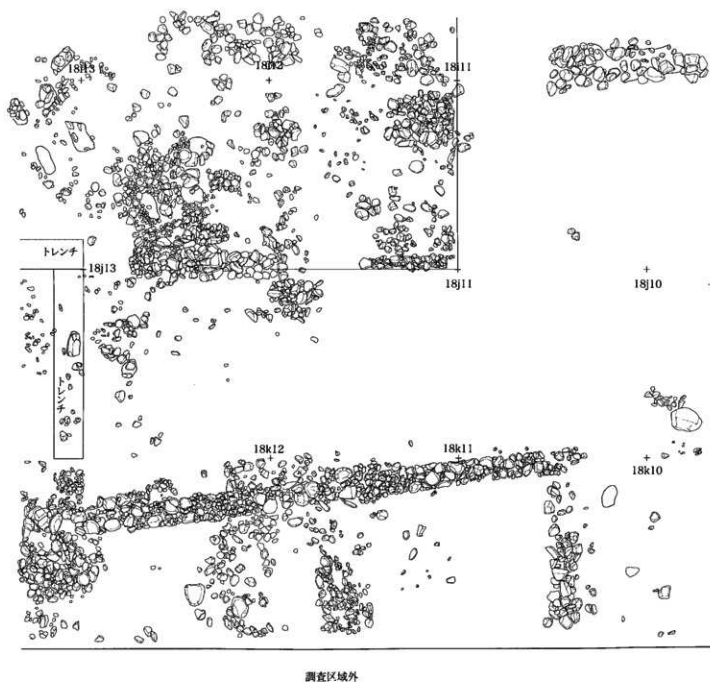
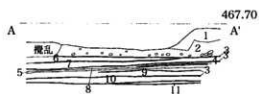
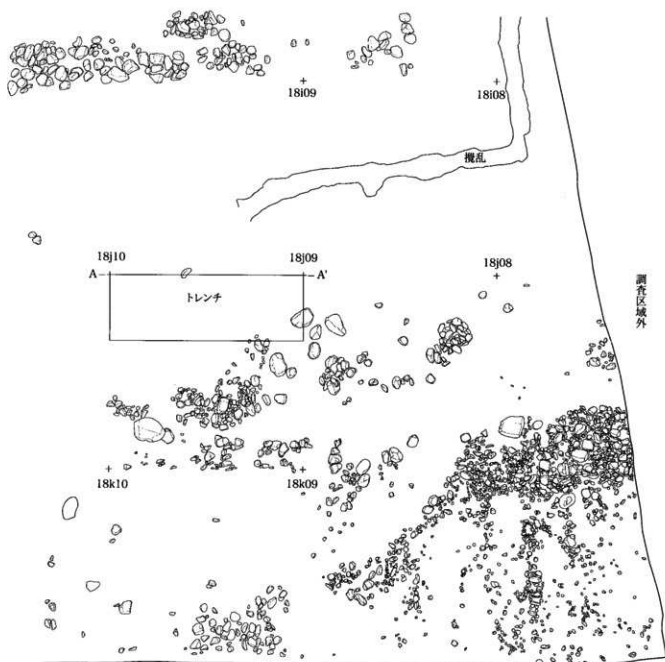


図 39 平成 24 年度調査区実測図 5 (1/60)



- 1-10YR7/4にぶい・黄褐色(シルト)
- 2-10YR3/2茶褐色(砂質)(小石混)
- 3-10YR3/1茶褐色
- 4-10YR5/4にぶい・黄褐色(砂質)
- 5-10YR5/1黄灰色
- 6-2.5Y6/4にぶい・黄色
- 7-2.5Y7/4浅黄色
- 8-10YR5/4にぶい・黄褐色
- 9-10YR4/3にぶい・黄褐色
- 10-10YR4/2灰黄褐色
- 11-10YR2/3黒褐色(砂質)



図40 平成24年度調査区実測図6 (1/60)

第3節 出土遺物

1 平成22年度(2010)出土遺物

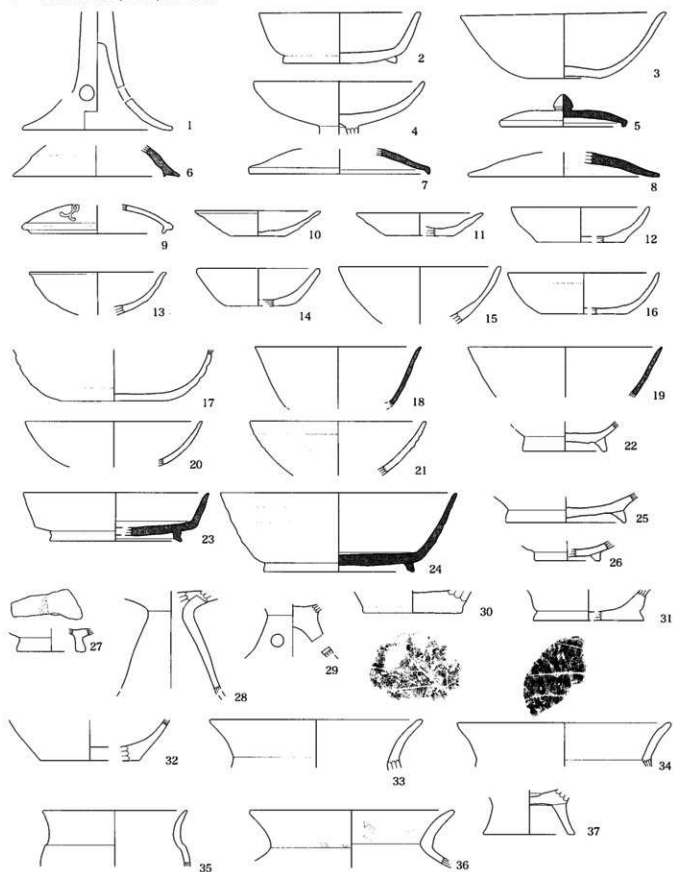


図41 平成22年度出土遺物実測図1 (1/3)

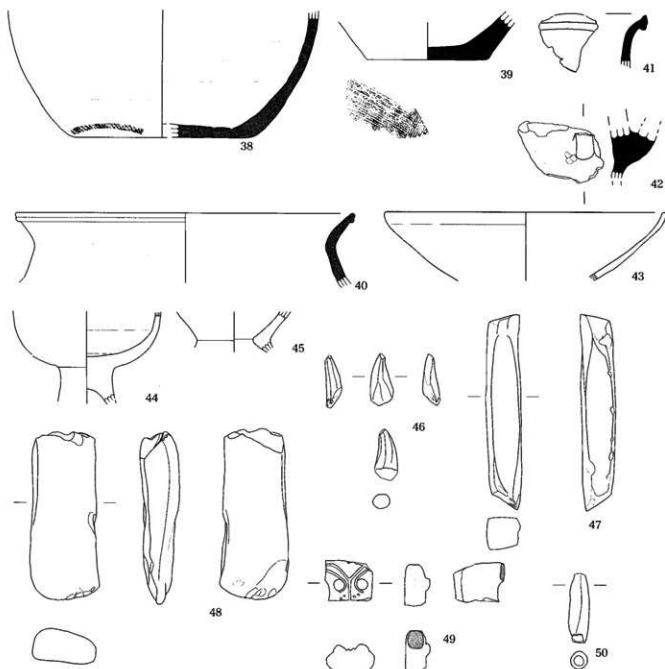


図42 平成22年度出土遺物実測図2 (1/3)

2 平成23年度(2011)出土遺物

(I) 竪穴建物跡出土遺物

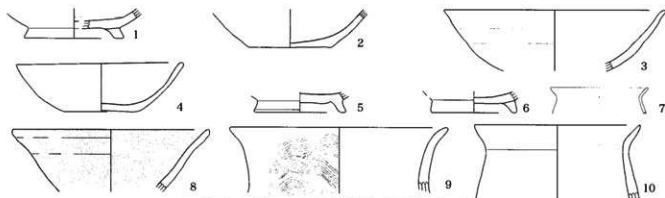
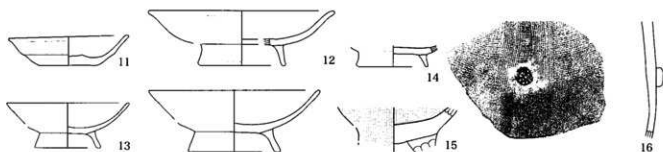
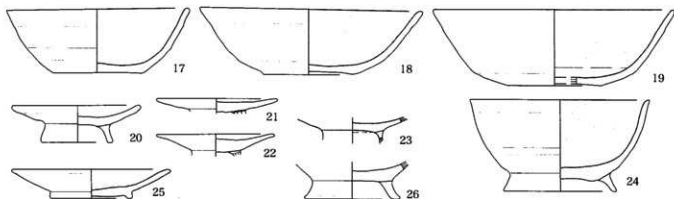


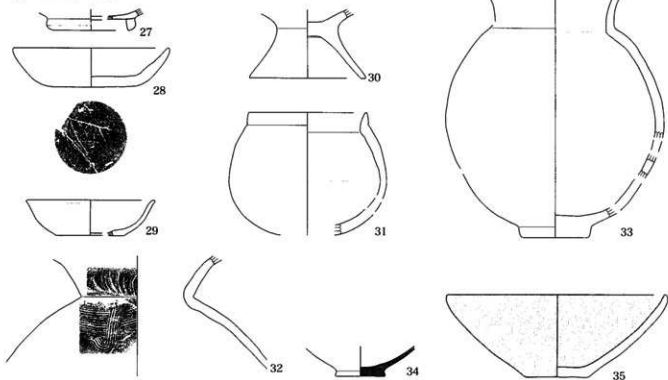
図43 平成23年度出土遺物実測図1 (1/3)



(2) 土坑出土遺物



(3) 溝跡出土遺物



(4) ピット出土遺物



図 44 平成 23 年度出土遺物実測図 2 (1/3)

(5) 遺構外出土遺物

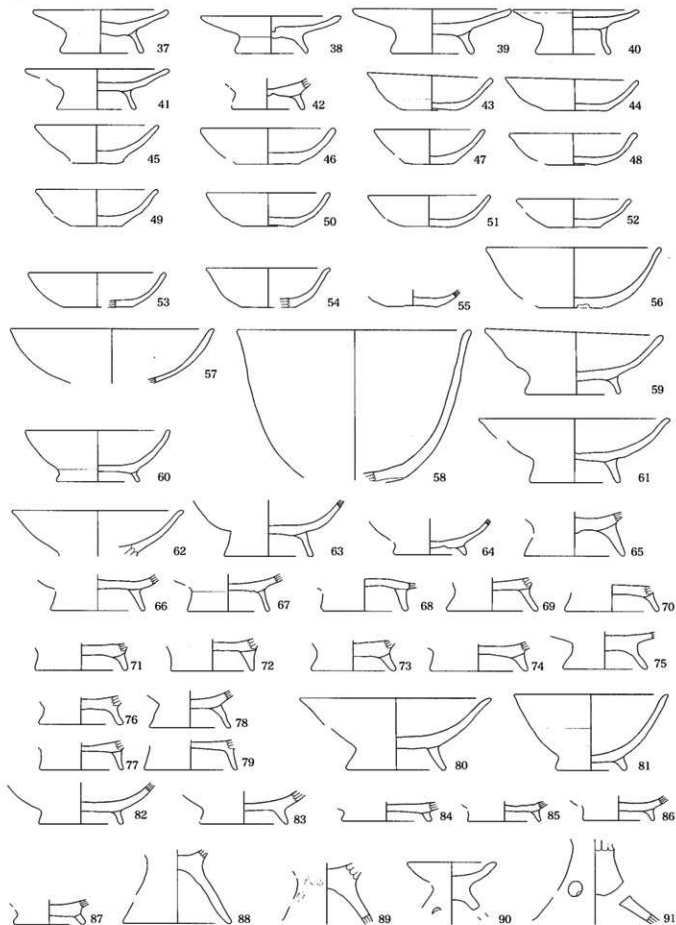


図45 平成23年度出土遺物実測図3 (1/3)

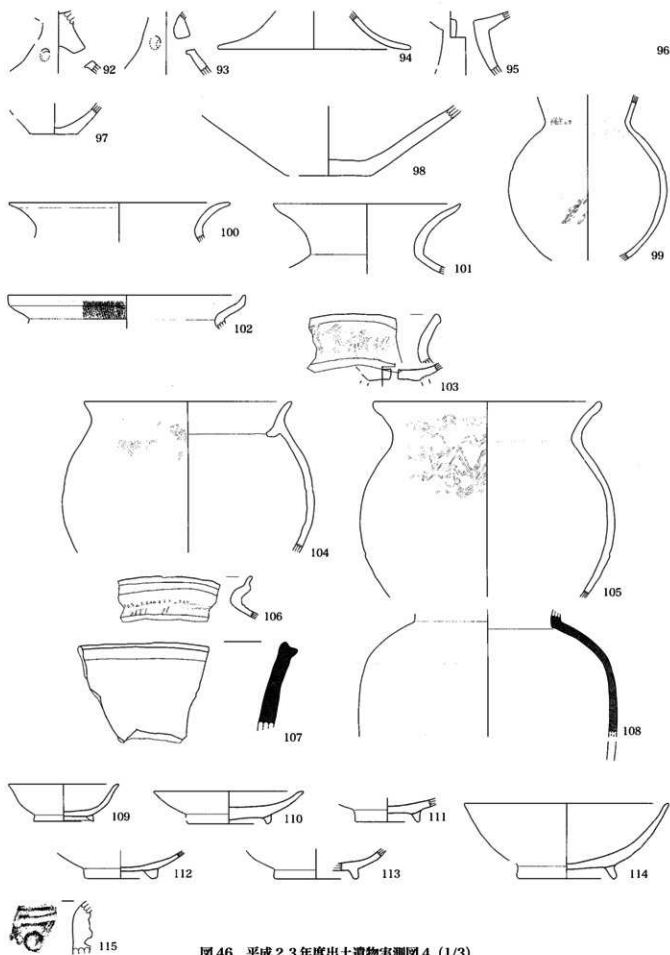


図46 平成23年度出土遺物実測図4 (1/3)

3 平成24年度(2012)出土遺物

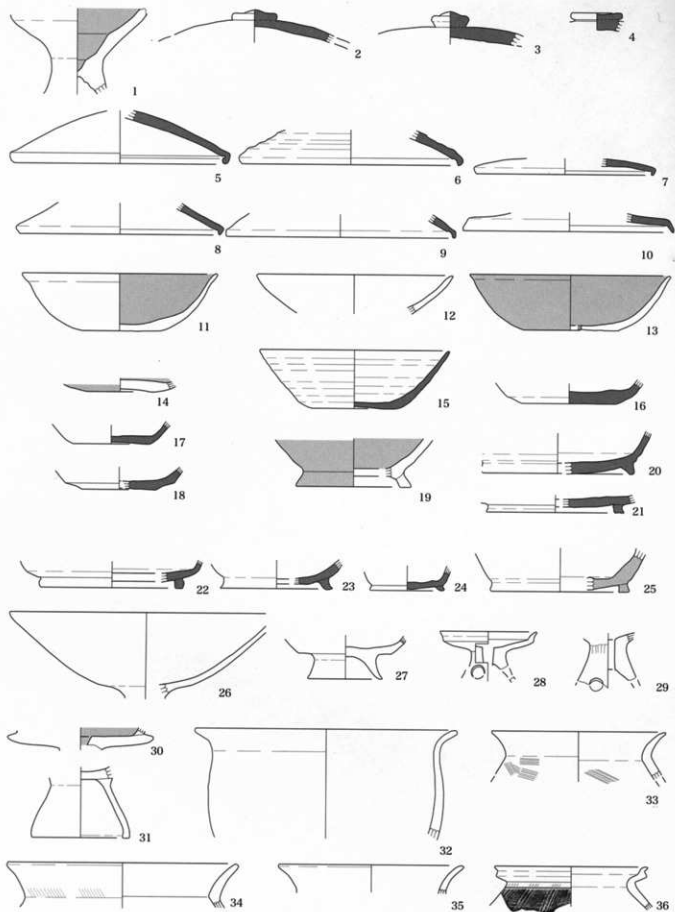


図47 平成24年度出土遺物実測図1 (1/3)

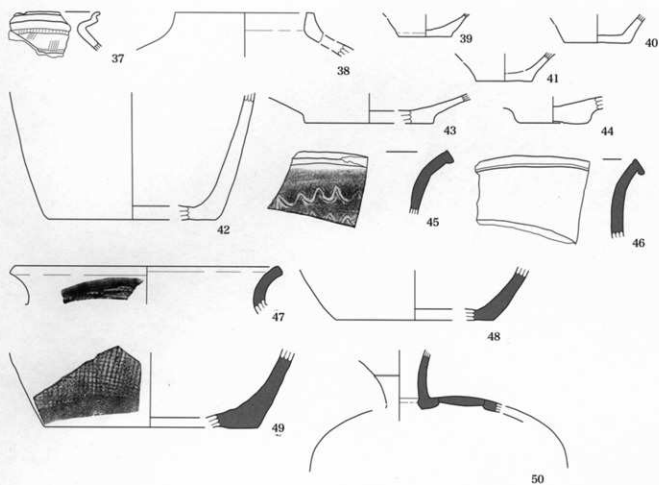


图 48 平成 24 年度出土遺物実測図 2 (1/3)

第4節 出土瓦

1 平成22年度(2010)出土瓦

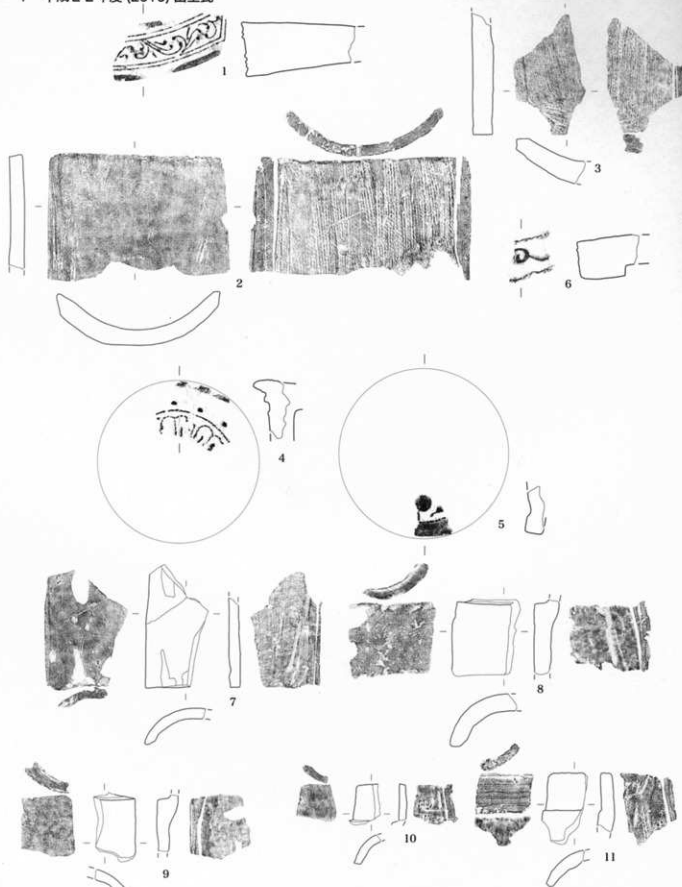


図49 平成22年度出土瓦実測図1

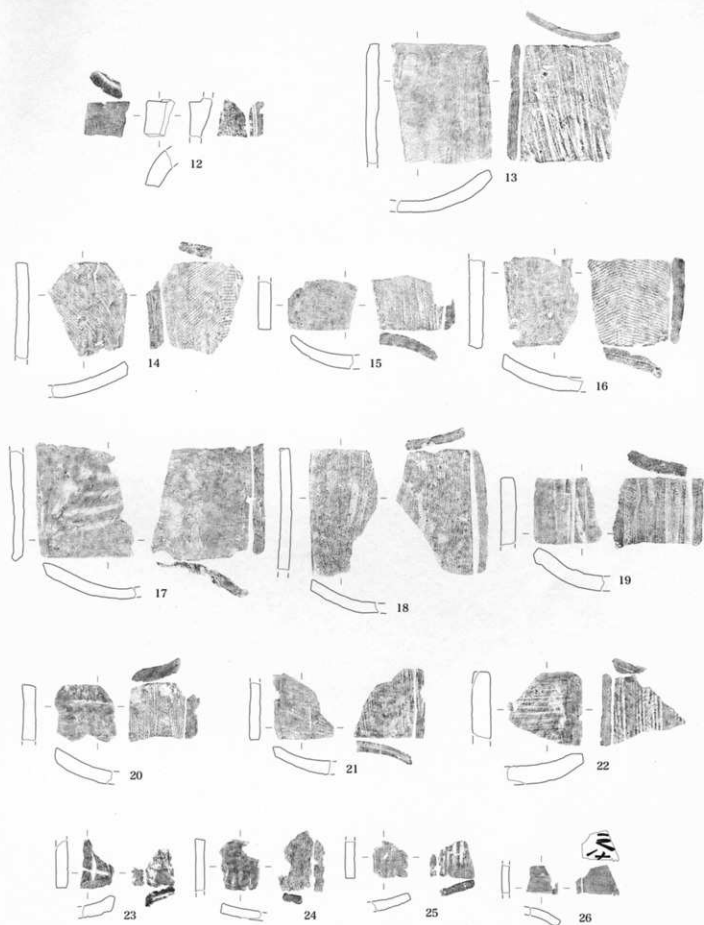


图 50 平成 22 年度出土瓦実測図 2

2 平成23年度(2011)出土瓦

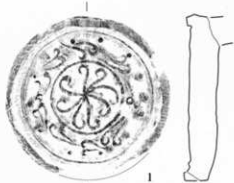


図51 平成23年度出土瓦実測図

3 平成24年度(2012)出土瓦

(1)SX-01 出土

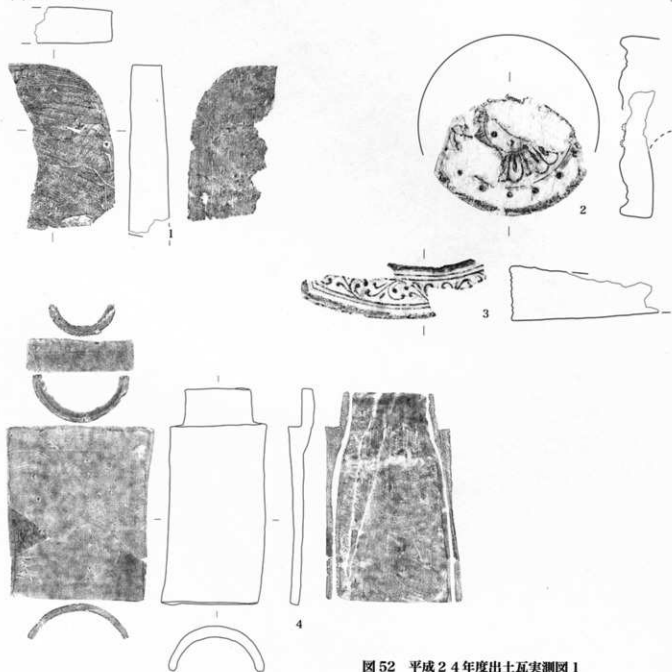


図52 平成24年度出土瓦実測図 1



图 53 平成 24 年度出土瓦実測図 2

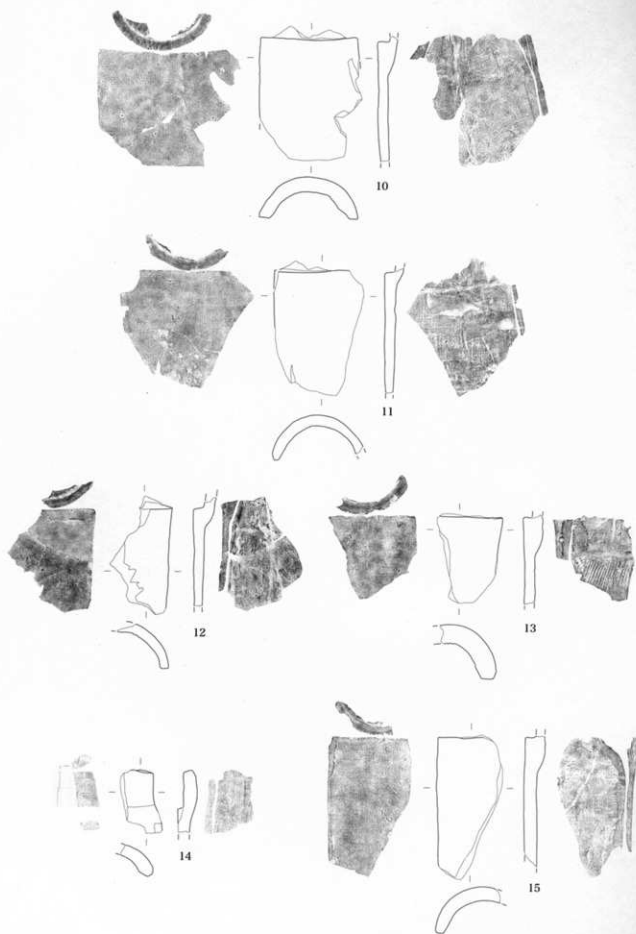


図 54 平成 24 年度出土瓦実測図 3

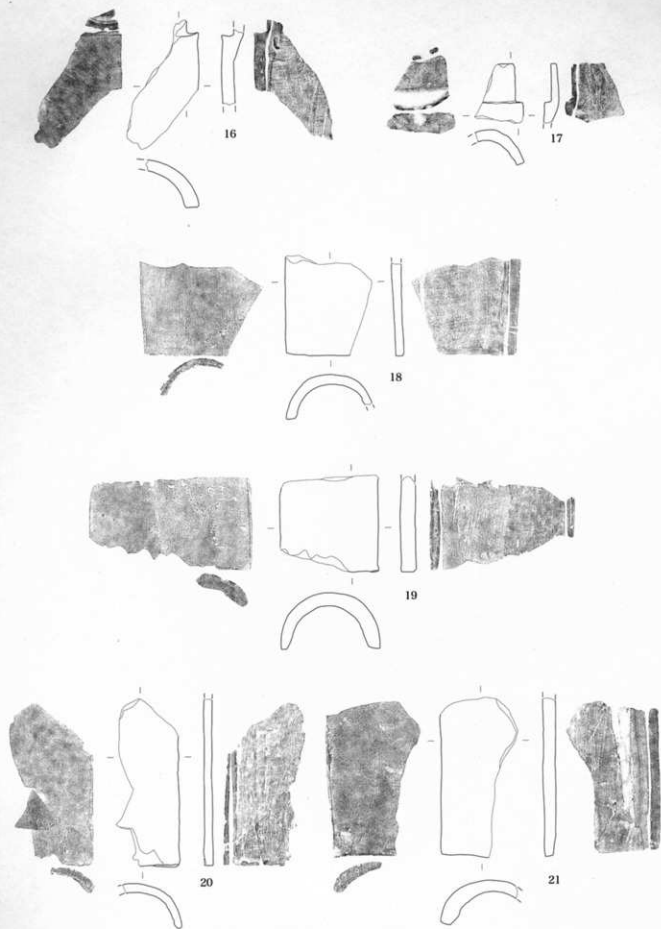


図 55 平成 24 年度出土瓦実測図 4

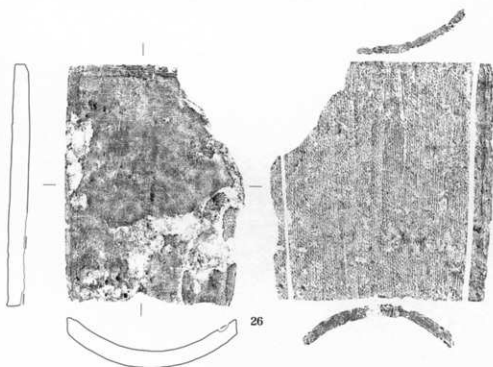
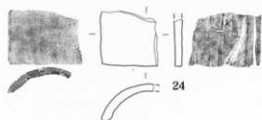
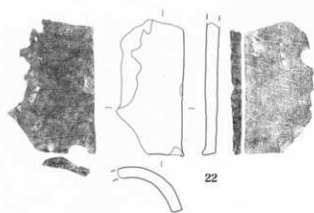


图 56 平成 24 年度出土瓦実測図 5

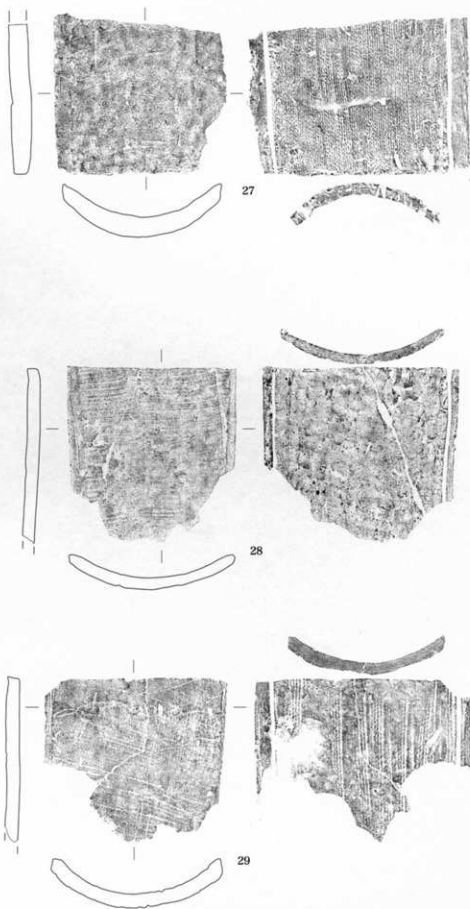
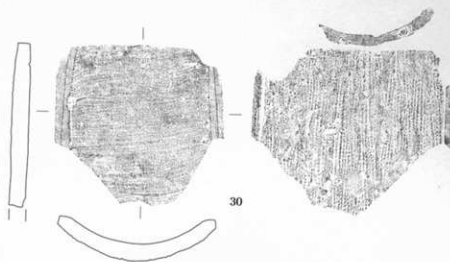
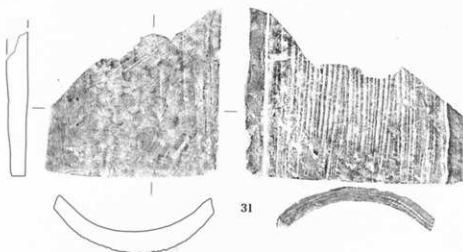


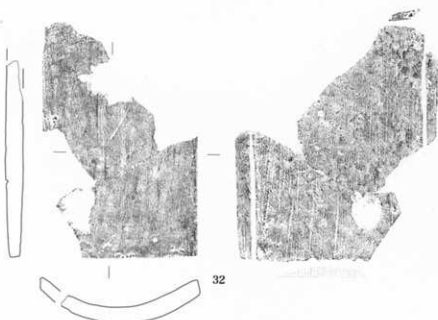
图 57 平成 24 年度出土瓦実測図 6



30



31



32

图 58 平成 24 年度出土瓦実測図 7

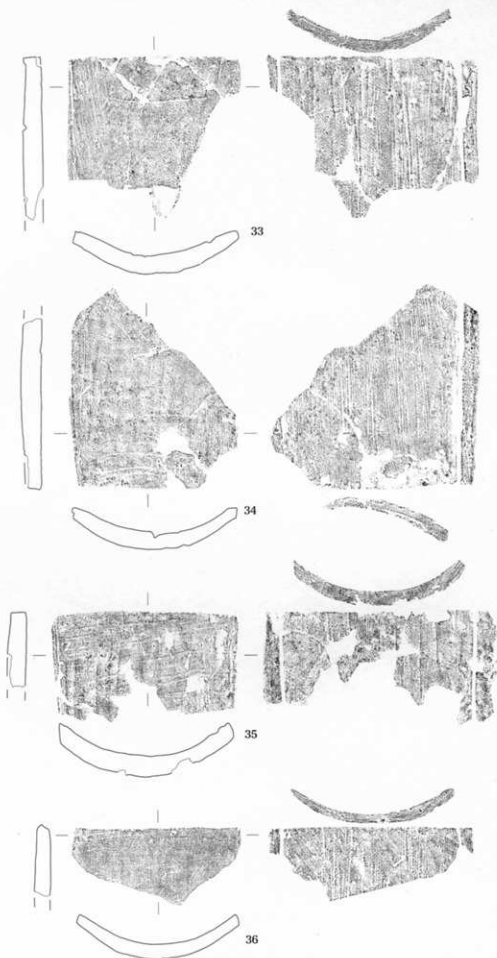


图 59 平成 24 年度出土瓦実測图 8

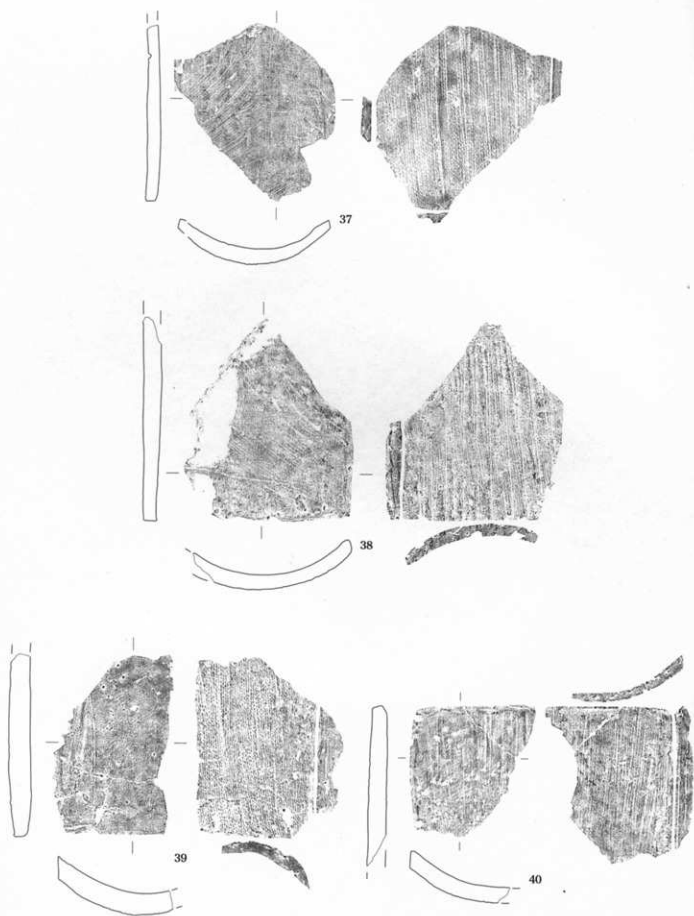


図 60 平成 24 年度出土瓦実測図 9

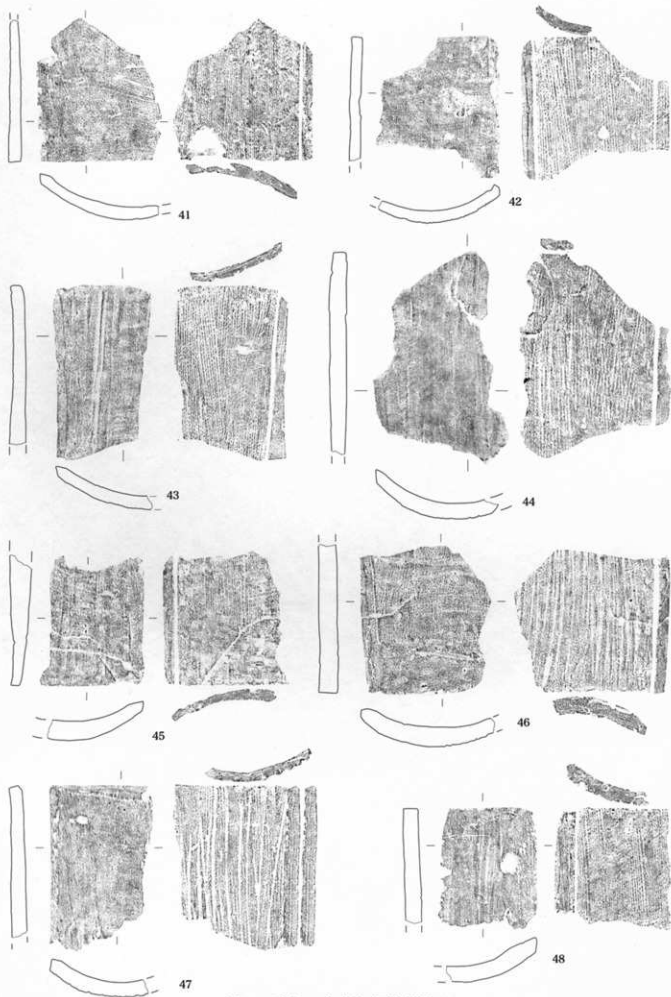


图 61 平成 24 年度出土瓦実測図 10

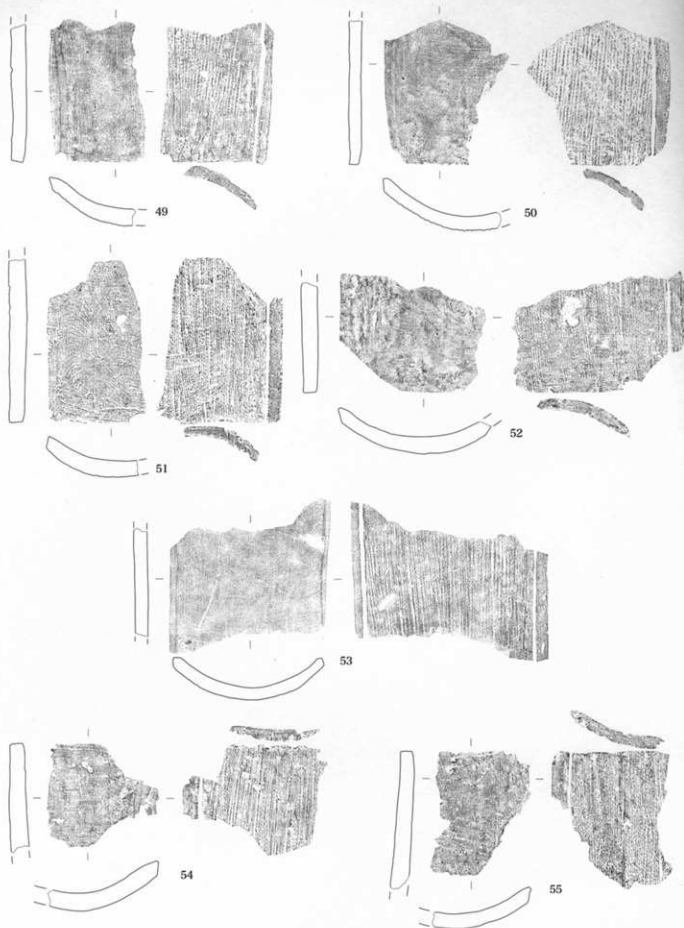


図 62 平成 24 年度出土瓦実測図 11

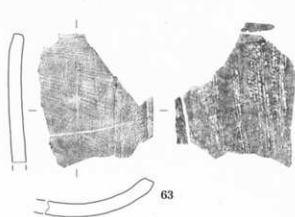
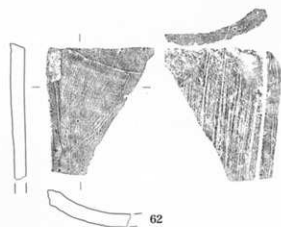
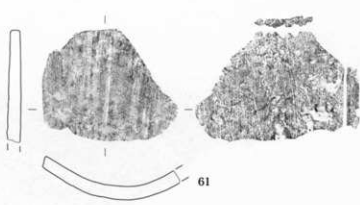
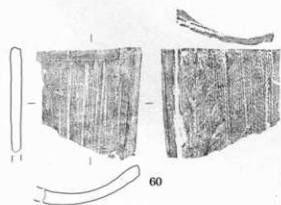
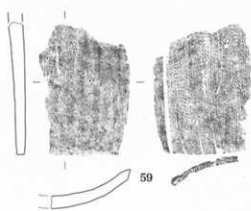
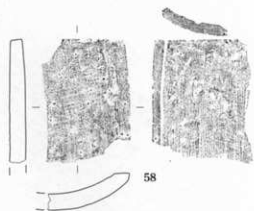
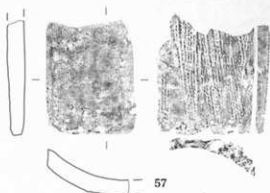
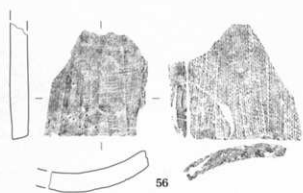


図 63 平成 24 年度出土瓦実測図 12

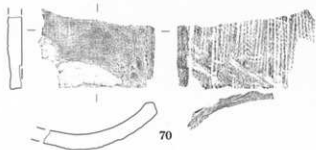
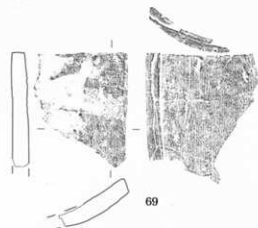
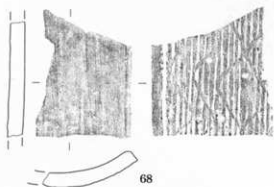
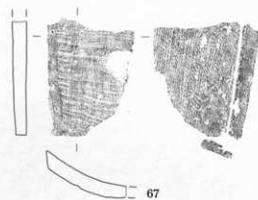
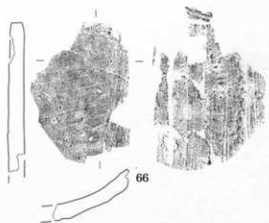
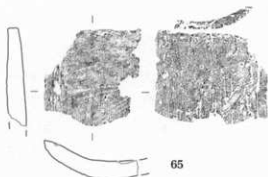
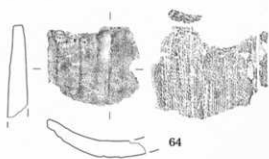


図 64 平成 24 年度出土瓦実測図 13

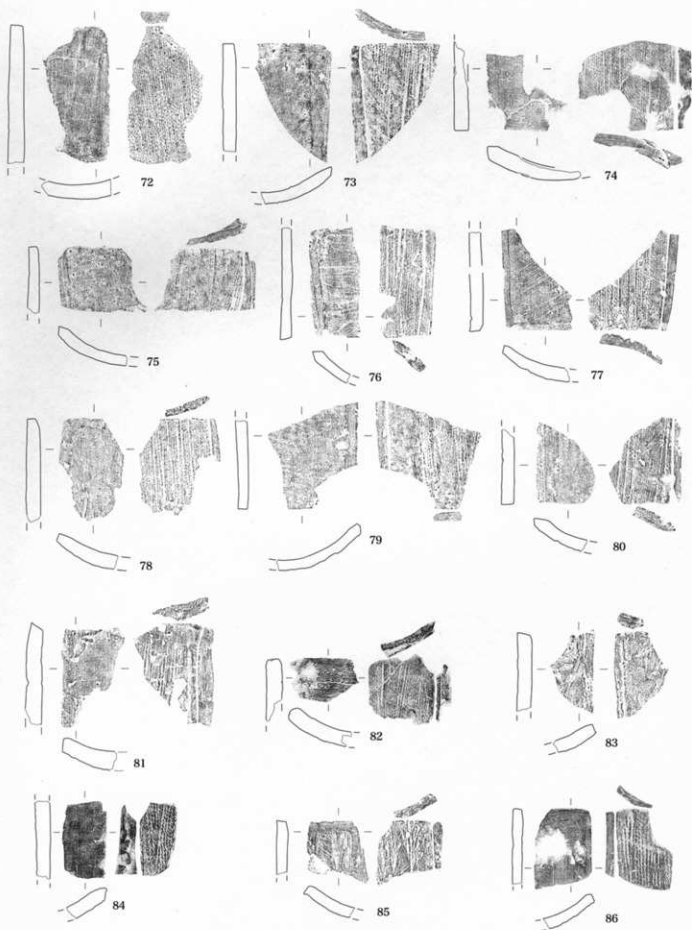
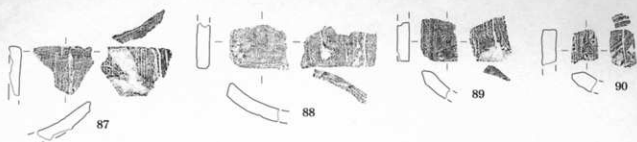
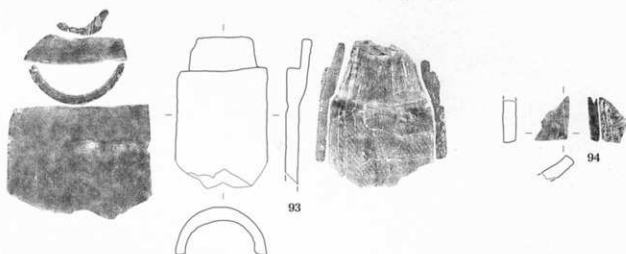
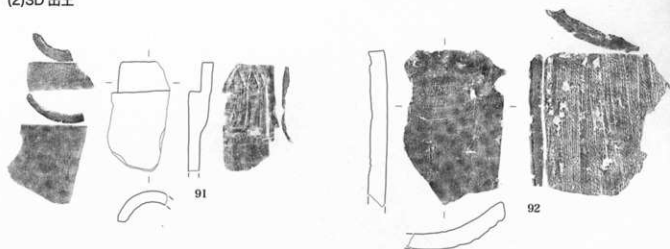


図 65 平成 24 年度出土瓦実測図 14



(2)SD 出土



(3) 遺構外出土

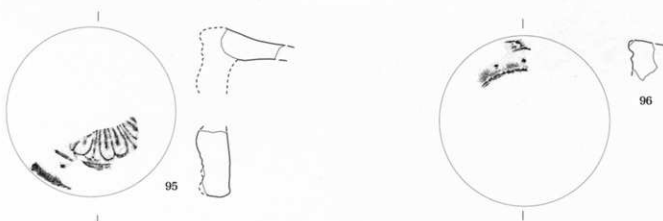


図 66 平成 24 年度出土瓦実測図 15

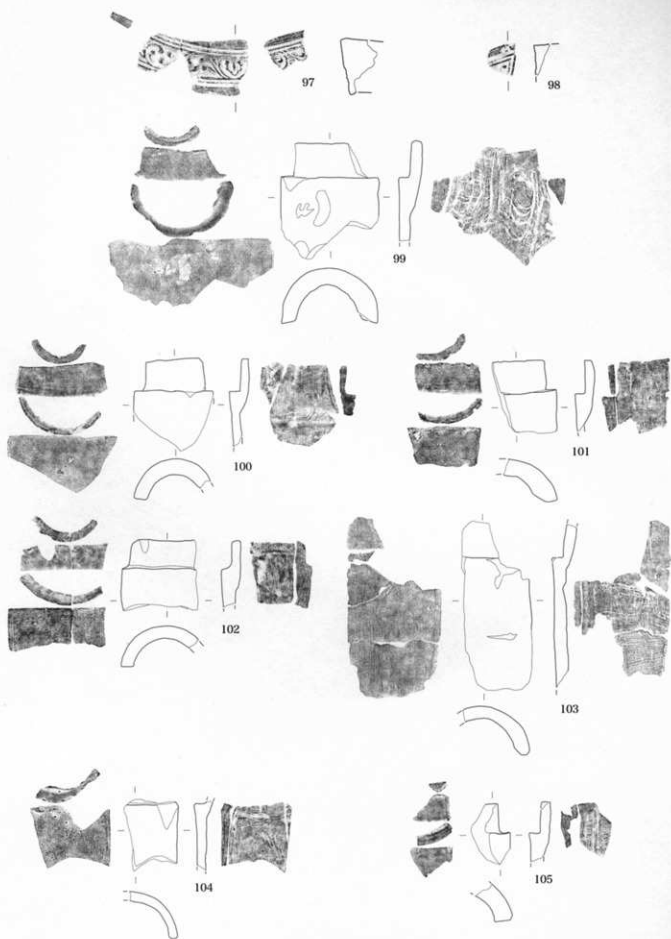


図 67 平成 24 年度出土瓦実測図 16

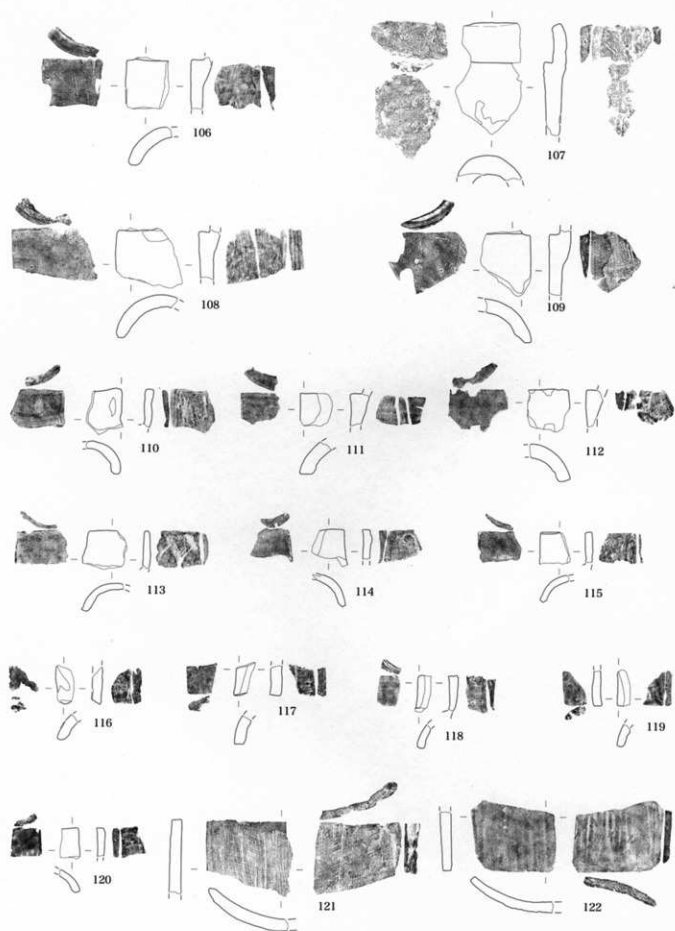


图 68 平成 24 年度出土瓦実測图 17

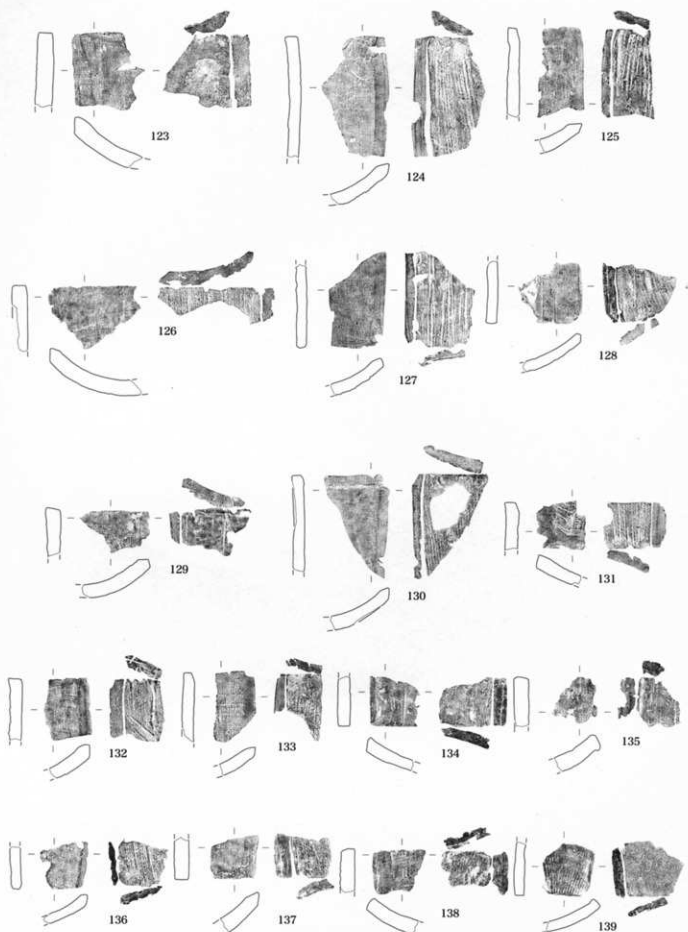


图 69 平成 24 年度出土瓦実測図 18

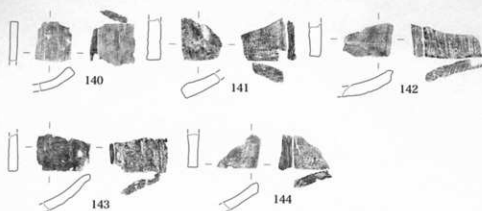
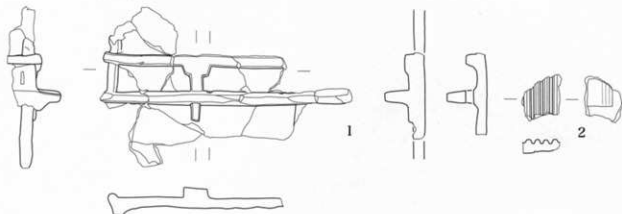


図70 平成24年度出土瓦実測図19

第5節 その他出土遺物

1 瓦塔 (平成24年度出土)



2 古銭 (平成24年度出土)



図71 その他出土遺物実測図

第6節 出土遺物観察表

NO	遺物	数量	口数	重量	形状	出土	位置	外観	内観	成分・形状	外観	内観	備考・特記
1	土師器	1	1	9.5	(12.0)	胴部・底	0.2gの骨、2gの、細砂粒を含む。	良好	7.5x7.7x4.1(±)mm	7.5x7.7x6mm	無で	無で	
2	土師器	1	13.0	4.1	9.0	口縁部	骨、細砂粒を含む。	良好	2.5x7.7x6(±)mm	当	無で	無で	
3	土師器	1	16.2	5.3	5.6	底	0.2gの骨、細砂粒を含む。	良好	2.5x7.5x6.9(±)mm	当	無で	無で	
4	土師器	1	(12.4)	4.3	—	胴部・底	0.2gの骨、細砂粒を含む。	良好	7.5x7.8x6mm	(14.5) 当 (胴部)	無で	無で	
5	土師器	1	—	2.6	(10.0)	胴部・底・胴部・底	細砂粒を含む。	良好	7.5x7.5x6mm	2.5x7.8x6.5mm	無で	無で	
6	土師器	1	(12.2)	2.5	—	胴部・底・胴部・底	細砂粒を含む。	良好	5.5x7.1x6mm	5.5x7.1x6mm	無で	無で	
7	土師器	1	—	2.0	(11.4)	胴部・底・胴部・底	細砂粒を含む。	良好	5.5x7.1x6mm	5.5x7.1x6mm	無で	無で	
8	土師器	1	—	2.0	(12.2)	胴部・底・胴部・底	細砂粒を含む。	良好	5.5x7.1x6mm	5.5x7.1x6mm	無で	無で	
9	土師器	1	—	2.3	(10.0)	胴部・底・胴部・底	細砂粒を含む。	良好	2.5x7.8x6.5mm	2.5x7.8x6.5mm	無で	無で	
10	土師器	1	(10.0)	2.0	4.0	胴部・底・胴部・底	細砂粒を含む。	良好	7.5x7.8x6.5mm	7.5x7.8x6.5mm	無で	無で	
11	土師器	1	(10.0)	1.8	(5.4)	11.4x7.7x4.1(±)mm	骨、細砂粒を含む。	良好	2.5x7.7x6(±)mm	2.5x7.7x6(±)mm	無で	無で	
12	土師器	1	(11.0)	2.8	(7.0)	11.4x7.7x4.1(±)mm	骨、細砂粒を含む。	良好	2.5x7.7x6(±)mm	2.5x7.7x6(±)mm	無で	無で	
13	土師器	1	(11.0)	3.5	—	11.4x7.7x4.1(±)mm	骨、細砂粒を含む。	良好	7.5x7.7x6(±)mm	7.5x7.7x6(±)mm	無で	無で	
14	土師器	1	(8.0)	3.0	(4.8)	11.4x7.7x4.1(±)mm	2gの、細砂粒を含む。	良好	5.5x7.8x6(±)mm	5.5x7.8x6(±)mm	無で	無で	
15	土師器	1	(13.0)	4.5	—	11.4x7.7x4.1(±)mm	骨、細砂粒を含む。	良好	2.5x7.8x6(±)mm	2.5x7.8x6(±)mm	無で	無で	
16	土師器	1	(12.0)	3.3	(5.8)	11.4x7.7x4.1(±)mm	骨、細砂粒を含む。	良好	7.5x7.7x6(±)mm	7.5x7.7x6(±)mm	無で	無で	
17	土師器	1	—	4.1	(8.4)	胴部・底・胴部・底	骨、細砂粒を含む。	良好	2.5x7.7x6(±)mm	2.5x7.7x6(±)mm	無で	無で	
18	土師器	1	(13.4)	5.0	—	11.4x7.7x4.1(±)mm	骨、細砂粒を含む。	良好	2.5x7.7x6(±)mm	2.5x7.7x6(±)mm	無で	無で	
19	土師器	1	(15.4)	4.0	—	11.4x7.7x4.1(±)mm	骨、細砂粒を含む。	良好	2.5x7.7x6(±)mm	2.5x7.7x6(±)mm	無で	無で	
20	土師器	1	(14.0)	3.6	—	11.4x7.7x4.1(±)mm	骨、細砂粒を含む。	良好	2.5x7.7x6(±)mm	2.5x7.7x6(±)mm	無で	無で	
21	土師器	1	(14.2)	4.3	—	11.4x7.7x4.1(±)mm	骨、細砂粒を含む。	良好	5.5x7.8x6(±)mm	5.5x7.8x6(±)mm	無で	無で	
22	土師器	1	—	2.4	6.5	胴部・底・胴部・底	骨、細砂粒を含む。	良好	7.5x7.8x6(±)mm	7.5x7.8x6(±)mm	無で	無で	
23	土師器	1	(14.8)	3.0	(10.4)	11.4x7.7x4.1(±)mm	骨、細砂粒を含む。	良好	5.5x7.8x6(±)mm	5.5x7.8x6(±)mm	無で	無で	
24	土師器	1	(20.4)	6.6	(13.0)	11.4x7.7x4.1(±)mm	骨、細砂粒を含む。	良好	2.5x7.8x6(±)mm	2.5x7.8x6(±)mm	無で	無で	
25	土師器	1	—	2.1	(9.4)	胴部・底・胴部・底	骨、細砂粒を含む。	良好	5.5x7.8x6(±)mm	5.5x7.8x6(±)mm	無で	無で	
26	土師器	1	—	1.6	(5.4)	胴部・底・胴部・底	骨、細砂粒を含む。	良好	10.7x7.7x6(±)mm	10.7x7.7x6(±)mm	無で	無で	
27	土師器	1	—	1.6	(5.4)	胴部・底・胴部・底	骨、細砂粒を含む。	良好	2.5x7.8x6(±)mm	2.5x7.8x6(±)mm	無で	無で	
28	土師器	1	—	7.8	—	胴部・底・胴部・底	骨、細砂粒を含む。	良好	7.5x7.8x6(±)mm	7.5x7.8x6(±)mm	無で	無で	
29	土師器	1	—	4.3	—	胴部・底・胴部・底	骨、細砂粒を含む。	良好	5.5x7.8x6(±)mm	5.5x7.8x6(±)mm	無で	無で	
30	土師器	1	—	1.8	(7.8)	胴部・底・胴部・底	骨、細砂粒を含む。	良好	2.5x7.8x6(±)mm	2.5x7.8x6(±)mm	無で	無で	

表1 信濃国分寺跡出土遺物観察表1

[illegible]

表2 信濃国分寺跡出土遺物觀察表2

[illegible]

表3 信濃国分寺跡出土遺物觀察表3

No	経度	緯度	口数	面積	高所	保存	出土	構造	外観	内装	経緯・形状	外装	内装	経緯・形状	外装	内装	経緯・形状
41	上野	41	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3
42	上野	42	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3
43	上野	43	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3
44	上野	44	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3
45	上野	45	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3
46	上野	46	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3
47	上野	47	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3
48	上野	48	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3
49	上野	49	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3
50	上野	50	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3
51	上野	51	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3
52	上野	52	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3
53	上野	53	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3
54	上野	54	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3
55	上野	55	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3
56	上野	56	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3
57	上野	57	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3
58	上野	58	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3
59	上野	59	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3
60	上野	60	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3
61	上野	61	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3
62	上野	62	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3
63	上野	63	11.6	3.3	0.2	11.6	2.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3

表 4 信濃国分寺跡出土遺物観察表 4

No	種類	数量	口数	面積	高	形状	出土	出土位置	内蔵品	外蔵品	内蔵品・外蔵品	備考・特記
64	土師器	陶	—	2.8	5.9cmφ23		行基、彫刻を含む	10Y87/4にぶい、行基	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	
65	土師器	陶	—	3.5	8.0cm高		行基、25片、彫刻を含む	10Y87/4にぶい、行基 7.5Y86/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	陶器によるもので
66	土師器	陶	—	2.0	7.6cm高		25片、彫刻を含む	10Y87/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	
67	土師器	陶	—	3.0	6.7cm高		彫刻を含む	10Y86/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	
68	土師器	陶	—	2.0	6.9cm高		彫刻を含む	10Y87/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	
69	土師器	陶	—	2.7	6.7cm高		彫刻を含む	10Y87/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	
70	土師器	陶	—	2.2	7.4cm高		彫刻を含む	10Y86/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	
71	土師器	陶	—	2.0	7.4cm高		25片、彫刻を含む	10Y86/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	
72	土師器	陶	—	2.3	6.7cm高		25片、彫刻を含む	10Y87/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	
73	土師器	陶	—	2.2	6.8cm高		彫刻を含む	10Y87/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	
74	土師器	陶	—	2.0	7.6cm高		25片、彫刻を含む	10Y86/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	
75	土師器	陶	—	3.0	6.6cm高		彫刻を含む	10Y87/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	
76	土師器	陶	—	2.3	6.4cm高		彫刻を含む	10Y86/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	
77	土師器	陶	—	2.4	6.7cm高		25片、彫刻を含む	10Y87/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	
78	土師器	陶	—	2.9	6.5cm高		彫刻を含む	10Y86/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	
79	土師器	陶	—	2.4	7.3cm高		10Y86/4にぶい、埋	10Y87/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	
80	土師器	陶	(15.0)	5.8	7.8cm高、2部～最底		彫刻を含む	10Y87/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	陶器によるもので、彫刻は外周 面より上部に埋蔵品に置く
81	土師器	陶	(14.2)	6.0	(7.0) 11cm高、2部～最底1/2		25片、彫刻を含む	10Y86/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	陶器によるもので、彫刻は外周 面より上部に埋蔵品に置く
82	土師器	陶	—	3.2	6.8cm高		彫刻を含む	10Y86/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	陶器によるもので、彫刻は外周 面より上部に埋蔵品に置く
83	土師器	陶	—	2.6	7.0cm高		行基、25片、彫刻を含む	10Y86/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	陶器によるもので、彫刻は外周 面より上部に埋蔵品に置く
84	土師器	陶	—	1.5	7.0cm高		25片、彫刻を含む	10Y87/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	陶器によるもので、彫刻は外周 面より上部に埋蔵品に置く
85	土師器	陶	—	1.6	5.8cm高		25片、彫刻を含む	10Y87/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	陶器によるもので、彫刻は外周 面より上部に埋蔵品に置く
86	土師器	陶	—	2.0	5.7cm高		25片、彫刻を含む	10Y87/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	陶器によるもので、彫刻は外周 面より上部に埋蔵品に置く
87	土師器	陶	—	1.9	5.7cm高		25片、彫刻を含む	10Y87/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	陶器によるもので、彫刻は外周 面より上部に埋蔵品に置く
88	土師器	土師	—	8.9	8.0cm高		行基、25片、彫刻を含む	10Y86/4にぶい、埋	彫刻通身 付け付	(15Y87/4) 彫刻の側で 埋蔵品	陶で	陶器によるもので、彫刻は外周 面より上部に埋蔵品に置く

表5 信濃国分寺跡出土遺物観察表5

[illegible]

No	種類	数量	口数	面積	形状	構造	土質	用途	内蔵品	用途・状態	外蔵品	内蔵品	備考・特記
5	土蔵	1	—	4.2	(17.0)	大井戸一軒型1/4	行基、彫刻を有	良砂	N5/K	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
6	土蔵	1	—	2.8	(17.4)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	N5/K	土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
7	土蔵	1	—	1.3	(14.2)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	2.5Y4/20K16	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
8	土蔵	1	—	2.4	(16.0)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	10Y5/25K16	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
9	土蔵	1	—	1.8	(18.2)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	10Y5/25K16	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
10	土蔵	1	—	1.5	(17.0)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	2.5Y4/20K16	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
11	土蔵	1	—	4.6	(15.4)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	5Y8/6/10	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
12	土蔵	1	—	3.1	(15.8)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	7.5Y8/11	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
13	土蔵	1	—	4.4	(15.2)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	10Y5/25K16	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
14	土蔵	1	—	0.9	5.6	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	7.5Y8/11	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
15	土蔵	1	—	4.3	7.0	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	5Y7/20K16	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
16	土蔵	1	—	1.6	(7.6)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	2.5Y4/20K16	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
17	土蔵	1	—	1.5	(6.2)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	N5/K	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
18	土蔵	1	—	1.8	(6.0)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	5Y8/11	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
19	土蔵	1	—	3.0	(9.2)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	N2/K	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
20	土蔵	1	—	3.2	(12.0)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	N5/K	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
21	土蔵	1	—	1.4	(11.0)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	N5/K	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
22	土蔵	1	—	2.1	(11.4)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	N5/K	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
23	土蔵	1	—	2.3	(9.0)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	5Y8/11	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
24	土蔵	1	—	2.0	(6.0)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	N5/K	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
25	土蔵	1	—	3.5	(11.0)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	N5/K	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
26	土蔵	1	—	6.8	(22.8)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	2.5Y4/20K16	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
27	土蔵	1	—	3	(6.0)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	7.5Y8/11	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
28	土蔵	1	—	7.8	4.0	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	5Y8/11	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
29	土蔵	1	—	4.3	(11.6)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	5Y8/11	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
30	土蔵	1	—	1.7	(11.6)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	5Y8/11	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	
31	土蔵	1	—	5.7	(17.8)	大井戸一軒型一層	行基、彫刻を有	良砂	2.5Y4/20K16	張りのある土蔵の一角に成す土蔵に変わる	土蔵による土蔵	土蔵による土蔵	

表7 信濃国寺跡出土土蔵観察表7

[illegible]

平成22年度												備考・特記	
No	種別	地蔵	最大長	最大幅	残存	胎土	凸面色調	凹面色調	凸面調	凹面調	側面調	修正記号	備考・特記
1	軒平瓦	還元表焼成	14	14.5	5.8	瓦割1/2	白色砂粒を含む	10YR1/711	10YR1/711	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
2	平瓦	還元表焼成	20.2	20.0	3.0	1/2	褐色・白色砂粒を含む	2.5Y5/28灰黄	2.5Y5/28灰黄	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
3	平瓦	還元表焼成	19.4	10.9	3.5	1/2	白色砂粒を含む	10YR6/4に白・青	10YR6/4に白・青	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
4	軒平瓦	還元表焼成	(17.0)			瓦割1/2	褐色・白色砂粒を含む	10YR6/4に白・青	10YR6/4に白・青	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
5	軒平瓦	還元表焼成	(18.0)			瓦割1/2	褐色・白色砂粒を含む	2.5YR5/4に白・青	2.5YR5/4に白・青	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
6	軒平瓦	還元表焼成	9.5	8.5	4.1	瓦割1/2	白色砂粒を含む	2.5Y5/28灰黄	2.5Y5/28灰黄	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
7	丸瓦	還元表焼成	20.0	10.0	1.7	割部1/2	褐色砂粒を含む	5YR4/3に白・青	5YR4/3に白・青	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
8	丸瓦	還元表焼成	12.2	10.7	4.0	割部1/2	褐色砂粒を含む	7.5YR6/4に白・青	7.5YR6/4に白・青	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
9	丸瓦	還元表焼成	11.0	6.7	3.2	割部1/2	褐色砂粒を含む	2.5Y3/22土黄	2.5Y3/22土黄	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
10	丸瓦	還元表焼成	6.5	4.8	1.2	1/2	白色砂粒を含む	7.5Y2/1土	7.5Y2/1土	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
11	丸瓦	還元表焼成	11.4	6.3	2.6	1/2	白色砂粒を含む	2.5YR6/6に白・青	2.5YR6/6に白・青	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
12	丸瓦	還元表焼成	6.0	4.5	3.6	割部1/2	褐色砂粒を含む	2.5YR5/4に白・青	2.5YR5/4に白・青	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
13	平瓦	還元表焼成	19.5	14.8	1.8	1/2	褐色砂粒を含む	7.5YR4/2灰黄	7.5YR4/2灰黄	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
14	平瓦	還元表焼成	15.2	11.8	2.0	割部1/2	褐色・白色砂粒を含む	10YR5/2灰黄	10YR5/2灰黄	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
15	平瓦	還元表焼成	7.6	10.2	2.0	割部1/2	褐色砂粒、石を含む	7.5YR4/2灰黄	7.5YR4/2灰黄	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
16	平瓦	還元表焼成	14.0	13.0	2.3	割部1/2	褐色・白色砂粒を含む	10YR3/2土黄	10YR3/2土黄	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
17	平瓦	還元表焼成	17.0	14.9	2.0	割部1/2	褐色・白色砂粒を含む	10YR4/1灰黄	10YR4/1灰黄	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
18	平瓦	還元表焼成	19.4	10.3	1.7	1/2	白色砂粒を含む	10YR4/1灰黄	10YR4/1灰黄	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
19	平瓦	還元表焼成	11.1	11.7	2.3	割部1/2	褐色・白色砂粒を含む	7.5YR4/3土	7.5YR4/3土	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
20	平瓦	還元表焼成	8.8	9.8	1.9	1/2	褐色・白色砂粒を含む	5Y2/1土	5Y2/1土	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
21	平瓦	還元表焼成	11.0	9.0	1.6	割部1/2	褐色砂粒を含む	10YR5/3に白・青	10YR5/3に白・青	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
22	平瓦	還元表焼成	12.0	12.1	2.9	1/2	褐色・白色砂粒を含む	10YR5/2灰黄	10YR5/2灰黄	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
23	平瓦	還元表焼成	7.4	5.2	1.9	割部1/2	褐色砂粒を含む	2.5Y5/28灰黄	2.5Y5/28灰黄	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
24	平瓦	還元表焼成	8.3	6.5	1.4	割部1/2	褐色・白色砂粒を含む	5YR6/6に白・青	5YR6/6に白・青	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記
25	平瓦	還元表焼成	5.8	6.0	1.5	1/2	白色砂粒を含む	5Y5/2灰黄	5Y5/2灰黄	瓦割で	瓦割で	修正記号	備考・特記

表9 信濃国分寺跡出土瓦観察表1

No	種類	形状	最大径	最大幅	最大厚	焼存	胎土	凸面色調	凹面色調	凸面調整	凹面調整	側面調整	備考・特記
26	平瓦	酸化炭素成	4.6	5	1.2	体一部	褐色砂粒を含む	7.5YR5/6明褐	7.5YR5/6明褐	刷毛撫で	凹面撫で	凹面、凸面側面から面取る	凹面、凸面側面から面取る
平成23年度													
1	軒丸瓦	還元炭素成	17.6		3.0	瓦口面はびく	白色砂粒を含む	2.5Y5/2暗灰黄	2.5Y5/2暗灰黄				備考・特記
平成24年度													
1	丸瓦	還元炭素成	26.5	13.5	6.1		白色砂粒を含む	10YR4/1黄灰	10YR4/1黄灰	刷毛撫で			調整
2	軒丸瓦	還元炭素成	(19.0)		3.5	瓦口面	褐色砂粒、石炭を含む	10YR3/1黒褐	10YR3/1黒褐				八景焼付黒文
3	軒平瓦	還元炭素成	18.0	24.0	5.8	瓦口面・体部	白色砂粒を含む	10YR5/1黒褐	10YR5/2灰黄褐	黒磨り			凹面側から面取る
4	丸瓦	還元炭素成	34.2	15.1	3.6	焼存	褐・白色砂粒を含む	5YR7/1灰	5YR7/2灰・5/4に ぶい赤褐	黒磨り	無で	赤目 玉縁上部調整	凹面側から面取る
5	丸瓦	還元炭素成	26.1	14.7	3.3	玉縁・側部	褐色、白色砂粒を含む	10YR7/1黒	10YR7/2灰・5/4に ぶい赤褐	黒磨り	無で	赤目	凹面側から面取る
6	丸瓦	還元炭素成	20.3	15.2	3	玉縁・側部	白色砂粒、石炭を含む	2.5Y3/1黒褐	2.5Y3/1黒褐	黒磨り		赤目 玉縁上部調整	凹面、凸面側面から面取る
7	丸瓦	還元炭素成	17.0	16.3	2.3	玉縁・側部	褐色砂粒、石炭を含む	5YR2/5灰・5/4に ぶい赤褐	5YR2/5灰・5/4に ぶい赤褐	黒磨り		赤目	凹面側から面取る
8	丸瓦	還元炭素成	17.0	9.5	3.0	玉縁・側部	白色砂粒を含む	2.5Y5/2暗灰黄	2.5Y5/2暗灰黄	黒磨り	無で	赤目 玉縁上部調整	凹面、凸面側面から面取る
9	丸瓦	還元炭素成	25.3	13.1	3.4	玉縁・側部	褐色砂粒、石炭を含む	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	黒磨り	無で	赤目	凹面側から面取る
10	丸瓦	還元炭素成	21.0	15.9	3.1	玉縁・側部	褐色砂粒、石炭を含む	10YR2/1黒	10YR2/1黒	刷毛調整	無で	赤目	凹面側から面取る
11	丸瓦	還元炭素成	21.0	14.0	2.9	側部広端	褐色砂粒、石炭を含む	10YR1/7/1黒	10YR1/7/1黒	刷毛撫で		赤目	凹面側から面取る
12	丸瓦	還元炭素成	18.7	9.5	3.3	側部広端	褐色砂粒、石炭を含む	10YR4/1黄灰	10YR3/1黒褐	黒磨り	無で	赤目	凹面、凸面側面から面取る
13	丸瓦	還元炭素成	14.0	9.0	3.0	側部広端	褐色砂粒、石炭を含む	10YR3/1黒褐	10YR3/1黒褐	黒磨り	無で	赤目	凹面、凸面側面から面取る
14	丸瓦	還元炭素成	11.0	5.0	2.2	玉縁・側部	褐色砂粒、石炭を含む	7.5YR2/1黒	7.5YR2/1黒	黒磨り	無で	赤目 玉縁上部調整	凹面側から面取る
15	丸瓦	還元炭素成	22.5	10.2	3.4	側部	褐色砂粒、石炭を含む	10YR4/1黄灰	10YR4/1黄灰	刷毛撫で	赤目 上部調整	赤目	凹面、凸面側面から面取る
16	丸瓦	還元炭素成	20.2	11.5	3.5	玉縁・側部	褐色砂粒、石炭を含む	2.5Y4/1黄灰	2.5Y4/1黄灰	黒磨り	無で	赤目	凹面、凸面側面から面取る
17	丸瓦	還元炭素成	9.5	7.7	2.2	玉縁・側部	褐色砂粒を含む	10YR6/2灰黄褐	10YR6/2灰黄褐	黒磨り	無で	赤目	凹面、凸面側面から面取る
18	丸瓦	還元炭素成	14.5	13.6	1.5	側部広端	褐色砂粒を含む	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	黒磨り	無で	赤目 玉縁上部調整	凹面、凸面側面から面取る
19	丸瓦	還元炭素成	15.0	15.7	2.5	側部広端	褐色砂粒、石炭を含む	10YR2/1黒	10YR2/1黒	黒磨り	無で	赤目	凹面側から面取る、凹面側から広く面取る
20	丸瓦	還元炭素成	26.2	9.3	1.2	側部広端	褐色砂粒、石炭を含む	10YR2/1黒	10YR2/1黒	刷毛撫で		赤目	凹面、凸面側面から面取る

表10 信濃国分寺跡出土瓦観察表2

No	種類	構成	最大長	最大幅	層入厚	発序	胎土	凸面色調	凹面色調	凸面調整	凹面調整	側面調整	備考・特記
21	丸瓦	還元炭焼成	25.0	12.2	1.9	調整炭焼	白色砂粒を含む	5Y6/1灰	5Y6/1灰	黒色	赤口 黒面調整層で	凸面側から狭く、凹面側から広く面取る	
22	丸瓦	還元炭焼成	21.2	10.4	1.8	調整炭焼	褐色砂粒、石灰を含む	7.5YR6/3にぶい、褐色	7.5YR6/3にぶい、褐色	黒色調整層	赤口	凹面側から面取る	
23	丸瓦	還元炭焼成	23.3	7.8	1.7	調整炭焼	褐色砂粒を含む	10YR6/4にぶい、褐色	10YR7/2にぶい、褐色	黒色調整層	赤口	凹面、凸面両面側から面取る	
24	丸瓦	還元炭焼成	8.6	8.7	1.4	調整炭焼	白色砂粒、石灰を含む	2.5Y4/2褐色	2.5Y4/2褐色	黒色調整層	赤口	凹面、凸面両面側から面取る	
25	丸瓦	還元炭焼成	6.3	10.5	1.9	調整炭焼	褐色、白色砂粒を含む	5Y6/2灰オリーブ	5Y6/2灰オリーブ	黒色	赤口 黒面調整層で	凹面、凸面両面側から狭く面取る	
26	平瓦	還元炭焼成	38.1	26.5	2.8	6/1欠	褐色砂粒、石灰を含む	10YR7/3にぶい、褐色	10YR7/3にぶい、褐色	黒色調整層	赤口 黒面調整層で	凹面側から面取る	
27	平瓦	還元炭焼成	25.5	25.5	3.2	調整炭焼	白色砂粒、石灰を含む	2.5Y5/4褐色	2.5Y5/4褐色	黒色調整層	赤口 黒面調整層で	凹面側から面取る	
28	平瓦	還元炭焼成	38.5	38.0	2.0	調整炭焼	白色砂粒、黒母を含む	N2/黒	N2/黒	黒色調整層	赤口 黒面調整層で	凹面側から面取る	
29	平瓦	還元炭焼成	25.5	26.4	2.3	調整炭焼	褐色砂粒を含む	10YR5/3にぶい、褐色	10YR7/3にぶい、褐色	黒色調整層	赤口 黒面調整層で	凹面側から面取る	
30	平瓦	還元炭焼成	27.3	25.0	2.7	調整炭焼	褐色砂粒、石灰を含む	10YR5/3にぶい、褐色	10YR5/3にぶい、褐色	黒色調整層	赤口 黒面調整層で	凹面側から面取る	
31	平瓦	還元炭焼成	26.8	25.0	3.2	調整炭焼	褐色砂粒、石灰を含む	N4/灰	N4/灰	黒色調整層	赤口 黒面調整層で	凹面側から面取る	
32	平瓦	還元炭焼成	38.0	24.8	2.8	調整炭焼	褐色砂粒、石灰を含む	N3/褐色	N3/褐色	黒色調整層	赤口 黒面調整層で	凹面側から面取る	
33	平瓦	還元炭焼成	26.0	26.7	3.1	調整炭焼	褐色を多量に含む	10YR7/1灰白	10YR7/4にぶい、褐色	黒色調整層	赤口 黒面調整層で	凹面側から面取る	
34	平瓦	還元炭焼成	32.3	26.7	3.2	調整炭焼	0.5~1.5の黒、灰色砂粒を含む	10YR4/2灰褐色	10YR4/2灰褐色	黒色調整層	赤口 黒面調整層で	凹面側から面取る	
35	平瓦	還元炭焼成	11.5	27.0	3.2	調整炭焼	褐色砂粒、石灰を含む	10YR1/7/黒	10YR1/7/黒	黒色調整層	赤口 黒面調整層で	凹面側から面取る	
36	平瓦	還元炭焼成	11.2	15.8	2.3	調整炭焼	褐色、白色砂粒を含む	10YR6/3にぶい、褐色	N4/灰	黒色調整層	赤口 黒面調整層で	凹面側から面取る	
37	平瓦	還元炭焼成	30.0	23.7	2.3	調整炭焼	褐色砂粒を含む	10YR4/2灰褐色	10YR5/1褐色	黒色調整層	赤口 黒面調整層で	凹面側から面取る	
38	平瓦	還元炭焼成	32.0	25.3	2.8	調整炭焼	褐色砂粒、石灰を含む	10YR6/3にぶい、褐色	10YR6/3にぶい、褐色	黒色調整層	赤口 黒面調整層で	凹面側から面取る	
39	平瓦	還元炭焼成	29.0	19.7	3.4	調整炭焼	褐色、白色砂粒を含む	10YR6/4にぶい、褐色	10YR6/4にぶい、褐色	黒色調整層	赤口 黒面調整層で	凹面側から面取る	
40	平瓦	還元炭焼成	26.0	19.5	2.8	調整炭焼	0.5~1.0の黒、褐色砂粒を含む	10YR6/3にぶい、褐色	10YR6/3にぶい、褐色	黒色調整層	赤口 黒面調整層で	凹面側から面取る	
41	平瓦	還元炭焼成	22.8	19.9	2.1	調整炭焼	褐色、白色砂粒を含む	10YR6/1褐色	10YR6/1褐色	黒色調整層	赤口 黒面調整層で	凹面側から面取る	
42	平瓦	還元炭焼成	23.4	19.3	1.8	調整炭焼	褐色、白色砂粒を含む	10YR6/4にぶい、褐色	10YR6/4にぶい、褐色	黒色調整層	赤口 黒面調整層で	凹面側から面取る	

表11 信濃国分寺跡出土瓦観察表3

No	種類	形状	最大長	最大幅	最大厚	残存	胎土	凸面色調	凹面色調	凸面調整	凹面調整	備考・特記
43	平瓦	酸化表地成	25.3	15.0	2.0 広縁部	褐色砂粒、石灰を含む	IOYR7/4にぶい黄褐色	IOYR7/4にぶい黄褐色	IOYR7/4にぶい黄褐色	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	
44	平瓦	還元表地成	32.5	20.0	2.3 広縁部	褐色・白色砂粒を含む	N3/暗灰	N3/暗灰	N3/暗灰	今日	凹面側から面取る	
45	平瓦	酸化表地成	22.0	17.3	3.2 狭縁部	褐色砂粒、石灰を含む	IOYR5/1黄灰～6/1灰黄褐色	IOYR6/4にぶい黄褐色	IOYR6/4にぶい黄褐色	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	
46	平瓦	還元表地成	23.8	21.0	3.1 狭縁部	褐色・褐色砂粒、石灰を含む	N5/灰～N 3/黄灰	N5/灰～N 3/黄灰	N5/灰～N 3/黄灰	今日	凹面側から面取る	
47	平瓦	酸化表地成	26.5	17.7	2.5 広縁部	褐色砂粒、石灰を含む	IOYR7/3にぶい黄褐色	IOYR7/3にぶい黄褐色	IOYR7/3にぶい黄褐色	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	
48	平瓦	酸化表地成	19.8	16.1	2.9 広縁部	1.5の礫、灰付を含む	N2/黒	N2/黒	N2/黒	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	
49	平瓦	還元表地成	22.8	15.3	2.7 狭縁部	白色砂粒を含む	IOYR7/3にぶい黄褐色	IOYR7/3にぶい黄褐色	IOYR7/3にぶい黄褐色	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	
50	平瓦	酸化表地成	23.4	19.0	2.3 狭縁部	褐色砂粒、石灰を含む	N4/灰	N4/灰	N4/灰	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	
51	平瓦	還元表地成	27.2	16.2	2.7 狭縁部	褐色・白色砂粒を含む	IOYR6/4にぶい黄褐色	IOYR7/3にぶい黄褐色	IOYR7/3にぶい黄褐色	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	
52	平瓦	酸化表地成	17.0	23.5	2.8 狭縁部	褐色砂粒を含む	IOYR4/4黄～3/1黒褐色	IOYR4/4黄～3/1黒褐色	IOYR4/4黄～3/1黒褐色	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	
53	平瓦	酸化表地成	21.5	24.0	2.0 狭縁部	褐色・白色砂粒を含む	IOYR7/3にぶい黄褐色	IOYR7/3にぶい黄褐色	IOYR7/3にぶい黄褐色	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	
54	平瓦	酸化表地成	17.8	18.8	2.8 広縁部	1.0～1.3の褐色礫を含む	IOYR7/3にぶい黄褐色	IOYR7/3にぶい黄褐色	IOYR7/3にぶい黄褐色	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	
55	平瓦	酸化表地成	21.8	15.5	2.7 広縁部	白色砂粒、石灰を含む	IOYR7/2にぶい黄褐色	IOYR7/2にぶい黄褐色	IOYR7/2にぶい黄褐色	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	
56	平瓦	酸化表地成	18.5	17.5	3.0 狭縁部	褐色砂粒、石灰を含む	IOYR7/3にぶい黄褐色	IOYR7/3にぶい黄褐色	IOYR7/3にぶい黄褐色	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	
57	平瓦	還元表地成	18.0	13.5	2.8 狭縁部	白色砂粒、石灰を含む	N3/暗灰	N3/暗灰	N3/暗灰	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	
58	平瓦	酸化表地成	20.3	15.0	2.6 広縁部	0.5～0.8の礫、石灰を含む	7.5YR4/2灰黄～6/4にぶい黄褐色	7.5YR4/2灰黄褐色	7.5YR4/2灰黄褐色	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	
59	平瓦	酸化表地成	21.0	14.5	2.3 狭縁部	白色砂粒、石灰を含む	IOYR6/3にぶい黄褐色	IOYR6/3にぶい黄褐色	IOYR6/3にぶい黄褐色	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	
60	平瓦	還元表地成	18.0	16.0	2.1 広縁部	褐色砂粒、石灰を含む	N3/暗灰	N3/暗灰	N3/暗灰	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	
61	平瓦	酸化表地成	18.0	21.0	2.1 広縁部	褐色砂粒、石灰を含む	IOYR5/3にぶい黄褐色	IOYR5/3にぶい黄褐色	IOYR5/3にぶい黄褐色	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	
62	平瓦	酸化表地成	21.5	13.0	2.3 広縁部	褐色砂粒、石灰を含む	IOYR5/2灰黄褐色	IOYR5/2灰黄褐色	IOYR5/2灰黄褐色	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	
63	平瓦	還元表地成	21.5	17.0	2.1 広縁部	褐色砂粒、石灰を含む	2.5Y6/1黄灰	2.5Y6/1黄灰	2.5Y6/1黄灰	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	
64	平瓦	酸化表地成	15.1	16.2	3.1 広縁部	褐色・白色砂粒を含む	IOYR6/1黄灰	IOYR6/1黄灰	IOYR6/1黄灰	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	
65	平瓦	還元表地成	16.0	16.0	3.0 広縁部	0.5～1.5の礫を含む	2.5Y6/2灰黄褐色	2.5Y6/2灰黄褐色	2.5Y6/2灰黄褐色	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	
66	平瓦	酸化表地成	23.5	15.5	2.5 広縁部	褐色・白色砂粒、石灰を含む	7.5YR6/3にぶい黄褐色	7.5YR6/3にぶい黄褐色	7.5YR6/3にぶい黄褐色	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	
67	平瓦	還元表地成	18.0	13.8	2.2 狭縁部	褐色砂粒、石灰を含む	7.5YR3/1黒褐色	7.5YR4/2灰黄褐色	7.5YR4/2灰黄褐色	今日	凹面側調整で凹面側から面取る	

表 12 信濃国分寺跡出土瓦観察表 4

No	観音	塔成	部入長	最大幅	残存	胎土	凸面位置	凹面位置	凸面位置	凹面位置	断面位置	断面位置	備考・特記
68	平瓦	焼化灰焼成	20.5	16.8	2.3 狭端欠	陶・白色砂粒を含む	10YR7/3にぶい黄 褐色	10YR7/3にぶい黄 褐色	押し型文	6月	凹面側から面取る	凹面側から面取る	
69	平瓦	焼化灰焼成	19.6	12.0	2.6 広端部	陶・白色砂粒、石炭を含む	10YR4/1褐色	10YR4/1褐色	刷印き目	6月	凹面側から面取る	凹面側から面取る	
70	平瓦	還元灰焼成	10.9	17.0	2.3 狭端部	白色砂粒、石炭を含む	2.5Y4/1黄灰	2.5Y4/1黄灰	刷印き目	6月	凹面側から面取る	凹面側から面取る	
71	平瓦	焼化灰焼成	19.5	19.0	2.3 狭端欠	0.3~1.0mmを含む	10YR7/2にぶい黄 褐色	10YR7/2にぶい黄 褐色	刷印き目	6月	凹面側から面取る	凹面側から面取る	
72	平瓦	焼化灰焼成	21.8	11.0	2.6 広端部	褐色砂粒、石炭を含む	7.5YR4/2灰褐色	7.5YR4/2灰褐色	刷印き目	6月			
73	平瓦	還元灰焼成	19.9	12.0	2.3 広端部	陶・白色砂粒を含む	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	刷印き目	6月	凹面側から面取る	凹面側から面取る	
74	平瓦	焼化灰焼成	14.0	15.0	2.2 狭端部	0.5mm、褐色砂粒を含む	10YR5/2灰黄褐色	10YR5/2にぶい黄 褐色	刷印き目	6月	断面側面側で	凹面側から面取る	
75	平瓦	焼化灰焼成	11.0	14.0	1.8 広端部	褐色砂粒、石炭を含む	10YR7/2にぶい黄 褐色	10YR7/2にぶい黄 褐色	刷印き目	6月	断面側面側で	凹面側から面取る	
76	平瓦	焼化灰焼成	17.5	8.5	1.8 狭端部	陶・白色砂粒、石炭を含む	10YR4/1褐色	10YR4/2灰黄褐色	刷印き目	6月	凹面側から面取る	凹面側から面取る	
77	平瓦	焼化灰焼成	15.7	11.8	2.2 狭端部	白色砂粒、石炭を含む	10YR5/2灰黄褐色	10YR5/2にぶい黄 褐色	刷印き目	6月	断面側面側で	凹面側から面取る	
78	平瓦	焼化灰焼成	17.0	11.3	2.3 広端部	褐色砂粒、石炭を含む	10YR4/2灰黄褐色	10YR4/2にぶい黄 褐色	刷印き目	6月	断面側面側で	凹面側から面取る	
79	平瓦	還元灰焼成	17.0	14.5	1.8 狭端部	褐色砂粒、石炭を含む	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	刷印き目	6月	凹面側から面取る	凹面側から面取る	
80	平瓦	焼化灰焼成	12.0	9.2	1.9 狭端部	陶・白色砂粒を含む	10YR7/3にぶい黄 褐色	10YR7/3にぶい黄 褐色	刷印き目	6月	凹面側から面取る	凹面側から面取る	
81	平瓦	焼化灰焼成	16.0	8.8	3.0 広端部	褐色砂粒、石炭を含む	7.5YR4/2灰褐色	7.5YR4/1褐色	刷印き目	6月			
82	平瓦	焼化灰焼成	11.0	10.8	2.5 広端部	褐色砂粒、石炭を含む	10YR7/3にぶい黄 褐色	10YR7/3にぶい黄 褐色	刷印き目	6月	断面側面側で		
83	平瓦	還元灰焼成	14.0	7.0	2.2 広端部	白・褐色砂粒を含む	10Y5/1灰	7.5Y5/1灰	刷印き目	6月	断面側面側で		
84	平瓦	還元灰焼成	12.2	6.8	2.3 広端部	白色砂粒、石炭を含む	10YR4/1褐色	10YR5/1黄灰	刷印き目	6月	断面側面側で		
85	平瓦	焼化灰焼成	10.0	9.8	1.8 広端部	白色砂粒、石炭を含む	7.5YR6/4にぶい黄 褐色	7.5YR4/2灰褐色	刷印き目	6月	断面側面側で		
86	平瓦	焼化灰焼成	12.5	8.2	1.5 広端部	褐色砂粒を含む	10YR4/2灰黄褐色	10YR5/2にぶい黄 褐色	刷印き目	6月	断面側面側で	凹面側から面取る	
87	平瓦	焼化灰焼成	8.0	10.0	2.0 広端部	褐色砂粒、石炭を含む	10YR4/1褐色	10YR4/1褐色	刷印き目	6月	断面側面側で	凹面側から面取る	
88	平瓦	還元灰焼成	6.8	9.2	2.3 狭端部	陶・褐色砂粒、石炭を含む	N5/灰	N5/灰	刷印き目	6月	断面側面側で	凹面側から面取る	
89	平瓦	還元灰焼成	6.9	5.6	2.1 狭端部	褐色砂粒、石炭を含む	5Y6/1灰	5Y6/1灰	刷印き目	6月	断面側面側で	凹面側から面取る	
90	平瓦	還元灰焼成	6.9	4.0	2.3 広端部	陶・白色砂粒を含む	5Y5/1灰	5Y6/1灰	刷印き目	6月	断面側面側で	凹面側から面取る	

表13 信濃国分寺跡出土瓦観察表

No	種類	焼成	最大径	最大長さ	焼成	胎土	凸面色調	凹面色調	凸面装飾	凹面装飾	側面装飾	備考・特記
91	丸瓦	還元炭焼成	17.3	9.2	3.2 玉縁～側部	褐色砂粒を含む	10YR7/2にぶい黄褐色	10YR7/1灰白	縦筋り 横で	布目	凹面側から面取る	
92	丸瓦	酸化炭焼成	24.5	15.5	2.7 広端部	白色砂粒、石英を含む 0.3～0.5の濃、白色砂粒を含む	10YR4/2灰青褐色	10YR5/2灰青褐色	横叩き目	布目	端面側面側で面取る	
93	丸瓦	還元炭焼成	23.7	14.5	3.5 玉縁～側部	褐色砂粒を含む	10YR4/1褐色	10YR4/1褐色	縦筋り	布目		
94	丸瓦	還元炭焼成	7.0	5.0	1.9 狭端部	褐・白色砂粒を含む	10YR7/2にぶい黄褐色	10YR7/2にぶい黄褐色	横叩き目	布目	端面側面側で凹面側から面取る	
95	軒丸瓦	還元炭焼成	(18.0)		3.3 瓦当～側上部	褐色砂粒を含む	10YR2/1黒	10YR2/1黒				八雲坂寺遺構文
96	軒丸瓦	還元炭焼成	(18.0)		瓦当部	褐色砂粒を含む	10YR5/1灰	10YR5/1灰				
97	軒平瓦	還元炭焼成	5.9	20.5	5.9 瓦当部	褐・白色砂粒を含む	10YR4/2灰青褐色	10YR4/2灰青褐色		布目		何正忍生苔草文
98	軒平瓦	還元炭焼成	4.5	3.2	瓦当部	褐色砂粒を含む	7.5YR6/3にぶい黄褐色	7.5YR6/3にぶい黄褐色				
99	丸瓦	還元炭焼成	18.4	15.6	3.4 玉縁～側部	白色砂粒を含む	10YR6/2灰青褐色	10YR6/2灰青褐色	縦筋り 横で	布目	凹面側から面取る	
100	丸瓦	還元炭焼成	14.5	12.7	2.9 玉縁～側部	褐色砂粒を含む	10YR4/1褐色	10YR4/1褐色	横で	布目	玉縁上部側面側で面取る	
101	丸瓦	還元炭焼成	12.7	10.3	2.9 玉縁～側部	褐色砂粒を含む	7.5Y5/1灰	7.5Y5/1灰	横で	布目	凹面側から面取る	
102	丸瓦	還元炭焼成	11.2	11.8	3.0 玉縁～側部	白色砂粒を含む	7.5YR7/2暗褐色	7.5YR7/2暗褐色	横で	布目	凹面側から面取る	
103	丸瓦	還元炭焼成	26.2	11.0	2.6 玉縁～側部	白色砂粒を含む	10YR4/1褐色	10YR4/1褐色	縦筋り 横で	布目	凹面側から面取る	
104	丸瓦	還元炭焼成	11.5	8.6	2.7 側部広端	白色砂粒を含む	5Y3/1黒	5Y3/1黒	横で	布目	凹面側から面取る	
105	丸瓦	還元炭焼成	9.5	6.2	3.2 玉縁～側部	白色砂粒を含む	7.5Y5/1灰	7.5Y5/1灰	横で	布目	玉縁上部側面側から面取る	
106	丸瓦	還元炭焼成	8.2	7.0	3.2 側部広端	褐色砂粒を含む	10YR6/3にぶい黄褐色	5Y 6/1灰	横で	布目	凹面側から面取る	
107	丸瓦	還元炭焼成	17.8	10.3	3.5 玉縁～側部	白色砂粒を含む	10YR5/2灰青褐色	10YR4/4褐色	斜毛目 横で	布目		
108	丸瓦	還元炭焼成	10.2	10.5	3.3 側部広端	褐・白色砂粒を含む	10YR4/1褐色	10YR4/1褐色	横で	布目	凹面側から面取る	
109	丸瓦	還元炭焼成	10.4	8.0	3.4 側部広端	褐色砂粒を含む	2.5Y6/1黄褐色	2.5Y6/1黄褐色	縦筋り	布目	凹面側から広く、凹面側側から狭く面取る	
110	丸瓦	還元炭焼成	7.2	5.5	1.3 玉縁部	褐色砂粒、石英を含む	10YR4/1褐色	10YR4/1褐色	縦筋り 横で	布目	凹面側から面取る	
111	丸瓦	還元炭焼成	5.0	5.0	3.1 側部広端	褐色砂粒、石英を含む	10YR6/1褐色	2.5Y5/2暗褐色	横で	布目	凹面側から面取る	
112	丸瓦	還元炭焼成	7.0	6.2	2.6 側部広端	褐・白色砂粒を含む	2.5Y3/2暗褐色	2.5Y3/2暗褐色	横で	布目	凹面側から面取る	
113	丸瓦	還元炭焼成	6.3	6.7	1.1 玉縁部	褐色砂粒を含む	7.5Y5/1灰	7.5Y5/1灰	横で	布目	端面側面側で凹面側から面取る	
114	丸瓦	還元炭焼成	5.7	5.6	1.3 玉縁部	白色砂粒、石英を含む	5Y4/1灰	5Y4/1灰	横で	布目	端面側面側で凹面側から面取る	
115	丸瓦	還元炭焼成	5.0	4.8	1.2 玉縁部	褐色砂粒を含む	2.5Y5/2暗褐色	2.5Y5/2暗褐色	横で	布目	凹面側から面取る	

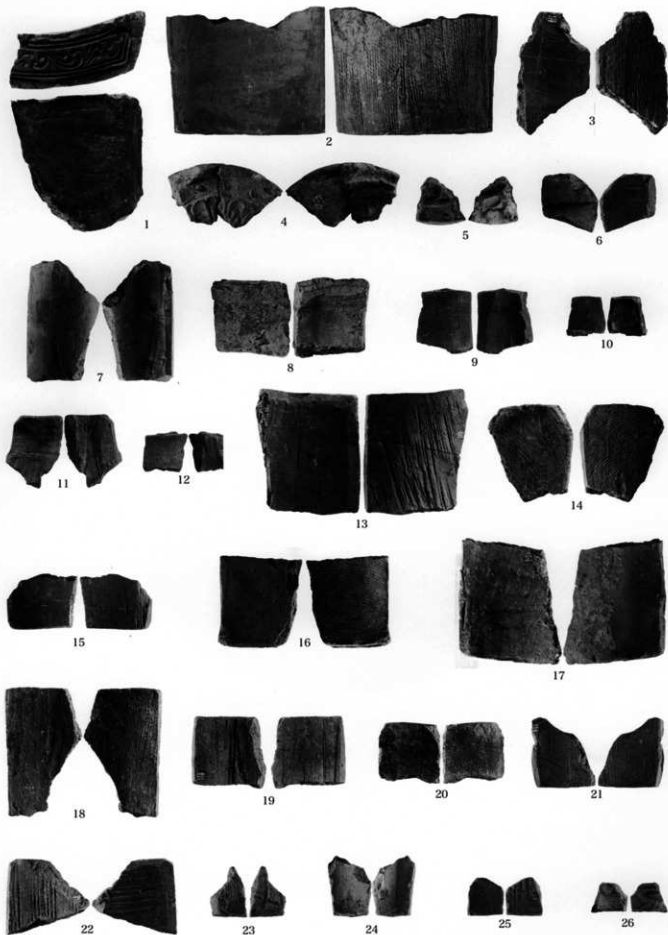
表 14 信濃国分寺跡出土瓦観察表 6

No	種類	焼成	最大径	最大幅	残存	胎土	凸面色調	凹面色調	凸面調整	凹面調整	側面調整	備考・特記
116	丸瓦	還元炭焼成	6.0	3.0	1.7 側部残部	褐・白色砂粒を含む	10YR1.7/1黒	10YR1.7/1黒	無で	布目	凹面・凸面両面調整から面取る	
117	丸瓦	還元炭焼成	5.5	2.7	1.7 側部残部	褐色砂粒、石英を含む	2.5Y5/1黒褐	2.5Y5/1黒褐	無で	布目	凹面側から面取る	
118	丸瓦	還元炭焼成	6.0	2.0	1.5 上縁部	白色砂粒を含む	7.5Y5/1灰	7.5Y5/1灰	無で	布目	凹面側から面取る	
119	丸瓦	還元炭焼成	5.7	2.0	1.3 側部残部	白色砂粒、石英を含む	10YR4.1/褐灰	10YR4.1/褐灰	無で	布目	凹面・凸面両面調整から面取る	
120	丸瓦	還元炭焼成	5.0	3.2	1.3 上縁部	白色砂粒、石英を含む	10YR1.7/1黒	10YR1.7/1黒	無で	布目	凹面・凸面両面調整から面取る	
121	平瓦	還元炭焼成	12.0	12.5	1.8 広端部	白色砂粒、石英を含む	10YR1.7/1黒	10YR1.7/1黒	横叩き目 無で	布目	凹面側から面取る	
122	平瓦	酸化炭焼成	11.0	12.0	1.7 狭端部	褐・白色砂粒、重砂を含む	10YR7/2にぶい黒	10YR7/2にぶい黒	押し型文	布目	凹面側から狭く面取る	
123	平瓦	酸化炭焼成	12.0	10.6	2.9 広端部	0.3~0.5の濃、褐色砂粒を含む	10YR6/2灰黄褐	10YR6/3にぶい黄	刷毛無で	布目	凹面側から広く面取る	
124	平瓦	還元炭焼成	19.1	9.2	1.9 広端部	褐・白色砂粒を含む	10YR4.2/灰黄褐	10YR5/2灰黄褐	横叩き目	布目	凹面側から2度面取る	
125	平瓦	還元炭焼成	14.1	6.6	1.9 広端部	褐・白色砂粒、石灰を含む	10YR1.7/1黒	10YR1.7/1黒	横叩き目	布目	凹面側から広く面取る	
126	平瓦	還元炭焼成	10.4	14.5	2.5 広端部	褐・白色砂粒を含む	10YR6/3にぶい黄	10YR6/3にぶい黄	横叩き目	布目	凹面側から面取る	
127	平瓦	酸化炭焼成	15.0	8.3	1.6 狭端部	褐・白色砂粒を含む	7.5YR6/1灰~7/3にぶい黒	7.5YR6/3にぶい黄	横叩き目	布目	凹面側から面取る	
128	平瓦	還元炭焼成	9.9	9.0	1.6 狭端部	白色砂粒を含む	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	横叩き目 木口状工	布目	凹面側から狭く面取る	
129	平瓦	還元炭焼成	8.0	10.5	2.1 広端部	褐色砂粒を含む	5Y6/2灰オリーブ	5Y6/2灰オリーブ	横叩き目 横叩き目	布目	凹面側から広く面取る	
130	平瓦	還元炭焼成	16.5	9.3	1.9 広端部	褐色砂粒を含む	10YR5/3にぶい黒	10YR7/2にぶい黄	横叩き目	布目	凹面側から面取る	
131	平瓦	酸化炭焼成	7.5	7.0	2.0 狭端部	褐・白色砂粒を含む	10YR6/3にぶい黄	5Y7/1灰白	横叩き目	布目	凹面側から面取る	
132	平瓦	酸化炭焼成	9.6	6.3	2.0 広端部	褐色砂粒を含む	10YR3/2黒褐	10YR3/2黒褐	横叩き目	布目	凹面側から面取る	
133	平瓦	還元炭焼成	11.0	5.5	1.9 広端部	褐色砂粒、石灰を含む	2.5Y5/2暗灰黄	2.5Y5/2暗灰黄	横叩き目	布目	凹面側から面取る	
134	平瓦	酸化炭焼成	7.7	7.5	2.0 狭端部	白色砂粒、石灰を含む	10YR1.7/1黒	10YR1.7/1黒	横叩き目	布目	凹面側から面取る	
135	平瓦	還元炭焼成	7.8	7.2	2.3 広端部	褐・白色砂粒を含む	2.5Y5/1黒褐	2.5Y5/1黒褐	横叩き目	布目	凹面側から狭く面取る	
136	平瓦	還元炭焼成	7.0	7.0	1.7 狭端部	褐・白色砂粒、石灰を含む	2.5Y6/2灰黄	2.5Y6/2灰黄	横叩き目	布目	凹面側から面取る	
137	平瓦	還元炭焼成	7.2	5.8	2.3 狭端部	褐・白色砂粒を含む	2.5Y4/2暗灰黄	2.5Y4/2暗灰黄	横叩き目	布目	凹面・凸面両面調整から面取る	
138	平瓦	還元炭焼成	7.3	8.2	2.2 広端部	白色砂粒を含む	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	横叩き目	布目	凹面側から面取る	
139	平瓦	酸化炭焼成	8.5	8.5	1.7 狭端部	褐・白色砂粒を含む	7.5YR5/9暗褐	7.5YR5/9暗褐	横叩き目 無で	布目	凹面側から面取る	

表 15 信濃国分寺跡出土瓦観察表 7

140	平瓦	還元炭焼成	6.5	5.6	1.2	広瀬部	白色砂粒を含む 0.3~0.5の礫、褐色 砂粒、石灰を含む	7.5YR5/1灰 10YR5/3に多い 黄褐	箇所	布目	阿面側面から面取る
141	平瓦	還元炭焼成	6.4	6.0	2.2	狭瀬部			隅切き目	布目	阿面側面から面取る
142	平瓦	還元炭焼成	5.6	8.0	1.9	狭瀬部	陶・白色砂粒を含む	2.5Y4/1黄灰	隅切き目	布目	阿面側面から面取る
143	平瓦	還元炭焼成	5.9	7.2	1.5	狭瀬部	褐色砂粒を含む	2.5Y6/1黄灰	隅切き目	布目	阿面側面から面取る
144	平瓦	還元炭焼成	5.1	5.4	1.8	狭瀬部	褐色砂粒を含む	2.5Y6/1黄灰	隅切き目	布目	阿面側面から面取る

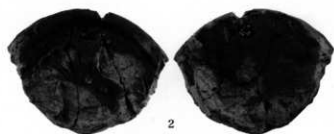
表 16 信濃国分寺跡出土瓦観察表 8



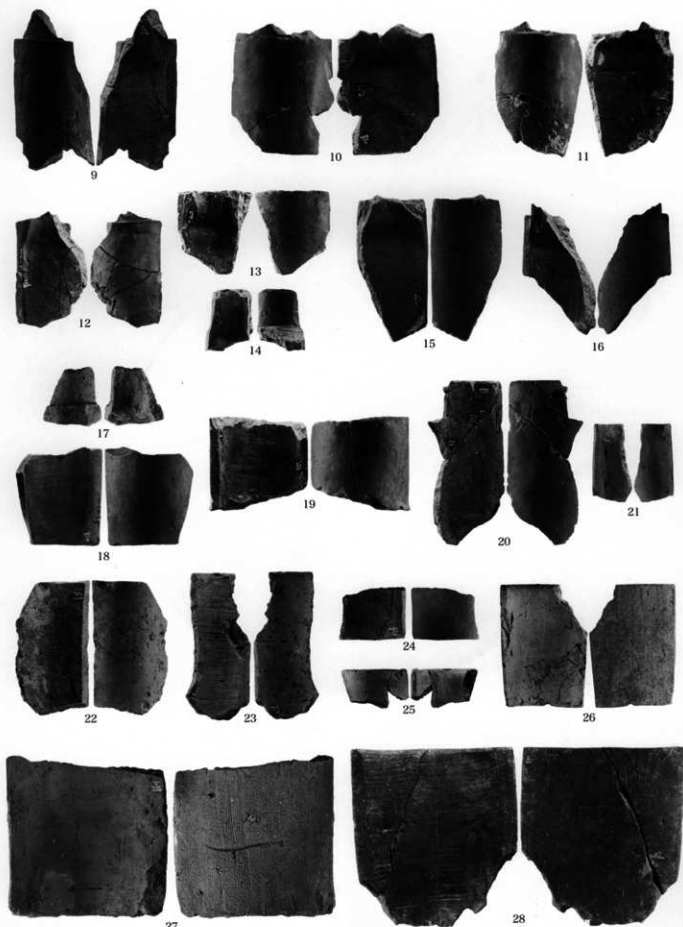
写真図版 1 平成 22 年度出土瓦 1



写真図版2 平成23年度出土瓦2



写真図版3 平成24年度出土瓦1



写真図版4 平成24年度出土瓦2



29



30



31



32



33



34



35



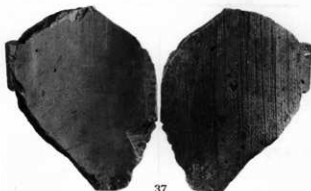
36



37



38



写真図版5 平成24年度出土瓦3



38



39



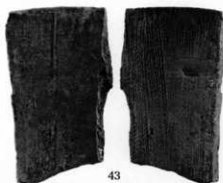
40



41



42



43



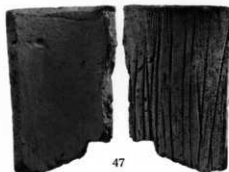
44



45

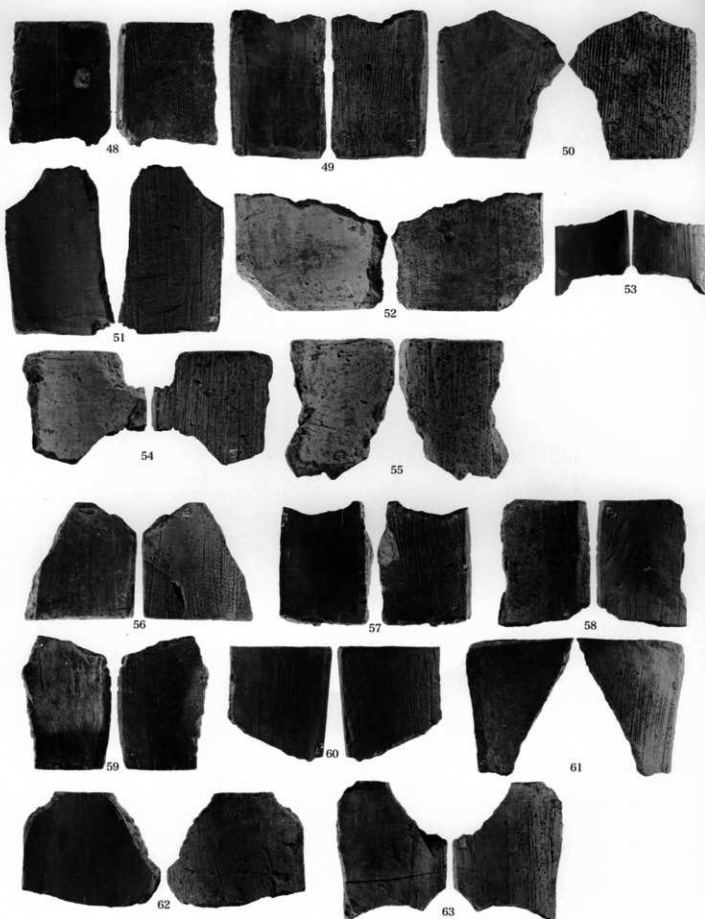


46

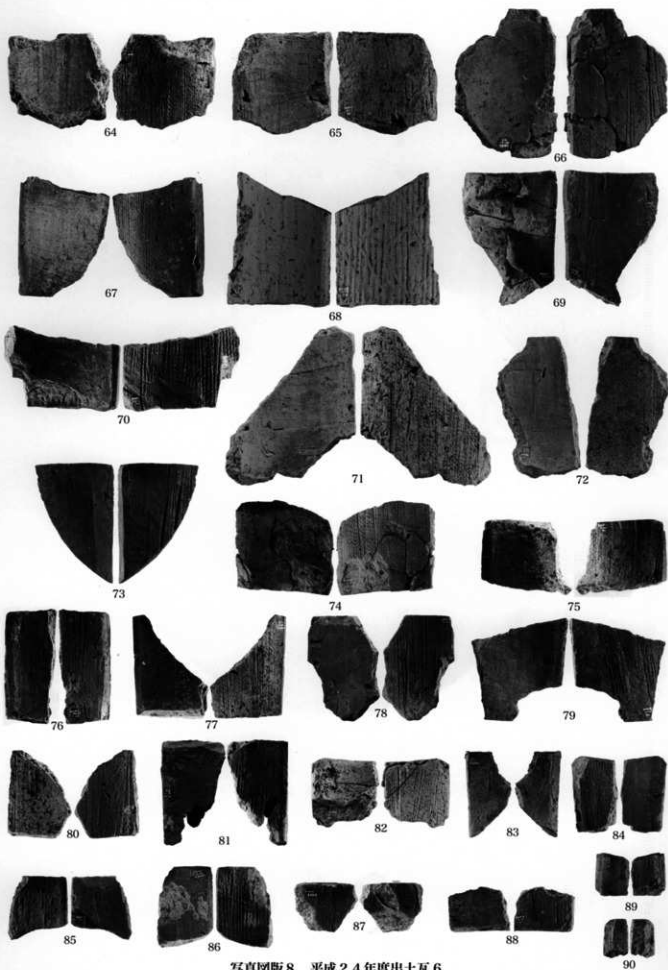


47

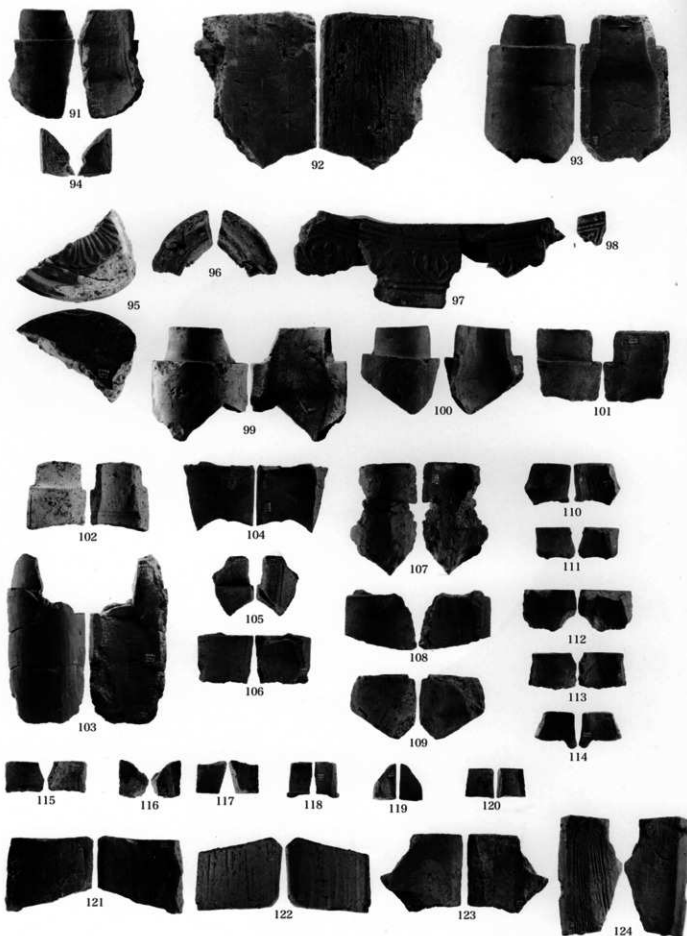
写真図版6 平成24年度出土瓦4



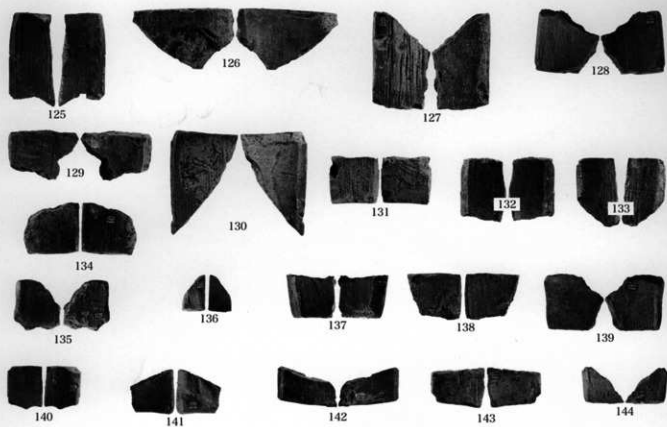
写真図版7 平成24年度出土瓦5



写真図版8 平成24年度出土瓦6



写真図版9 平成24年度出土瓦7



写真図版 10 平成 24 年度出土瓦 8



写真図版 11 平成 24 年度出土瓦塔片

報告書抄録

ふりがな	しせきしなのこくぶんじあと
書名	史跡信濃国分寺跡
副書名	平成18(2006)年度～平成21(2009)年度記念物保存修理事業に伴う史跡信濃国分寺跡発掘調査報告書
シリーズ名	上田市文化財調査報告書
シリーズ番号	第117集
編著者名	中沢健士
編集機関	上田市教育委員会
所在地	〒386-0025 長野県上田市天神二丁目4番55号 TEL0268(23)6361
発行年月日	西暦2013年3月25日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
信濃国分寺跡	上田市 国分 1125(代表地番)	20203	36° 22' 50"	138° 16' 24"	平成22年9月15日 ～ 平成24年12月26日	2,600㎡	記念物保存 修理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
信濃国分寺跡	寺院	古代及び古墳時代後期～中世	堅穴建物跡・ 掘立柱建物跡・ 溝跡・ピット	土師器・須恵器・ 布目瓦・灰釉陶器・ 緑釉陶器・磁器	

上田市文化財調査報告書第117集

史跡信濃国分寺跡

平成22(2010)～平成24(2012)年度

史跡信濃国分寺跡発掘調査報告書

発行日 平成26(2014)年3月25日

発行 上田市・上田市教育委員会

長野県上田市天神二丁目4番55号 TEL0268(23)6361

印刷 中沢印刷

〒386-0002 長野県上田市住吉1-6